松浦市文化財調査報告書 第12集

田 川 遺 跡

竜尾川地区県営ほ場整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

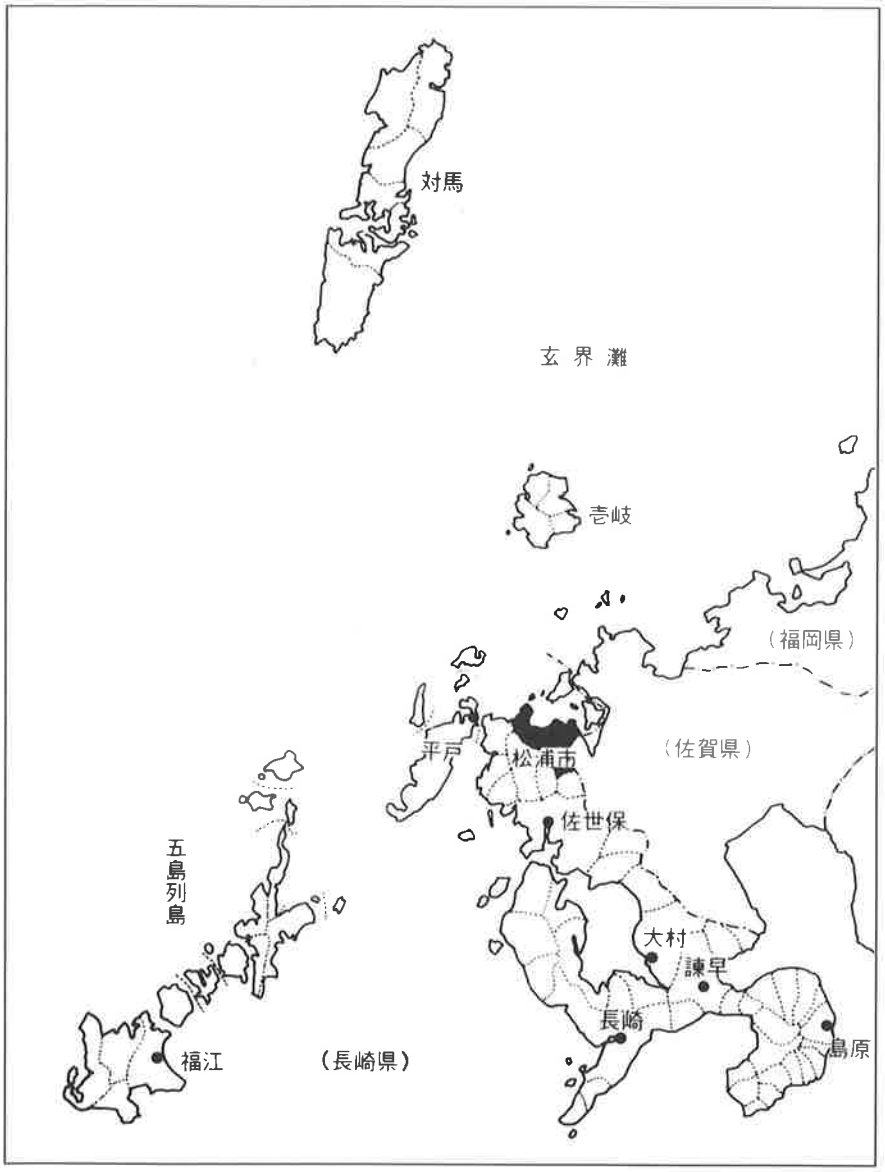
1997

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書 第12集

田 川 遺 跡

竜尾川地区県営ほ場整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

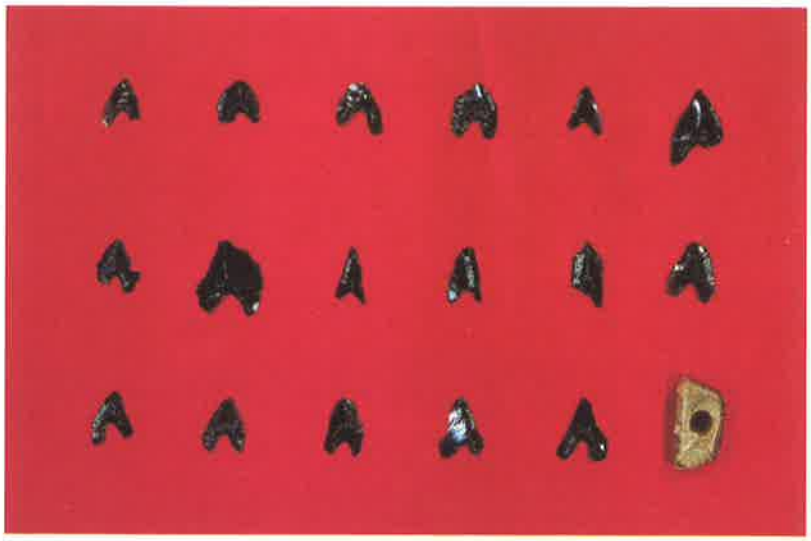


1997

長崎県松浦市教育委員会

田川遺跡空中写真

ナイフ形石器・台形石器（A地点）



剝片鏃 他（B地点）

土師器（C地点）

発刊にあたって

松浦市は、日本列島の西端に位置し、中国大陸・朝鮮半島とも近いという地理的条件から、旧石器時代から中世期にかけての埋蔵文化財が数多く存在しております。

近年、本市においても各地で開発事業が相次いで行われ、埋蔵文化財の発掘調査が後を絶ちません。

今回、松浦市教育委員会では、平成６年・７年度に長崎県県北振興局の委託を受けて、竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う田川遺跡の発掘調査を行いました。その結果、３地点の調査で旧石器時代から中世期にかけての遺物と掘立柱建物跡などが検出され、貴重な資料を得ることができました。

この報告書はその発掘調査の成果をまとめたものであり、決して満足のできるものではございませんが、学術研究に少しでも寄与でき、市民の皆様が埋蔵文化財に対する理解と認識、さらに文化財保護の向上に役立てれば幸いと存じます。

今回の調査に際しましては、関係者のご理解と、多くの方々のご参加を得て実施することができました。特にご協力をいただいた土地所有者の方々に心より深く感謝申し上げます。また、長崎県県北振興局及び長崎県教育委員会をはじめ多くの人たちのご指導、ご理解を賜りました。ここに厚くお礼申し上げ発刊のご挨拶といたします。

平成９年３月

長崎県松浦市教育委員会

教育長　黒　川　壽　信

例　　言

1．本書は、平成６年度から平成７年度にかけて実施した竜尾川地区県営圃場事業に伴う田川遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査及び本報告書作成にあたっては、長崎県県北振興局と委託契約を結び松浦市教育委員会があたった。

3．調査にあたっては、長崎県文化課・松浦市農林課の協力を受けた。

4．調査は、松浦市教育委員会社会教育課が行い、社会教育主事中田敦之があたった。

5．本書の執筆・編集は中田と高原　愛（文化財調査員）があたり、遺物の実測には、社会教育課主事内野　義、文化財調査員高原と宮川泰男（現南高来郡有明町教育委員会）の協力を得た。

6．調査によって出土した遺物は、松浦市教育委員会がその保管の任にあたっている。

7．写真図版の縮尺は不統一である。

8．本書は、松浦市文化財調査報告書第12集にあたる。

本　文　目　次

発刊にあたって

例　　言

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査に至る経過……1

2．調査関係者……2

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境……3

2．歴史的環境……4

3．確認調査……9

Ⅲ．発掘調査

1．Ａ地点の調査……11

2．Ｂ地点の調査……25

3．Ｃ地点の調査……65

4．古環境研究所……71

Ⅳ．考　　察……81

挿　図　目　次

松浦市位置図
第１図　松浦市地質図 …… 3
第２図　松浦市西部地区遺跡分布図 …… 5
第３図　田川遺跡位置図 …… 7
第４図　第１次確認調査区設定図 …… 9
第５図　第１次確認調査出土遺物 …… 10
第６図　Ａ地点調査区設定図 …… 11
第７図　Ａ地点土層図 …… 13
第８図　Ａ地点出土遺物１ …… 14
第９図　Ａ地点出土遺物２ …… 15
第10図　Ａ地点出土遺物３ …… 16
第11図　Ａ地点出土遺物４ …… 17
第12図　Ａ地点出土遺物５ …… 19
第13図　Ａ地点出土遺物６ …… 20
第14図　Ａ地点出土遺物７ …… 22
第15図　Ａ地点出土遺物８ …… 23
第16図　Ｂ地点調査区設定図 …… 25
第17図　Ｂ地点土層図 …… 26
第18図　Ｂ地点遺構図 …… 27～30
第19図　Ｂ地点掘立柱建物図 …… 32
第20図　Ｂ地点土壙図 …… 33
第21図　Ｂ地点出土遺物１ …… 34
第22図　Ｂ地点出土遺物２ …… 35
第23図　Ｂ地点出土遺物３ …… 36
第24図　Ｂ地点出土遺物４ …… 37
第25図　Ｂ地点出土遺物５ …… 38
第26図　Ｂ地点出土遺物６ …… 39
第27図　Ｂ地点出土遺物７ …… 40
第28図　Ｂ地点出土遺物８ …… 41
第29図　Ｂ地点出土遺物９ …… 43
第30図　Ｂ地点出土遺物10 …… 44
第31図　Ｂ地点出土遺物11 …… 45
第32図　Ｂ地点出土遺物12 …… 46
第33図　Ｂ地点出土遺物13 …… 47
第34図　Ｂ地点出土遺物14 …… 48
第35図　Ｂ地点出土遺物15 …… 49
第36図　Ｂ地点出土遺物16 …… 50
第37図　Ｂ地点出土遺物17 …… 52
第38図　Ｂ地点出土遺物18 …… 53
第39図　Ｂ地点出土遺物19 …… 54
第40図　Ｂ地点出土遺物20 …… 55
第41図　Ｂ地点出土遺物21 …… 56
第42図　Ｂ地点出土遺物22 …… 57
第43図　Ｂ地点出土遺物23 …… 58
第44図　Ｂ地点出土遺物24 …… 59
第45図　Ｂ地点出土遺物25 …… 60
第46図　Ｂ地点出土遺物26 …… 62
第47図　Ｂ地点出土遺物27 …… 63
第48図　Ｃ地点調査区設定図 …… 65
第49図　Ｃ地点土層図 …… 66
第50図　Ｃ地点遺構図 …… 67
第51図　Ｃ地点出土遺物１ …… 68
第52図　Ｃ地点出土遺物２ …… 69

図　版　目　次

口絵１　田川遺跡空中写真

口絵２－１　ナイフ形石器・台形石器（Ａ地点）

口絵２－２　剝片鏃他（Ｂ地点）

口絵２－３　土師器（Ｃ地点）

図版１　Ａ地点遠景・17号小排水路土層 ……89

図版２　Ａ地点溜堀土層 ……90

図版３　Ａ地点溜堀土層・溜堀調査風景 ……91

図版４　Ｂ地点遠景・土層 ……92

図版５　Ｂ地点土層 ……93

図版６　Ｂ地点配石遺構南側 ……94

図版７　Ｂ地点配石遺構南側・北側 ……95

図版８　Ｂ地点柱穴群・土壙検出状況 ……96

図版９　Ｂ地点柱穴半裁状況・土壙検出状況 ……97

図版10　Ｂ地点遺物出土状況・調査風景 ……98

図版11　Ｃ地点土層・柱穴群検出状況 ……99

図版12　Ａ地点出土遺物１・２ ……100

図版13　Ａ地点出土遺物３・４ ……101

図版14　Ａ地点出土遺物５ ……102

図版15　Ａ地点出土遺物６ ……103

図版16　Ｂ地点出土遺物１・２ ……104

図版17　Ｂ地点出土遺物３・４ ……105

図版18　Ｂ地点出土遺物５・６ ……106

図版19　Ｂ地点出土遺物７・８ ……107

図版20　Ｂ地点出土遺物９・10 ……108

図版21　Ｂ地点出土遺物11 ……109

図版22　Ｂ地点出土遺物12 ……110

図版23　Ｂ地点出土遺物13 ……111

図版24　Ｂ地点出土遺物14 ……112

図版25　Ｂ地点出土遺物15 ……113

図版26　Ｂ地点出土遺物16 ……114

図版27　Ｂ地点出土遺物17 ……115

図版28　Ｂ地点出土遺物18 ……116

図版29　Ｃ地点出土遺物 ……117

表　目　次

表１　松浦市西部地区遺跡一覧表 ……６

表２　Ｂ地点柱穴内出土遺物一覧表 ……31

表３　Ａ地点石器観察表 ……75

表４　Ｂ地点石器観察表(1) ……76

表５　Ｂ地点石器観察表(2) ……77

表６　Ｂ地点石器観察表(3) ……78

表７　Ｂ地点石器観察表(4) ……79

表８　Ｂ地点石器観察表(5) ……80

表９　Ｃ地点石器観察表 ……80

Ⅰ はじめに

1．発掘調査に至る経過

松浦市における埋蔵文化財保護行政は、この数年、農業基盤整備事業等の公共事業をはじめ、個人住宅建設等の民間事業も増加している。

こんな中で長崎県においては、昭和58年度に10カ年間の第三次土地改良長期計画を策定し、県内各地で農業基盤整備事業を推進している。

県営圃場整備事業は、松浦市においては御厨町竜尾川地区が昭和61年に計画され、それに伴って埋蔵文化財についても長崎県県北振興局・市農林課と市教育委員会と協議を重ねている。市教育委員会では平成元年度から遺跡の規模・範囲を把握し、協議に必要な資料を得るために国庫補助・県費補助を受けて確認調査を実施している。平成元年度には寺ノ尾Ｃ遺跡・田原積石塚（田原遺跡と名称変更）の調査を、平成２年度には田川遺跡の調査を行っている。この確認調査の結果、寺ノ尾Ｃ遺跡・田原遺跡・田川遺跡で遺物包含層を確認したので、その結果をもとに再度協議を行い、寺ノ尾Ｃ遺跡については現状にて保護されている。田原遺跡については平成２年度に緊急発掘調査を実施している。

田川遺跡については、平成６年11月から埋蔵文化財の保護と開発の調整を図るため、県文化課・県北振興局・市農林課・市教育委員会との協議を行った。その結果、遺跡の重要性を十分考慮したうえで田川遺跡の現状保存を行いながら工法・事業費等の兼ね合いの中で最小面積の調査を実施することになった。まず平成６年度の事業として2.7haの圃場整備の実施に伴い、平成２年度に確認されたＡ地点の17号小排水路地区と溜堀地区の約600m²の緊急発掘調査を行うため、12月６日付けで県北振興局と松浦市との間で竜尾川地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。発掘調査は平成６年12月12日から平成７年３月28日まで行った。

平成７年５月、県北振興局より市教育委員会へ竜尾川地区県営圃場整備事業地域内おける埋蔵文化財について協議を行いたい旨の連絡があり、５月30日に協議を行った。対象地区は平成６年度に発掘調査を実施した地点の南側にあたり、8.2haの圃場整備事業であった。この地点も平成２年度に確認したＢ地点・Ｃ地点にあたっており、計画ではＢ地点を東西に走る41－４号支線道路地区と圃場面で削平される地区の約1,240m²の調査対象面積であった。この調査も県北振興局と松浦市との間で竜尾川地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成７年６月29日から平成８年３月25日まで行った。なお、その期間中には国庫補助事業及び民間宅地造成に伴う確認調査も合わせて行っている。

また、圃場整備事業は九州農政局においても実施されるようになり、まず、平成８年度から長崎県県北の１市６町で国営農地再編整備事業に取り組んでいる。松浦市では平成７年度から国庫補助事業として市内の国営農地再編整備事業に伴う７遺跡の確認調査も行っている。平成８年度には国営農地再編整備事業のモデル地区内に所在する今福遺跡の緊急発掘調査も実施している。

2．調査関係者（敬称略）

調査主体　松浦市教育委員会

調査総括　黒川壽信（教育長）

事務局　橋口　達（社会教育課長、平成８年３月まで）

川上啓一（社会教育課長、平成８年４月から）

調査担当　中田敦之（社会教育課社会教育主事）

整理担当　中田敦之（社会教育課社会教育主事）

内野　義（社会教育課主事）

高原　愛（社会教育課文化財調査員）

宮川泰男（社会教育課文化財調査員、平成９年２月まで）

調査協力者　吉田日出男・福守　繁・福守　富男・松田　和博・吉田　ハル・大久保ウメ子・里森知恵子・辻　礼子・田中ミツノ・前田　清子・今田　英子・吉田末千子・松永セツエ・村田　政子・冨野トシエ・前田　重子・久住呂久枝・濱野　スエ・江川冨美代・松田マサヨ・辻元　エン・辻　シゲ・岡村ヒサノ・辻　ハルエ・吉田　文代・山下シヅエ・稗田　絹子・辻　マスエ・氏山エイ子・森山八重美・川上　紀子・白石　啓子・天久保正子・黒田ヒサエ・田中ちゆき瀬上久美子・田中　智子・岩本　七重・氏山百合子・田中　里美

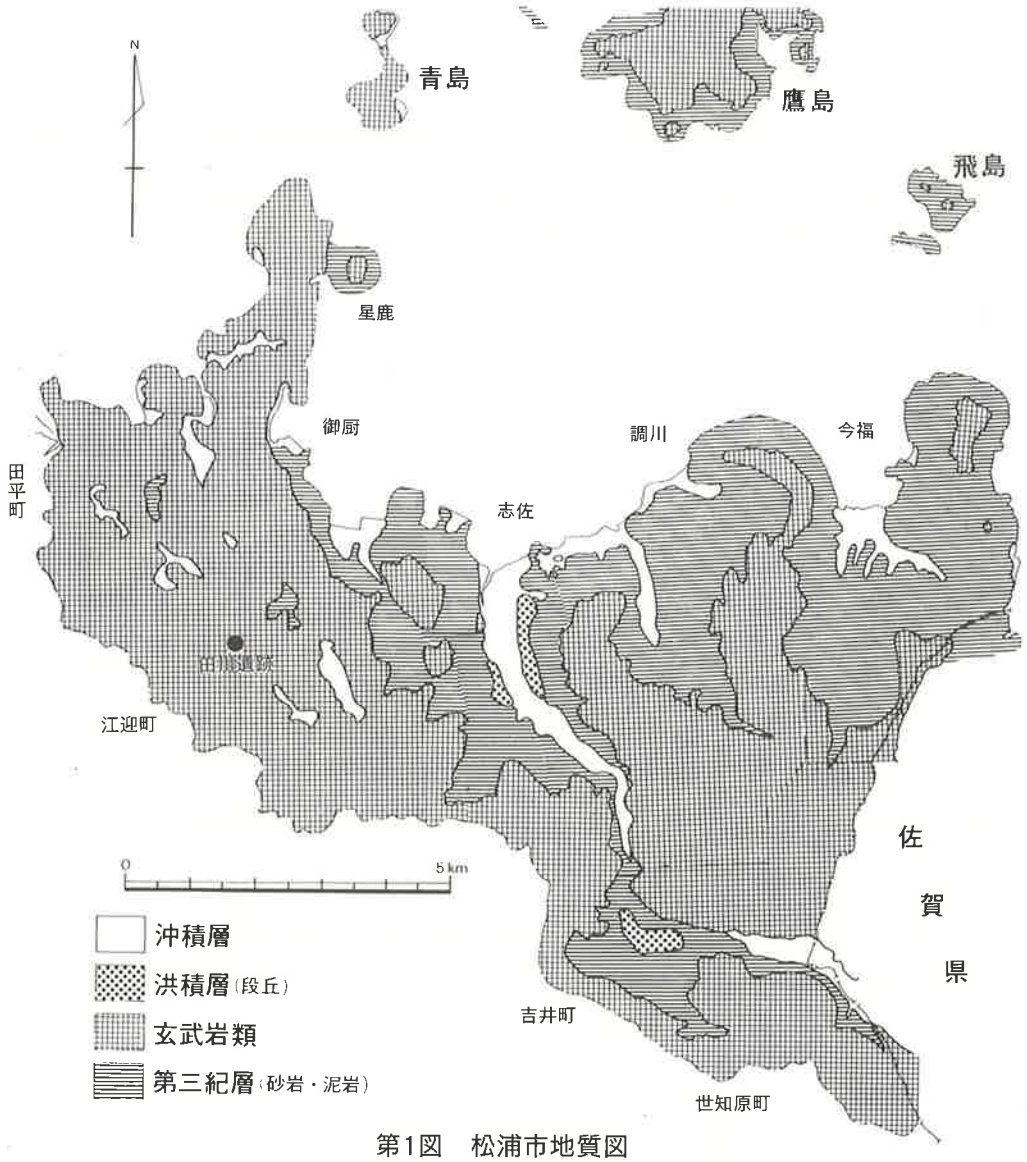
Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境（第１図）

長崎県本土の北端に位置する松浦市は、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島などのいくつかの島々から構成されている。北には伊万里湾・玄界灘、西から南にかけては北松浦郡の田平・江迎・吉井・世知原町と、東は佐賀県伊万里市と接している。市の面積は95.59km²で、平成９年１月現在の松浦市の人口は23,715人である。

市内の地質は第三紀層を基盤として、その上に玄武岩が広く堆積している地質構造をなしている。この玄武岩は、北松浦半島を中心に西北九州に広く分布する松浦玄武岩と称されるもので、典型的な溶岩台地を形成している。かつては伊万里市南方を中心として噴出した火山であったと思われる。したがって、佐賀県境を占拠する標高777ｍの国見山を主峰とし、北および西に高度を減じている。

松浦市の地勢は、南高北低をなし、河川もすべて北流している。市の南側には400～500ｍ級の高位



第1図　松浦市地質図

台地があり、悪太郎川以西では100m以下の低位台地が広がっている。市西部の星鹿半島の先端の津崎鼻や西田地区の波津崎には、玄武岩の柱状節理の海食崖が発達している。

今回調査を行った市の西部一帯は、玄武岩が不整合に覆っていたる所に玄武岩台地を形成している。この台地は、竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた低位台地となっている。中央部を流れる竜尾川は、吉井・江迎町境の白岳山麓に源を発し、木場川・田代川などの支流を集めて、低位台地を刻んで北へ流れている。河口には三角洲がほとんどつくられずラッパ状に開いた三角江となっている。

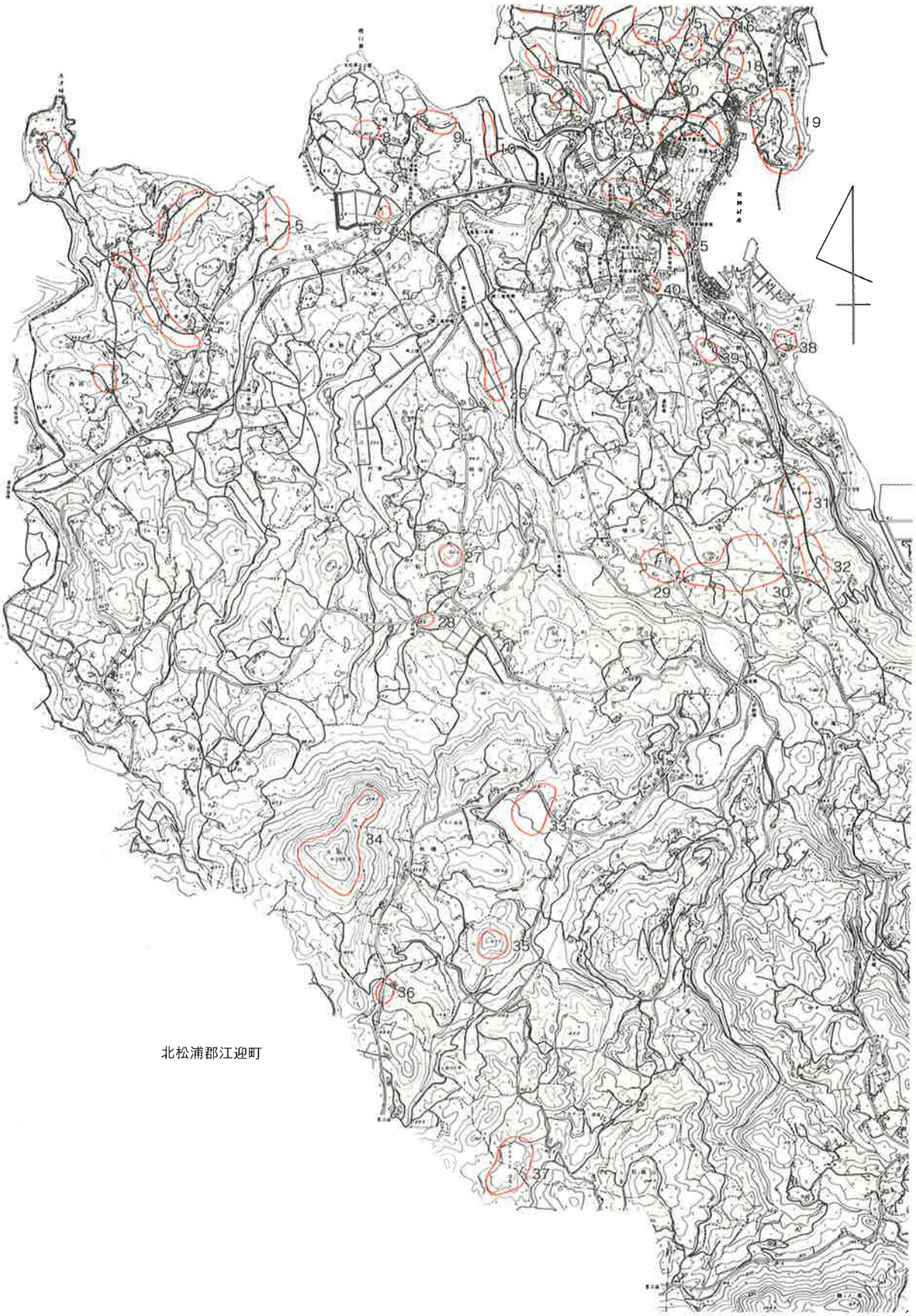
2．歴史的環境（第２図・表１・第３図）

田川遺跡は、松浦市役所より西方約4.5kmの御厨町田代免字前田・島田・神林に所在している。県道星鹿・江迎停車場線周辺の台地上にあり、確認調査により３ケ所の包含層が認められている。

松浦市内の遺跡としては、圧倒的に旧石器時代・縄文時代の遺跡が多い。特に田川遺跡の周辺は、市内でも特に遺跡の多い地域として注目されている[注1]。そんな中で松浦市の西部一帯では、かなりの昔から、しかも連綿として絶えることのない人々の遺跡が残っている。現在までのところ、旧石器時代の所産であるナイフ形石器や台形石器の資料が牟田Ｂ・Ｃ・Ｄ、中ノ崎・長蔵坊・田口高野遺跡などで確認されている。さらに、平成２年度の竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う寺ノ尾Ｃ遺跡の確認調査ではナイフ形石器・台形石器の良好な包含層が検出されている[注2]。星鹿半島一帯は、道具生産の主たる石材である黒曜石の原産地であり、この時期の遺物はことのほか多く発見されている。しかし、確認調査では良好な包含層の発見までには至っていない。

次の縄文時代では、姫神社遺跡・小嶋遺跡など良好な遺跡も知られている。姫神社遺跡は、昭和41年にアメリカのウィスコンシン大学アルバート・モアと日本人学者（内藤芳篤、吉崎昌一ら）による合同調査が行われており、その一部が英文で報告されている[注3]。この論文については福岡県教育委員会の水ノ江和同氏によって翻訳されている[注4]。同論文では縄文前期の轟式土器、曽畑式土器を中心に、中期の阿高式土器、石器では石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙などが報告されている。また、この姫神社遺跡からは萩原博文・久原巻二氏によって縄文後期の土器片と共に、石鋸・サイドブレイドが採集されている[注5]。小嶋遺跡は、昭和61年に簡易水道敷設工事に伴う緊急調査で発見した遺跡である。縄文前期の曽畑式土器、中期の阿高式土器を中心に一部他地区からの搬入土器もある。石器では石鏃・剥片鏃・石銛・滑石製装飾品・石斧などが出土している。本報告は未刊で現在整理中である[注6]。その他では、平成２年度の竜尾川地区県営圃場整備事業に伴い実施した田川遺跡の確認調査で、縄文中期の阿高式土器・剥片鏃が出土している[注7]。

弥生時代では、北久保Ｂ遺跡と姫神社遺跡で後期の壺・甕類が採集されている[注8]。さらに大正14年に発見され[注9]、現在は長崎県の重要遺跡として周知されている池田遺跡がある。この遺跡は、昭和63年から平成元年にかけて４次にわたる確認調査が行われている。その結果、縄文晩期から弥生前期にかけての良好な包含層が検出されており、柱穴・箱式石棺墓・甕棺墓・土壙等の遺構と西平式土器・刻目突帯文土器・板付Ⅱ式土器・骨製ヤス・貝輪等の遺物が出土している[注10]。その他では平成２年の竜尾川



第2図　松浦市西部地区遺跡分布図（1／30000）

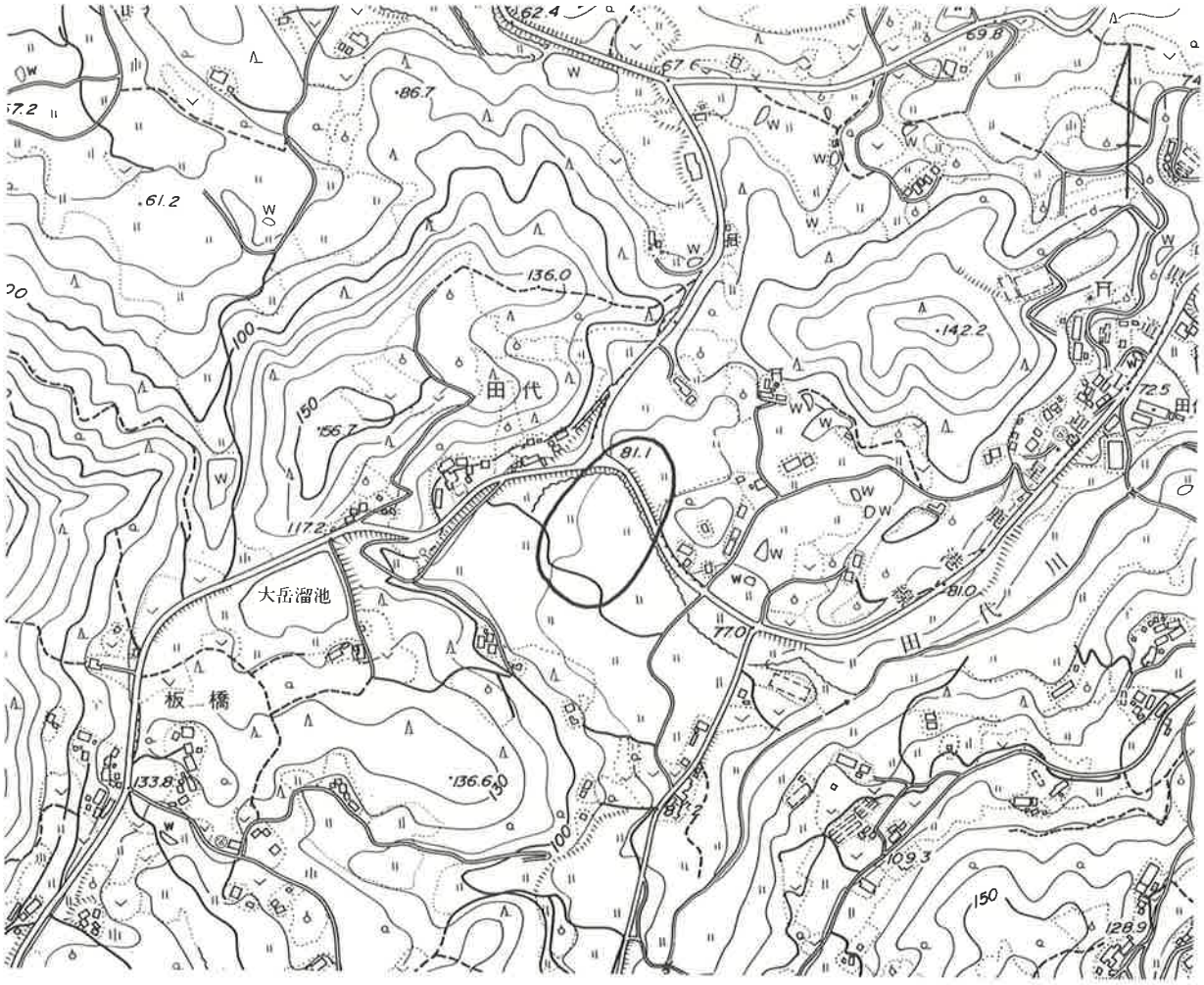
表1　松浦市西部地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	遺跡地図番号	備考
1	波津崎	星鹿町西田免波津崎	剝片	52－14	
2	西木場	〃　西田免潮入	剝片	52－15	
3	田口高野	〃　西田免田口高野・西木場免寺山	ナイフ形石器、石鏃、剝片	52－16	
4	田中	〃　西田免小田・田尻	スクレイパー、剝片	52－17	
5	下谷	〃　西木場免下谷	スクレイパー、剝片	52－18	
6	小嶋古墳群	〃　大崎免小嶋	銀環、勾玉、丸玉、鉄鏃	52－19	昭和62年調査
7	小嶋	〃　大崎免小嶋	縄文土器、石斧、石鏃、石銛	52－59	昭和61年調査
8	蕨川	〃　大崎免俵場	黒曜石原石	52－20	
9	水尻B	〃　大崎免水尻	ナイフ形石器、石斧、スクレイパー	52－21	
10	水尻A	〃　大崎免水尻	黒曜石原石	52－22	
11	戸ノ本崎	〃　牟田免池上	ナイフ形石器、石斧、石鏃	52－68	
12	佐世保崎	〃　牟田免佐世保崎	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、黒曜石原石	52－24	昭和57年調査
13	牟田池上	〃　牟田免池上	石核、石鏃、黒曜石原石	52－25	昭和58年調査
14	北久保経塚	〃　北久保免竿	弥生土器、剝片	52－58	2基
15	牟田C	〃　北久保免藤園	ナイフ形石器、台形石器、掻器、石鏃	52－36	
16	北久保A	〃　北久保免勢ノ巣	石鏃、弥生土器	52－38	
17	北久保B	〃　北久保免浦頭	剝片	52－37	
18	北久保C	〃　北久保免浦頭	石鏃、剝片	52－39	
19	姫神社	〃　北久保免宮崎	縄文土器、石斧、石鏃、石鋸	52－40	昭和41年調査
20	貴船神社古墳	御厨町池田免田崎	須恵器	52－69	
21	池田	〃　池田免田崎 里免下長峯	縄文土器、弥生土器、石斧、石鏃、白磁、青磁、獣骨	52－41	昭和63年・平成元年調査
22	長蔵坊	〃　池田免長蔵坊	ナイフ形石器、ラウンドスクレイパー、黒曜石原石	52－42	
23	中ノ崎	〃　池田免中ノ崎	ナイフ形石器、黒曜石原石	52－23	
24	坂本	〃　里免長峯	石鏃、黒曜石原石	52－43	
25	御厨城跡	〃　里免大久馬川		52－60	
26	田原	〃　田原免田原	弥生土器、須恵器、石鏃	52－64	平成2年調査
27	城ノ越城跡	〃　小船免栗山		52－65	
28	葉山六地蔵塔	〃　小船免葉山		52－44	
29	横久保	〃　横久保免大久保	剝片、弥生土器	52－46	
30	寺ノ尾C	〃　上登木免天久保	ナイフ形石器、台形石器、石鏃	52－47	平成元年調査
31	寺ノ尾A	〃　上登木免大野谷	ナイフ形石器、台形石器、細石核、石鏃	52－48	
32	寺ノ尾B	〃　上登木免野中田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃	52－49	
33	田川	〃　田代免前田	台形石器、縄文土器、石鏃、剝片鏃、つまみ形石器	52－45	本書
34	大岳古墨	〃　板橋免上場		52－66	
35	板橋経塚	〃　板橋免教塚		56－17	
36	板橋境目	〃　板橋免堺目	ナイフ形石器、石鏃、剝片	56－16	
37	アカニタ池	〃　板橋免アカニタ	ナイフ形石器、剝片、縄文土器	56－15	
38	向山館跡	〃　里免坊ノ上		52－62	
39	中野	〃　中野免中野	ナイフ形石器	52－63	

地区県営圃場整備事業に伴う田原遺跡の調査で弥生後期を中心とする良好な包含層が検出されている。[注11] 寺ノ尾C遺跡（第３地点）では弥生中期を中心とする土器片が出土しており、今後は遺跡数も増加すると思われる。

古墳時代については、従来からよく知られていなかったが、昭和62年に確認調査を実施した小嶋古墳群がある。３基を確認し、そのうちの１号墳を調査した。石室はすべて天井部を失って露出しており、方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室であった。玄室内より銀環・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉などが多数出土しており、７世紀代に比定できる。[注12] また、詳細は不明であるが、貴船神社古墳から提瓶１個と土師器が出土しているようである。[注13]

古墳時代以降では、「宇野御厨」の痕跡であろう。宇野御厨荘、単に御厨荘ともいわれている。律令制下では天皇や神に貢納する魚貝・果物を贄と称しており、のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも、大宰府を通じて贄が貢上されていたことが『延喜式』や贄木簡などによって知られる。宇野御厨が初めて文書に現われるのは『東南院文書』で、寛治３年（1089）８月17日の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とあるものである。つぎに宇野御厨の名が見えるのは、『石志文書』の、康和４年（1101）８月29日の肥前国宇野御厨検校源久譲状案である。この文書は偽文書の疑



第3図　田川遺跡位置図（1／10000）

いが指摘されている史料でもある。この史料には「宇野御厨野検校散位」（源久）という松浦党の祖といわれている人物の名が見える。この源久は延久元年（1069）現在の松浦市今福町に下向し、土着したといわれている人物で、以後の松浦党の諸氏は源久を祖として仰いでいる。松浦党は宇野御厨および御厨荘一帯に土着した源性一字名の集団を中心に、当初はその姻族が加わった武士団であったと思われる。『河上神社文書』の正応５年（1292）の「肥前国河上宮造営用途支配懇田数注文」には「宇野御厨庄三百丁」と御厨の公田数が記されている。当時の御厨の範囲を確定することは難しいが、これらの史料から考えると、現在の五島列島・平戸島などの島々を含む県北地域の一帯・南松浦郡の地域からと伊万里湾西側地域を含む一帯であろうと思われる。御厨の地名は鎌倉期から御厨荘などとして現われているが、これは宇野御厨を指し、現在の御厨には直接につながらない。しかし、鎌倉期には、「御厨熊徳」なる人物が見え、引安４年（1281）に宇野御厨の預所から無主の荒野一町を給田として与えられており、すでに今日へつながる御厨の地名があったことが推測できる。御厨氏は、「御厨氏系図」によれば、値嘉十郎連の子御厨小二郎並が始祖とされている。代々御厨を姓として、御厨城を居城としていた。

南北朝期に入ると、松浦党はしばしば一揆を結んで、地域支配の体制を強化している。『山代文書』の永徳４年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には「〈ミくりや〉三河守守」、「〈ミくりやのさかもと〉源宥」の当地を本拠とする土豪名が見える。

室町期に入ると、御厨氏は盛んに朝鮮貿易を行っている。『李朝実録』には「太宗恭定大王実録」戊子太宗８年（1408）６月庚辰条に「日本志佐殿・御厨殿、皆遣使献礼物」とあり、以後の『李朝実録』に「下松浦三栗野太守源満」「下松浦二河守融」などの名が見える。また、『海東諸国紀』にも「下松浦三栗野太守源満」の名が見える。

戦国期に入ると、田平里城主峰昌と弟の平戸松浦弘定との対立抗争があり、昌は島原の有馬貴純と結び、一方、弘定は大内義弘の援けを得て、延徳３年（1491）に平戸勝尾嶽城や箕坪城をめぐって激しい攻防を展開したが、結局大内氏の斡旋で和睦した。この結果、弘定の室の父である御厨資忠と子の善は御厨を追われ、川棚に走る。その後の御厨は平戸領に吸収されてしまうようである。

注１　下川達彌　「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」　『長崎県北松浦地方の文化』長崎県立美術博物館　1984

注２　中田敦之　『田原積石塚・寺ノ尾Ｃ遺跡』　松浦市文化財調査報告第７集　松浦市教育委員会　1990

注３　ALBERT MOHR and MASAKAZU YOSHIZAKI「Cultural Sequence in Western Kyushu」『Asian Perspectives』　XⅥ(2)　1973

注４　水ノ江和同　「西九州における文化の変遷」『古文化談叢』22　1990

注５　萩原博文・久原巻二　「九州西北部の石鋸、サイドブレイドについて」　『古代文化27－４』1975

注６　中田敦之　『小嶋古墳群』　松浦市文化財調査報告書第４集　松浦市教育委員会　1988
注７　中田敦之　『田川遺跡』　松浦市文化財調査報告書第９集　松浦市教育委員会　1991
注８　樋口隆康・釣田正哉　「平戸の先史文化」　『平戸学術調査報告書』　1951
注９　前田　毅　「肥前御厨貝塚発見報告」　『人類学雑誌40－10』　1925
注10　中田敦之　『池田遺跡』　松浦市文化財調査報告書第６集　松浦市教育委員会　1990
注11　中田敦之　『田原遺跡』　松浦市文化財調査報告書第10集　松浦市教育委員会　1991
注12　注６文献
注13　注９文献

参考文献

１．角川日本地名辞典編纂委員会　『角川日本地名辞典』－42長崎県－　角川書店　1987
２．長崎県史編纂委員会　『長崎県史』－古代中世編－　1980
３．外山幹夫　『松浦氏と平戸貿易』　国書刊行会　1987
４．外山幹夫　『松浦党のすがた』　松浦市　1990

３．確認調査(第４図・第５図)

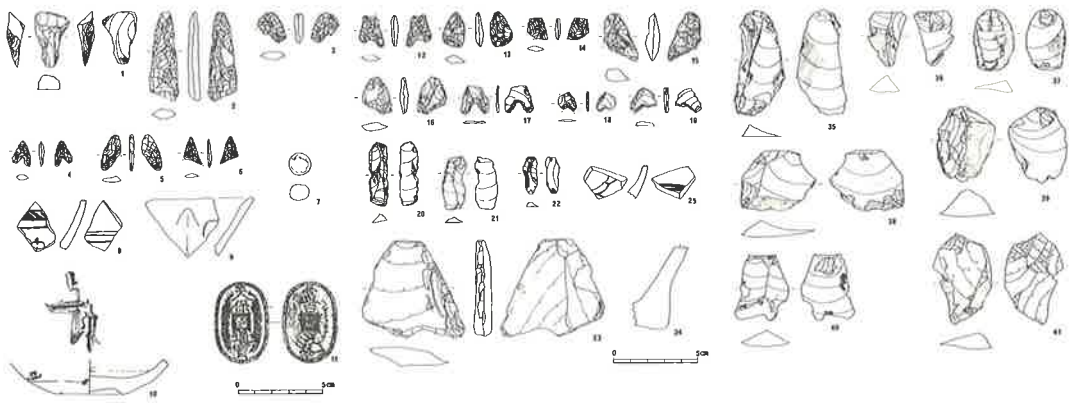
田川遺跡の確認調査は、平成２年11月６日から12月13日までの38日間国庫・県費補助を受けて実施している。調査では、35ヵ所の調査区を設定し、167.2m²を調査している。

この調査の結果、３地点で保存の比較的良好な石器群を確認している。その中の北側のＡ地点は北から南へ低くなった緩傾斜面の水田一帯で標高約79ｍの位置に広がっている。特に中央部の10トレンチ３層より両側縁に細調整であるブランティング加工を施した台形石器が出土している。

また、12トレンチ３層から尖頭器が出土している。

西側のＢ地点は西から東へと低

第4図　第1次確認調査区設定図（1／4000）



第5図　第1次確認調査出土遺物

くなった斜面の水田一帯にあり、標高約81mの位置に広がっている。ここでは18トレンチ１ヵ所のみの調査区を設定した。遺物は総数の約５割が剝片で、石鏃と剝片鏃が出土している。土器では胎土に多量の滑石を含んだ阿高式系土器が出土している。

調査範囲のほぼ中央にあたるＣ地点は、標高約80mでＢ地点の西から東へ傾斜しているその舌状台地の先端部に位置している。このＣ地点では中世期と思われる土層と土器を伴わない石器群が検出されている。

この確認調査で遺構が検出されているのは、Ｃ地点だけである。15トレンチから３個の柱穴が検出されており、時期的には中世期と考えられる。また、14・17トレンチでは遺物の出土がないため時期が不明であるがどちらにも１基の落ち込みが検出されている。落とし穴的な用途が考えられる。

このような確認調査の結果があり、Ａ地点では旧石器時代に関する遺物の出土が予想され、Ｂ地点では剝片鏃と阿高式系土器の出土が予想されていた。Ｃ地点では中世期と思われる遺構の柱穴と土器を伴わない石器群の出土が予想されていた。

この平成２年度の確認調査は、平成６年・７年度の本調査と区別するために田川遺跡の第１次調査としている。

参考文献

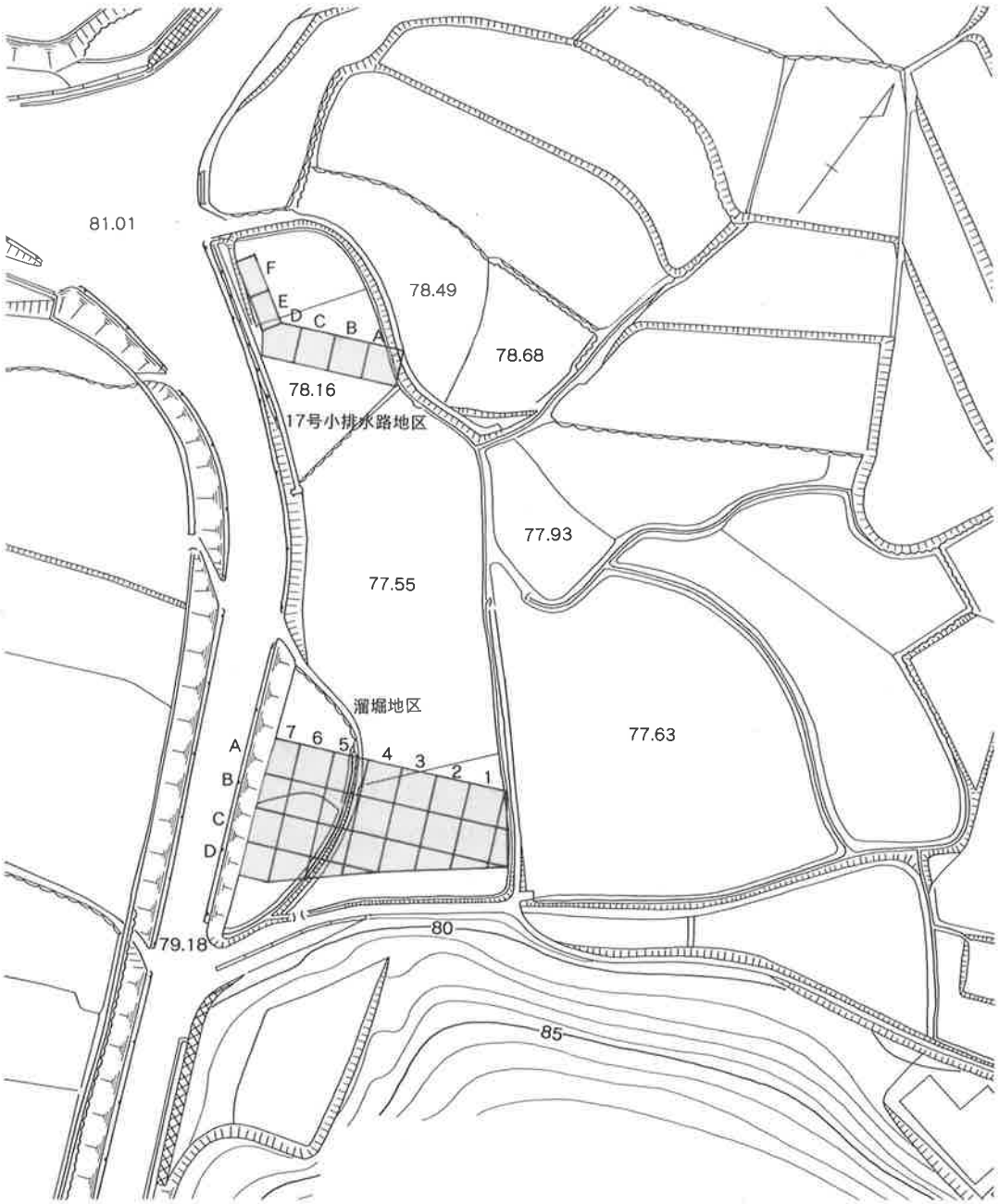
中田敦之　『田川遺跡』　松浦市文化財調査報告書第９集　松浦市教育委員会　1991

Ⅲ 発 掘 調 査

1．Ａ地点の調査（第６図）

県北振興局との協議の結果、Ａ地点部分の発掘調査は工事実施で設計変更ができない17号小排水路と溜堀地区で、平成６年12月12日から平成７年３月28日までの期間行った。

調査はまず17号小排水路地区から取りかかり、溜堀地区は県北振興局を通して工事業者に表土を剝ぐ作業をお願いし、調査と並行して行ってもらった。そして、17号小排水路地区の調査終了後ただちにこの溜堀地区へと移った。最終的に発掘調査を行った面積は、17号小排水路地区が131m²、溜堀地



第6図　Ａ地点調査区設定図（1／1000）

区は543.55m²で、調査した面積の合計は674.55m²であった。

なお、調査における記録措置は、土層図・ドットマップ作成については１／20を基本とし、写真撮影は35ミリ判モノクロおよびカラーリバーサルフィルムを使用した。

17号小排水路地区の調査は水路の幅にそって５ｍのグリットを組み、東から西へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆの記号を付した。なお、出土した遺物のナンバーリングはＴＡＧ水ＢⅡ（田川遺跡17号小排水路Ｂ区のⅡ層出土）、ＴＡＧ水ＣⅥ（田川遺跡17号小排水路Ｃ区のⅥ層出土）、ＴＡＧ2－12－1は耕区番号で表採あるいは排土からの採集品である。

溜堀地区は東西36ｍ、南北20ｍの範囲でグリット法による５ｍのメッシュに区切つて、東から西へ０・１・２・３～７、北から南へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの記号を付した。よって調査区はＡ１・Ｂ１・Ｃ１というように設定した。なお、出土した遺物のナンバーリングはＴＡＧ２Ａ１－Ⅱ（田川遺跡２次調査のＡ１区のⅡ層出土）、ＴＡＧ２Ａ４－９（田川遺跡２次調査のＡ４区のドットマップで取り上げた９番目の遺物の略号）と付した。

(1)土　層（第７図）

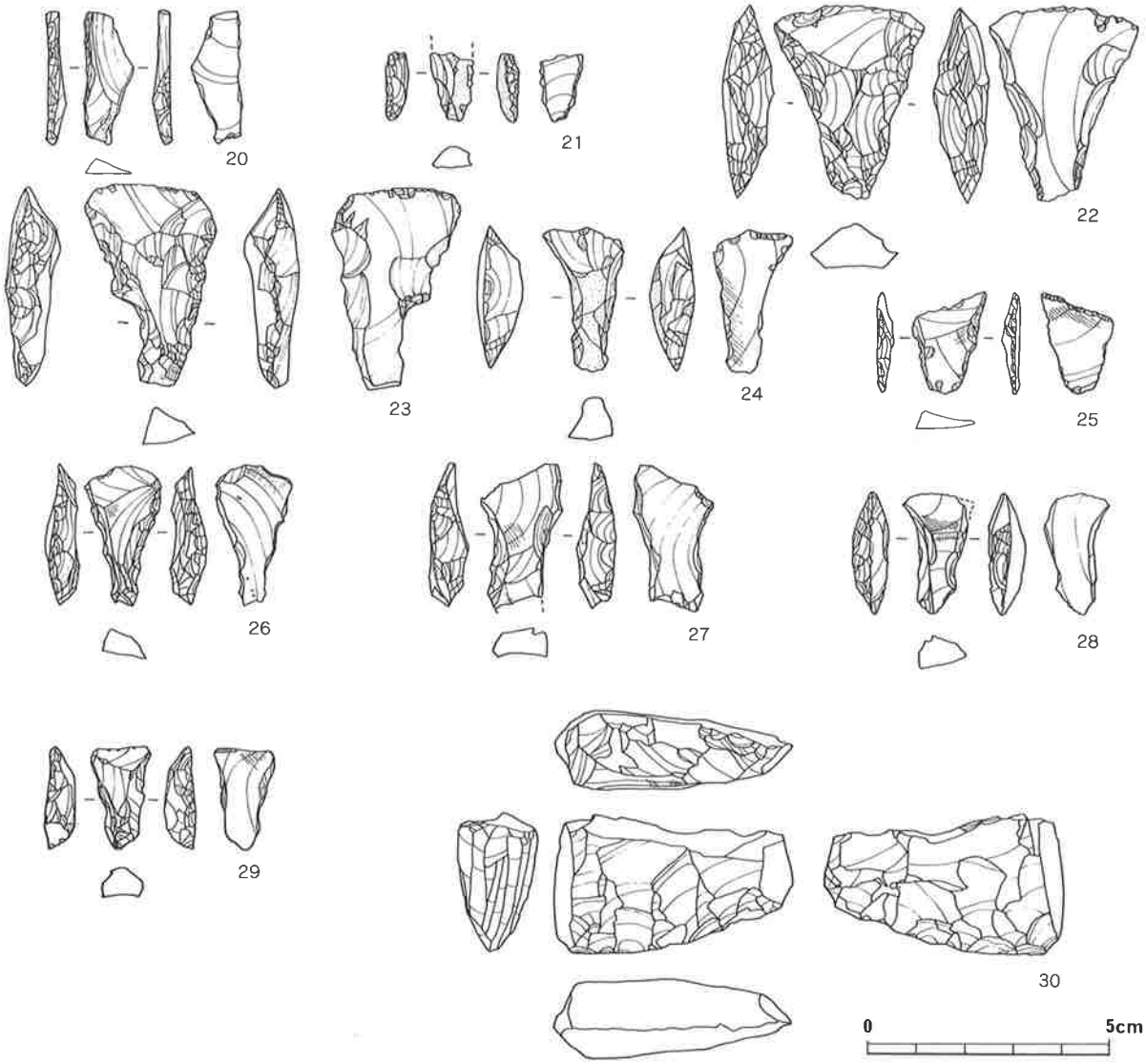
17号小排水路地区の土層は、平均厚さ10cmの耕作土の下に濁黄茶色の床土があり、鉄分を含んでいる。Ⅱ層は厚さ30cm～40cmの灰茶褐色粘質土層がある。しかし、Ｂ区の中央からＤ区の南側にかけてⅡ層を切つて50cm程の客土（埋土）が行われており、大部分が撹乱を受けていた。Ⅲ層は灰褐色でＢ区の北側からＥ区にかけて堆積している。Ⅳ層の灰色粘質土層とＶ層の灰紫色粘質土層はＢ区の南側から堆積を見せはじめＦ区にかけて分布している。Ⅵ層は濁黄色混礫土層でＣ区の北側からＦ区に堆積しているがＦ区では５cm程度に薄くなっている。Ⅶ層は地山の玄武岩が風化した礫層で濁黄色を呈している。なお、Ｆ区ではこのⅦ層の上に紫色粘質土層が堆積している。遺物はⅡ層からⅥ層にかけて石鏃、台形石器とナイフ形石器が出土している。

溜堀地区の土層は、Ⅰ層の耕作土は機械によって剝いだためⅡ層からの調査となったが、Ａ３北側とＡ５北側からＤ５の南側にかけて一部に残っており、Ⅰ層の厚みは15cmであった。Ⅱ層は調査区の全体に堆積しており色調は茶褐色粘質土層である。Ａ列で約20cm、南側のＣからＤ列では約40cmと厚く堆積している。Ⅲ層は灰褐色粘質土層で調査区全体に約20cmの厚みで堆積している。Ⅳ層は茶褐色粘質土層でＣ５の東側から北側のＡ１中央にかけて堆積しているがＣ３では検出されていない。黒い斑点を含んでいる。Ⅴ層は濁黄褐色粘質土層で、Ａ５からＤ５をとおる畦より西側部分では堆積しておらず、灰色粘質土層からⅧ層の地山である黄褐色玄武岩風化礫層へと続いている。Ⅵ層は比較的狭い範囲に堆積しており、Ｂ３・Ｂ４周辺とＡ１・Ｂ１周辺に分布している。色調は灰黒色粘質土層である。Ⅶ層は灰白色粘質土層で、部分によっては紫色に変化している所も見受けられる。この土層はＢ５東側からＡ列のＡ１まで薄く堆積している。Ⅷ層は黄褐色玄武岩風化礫層で地山である。

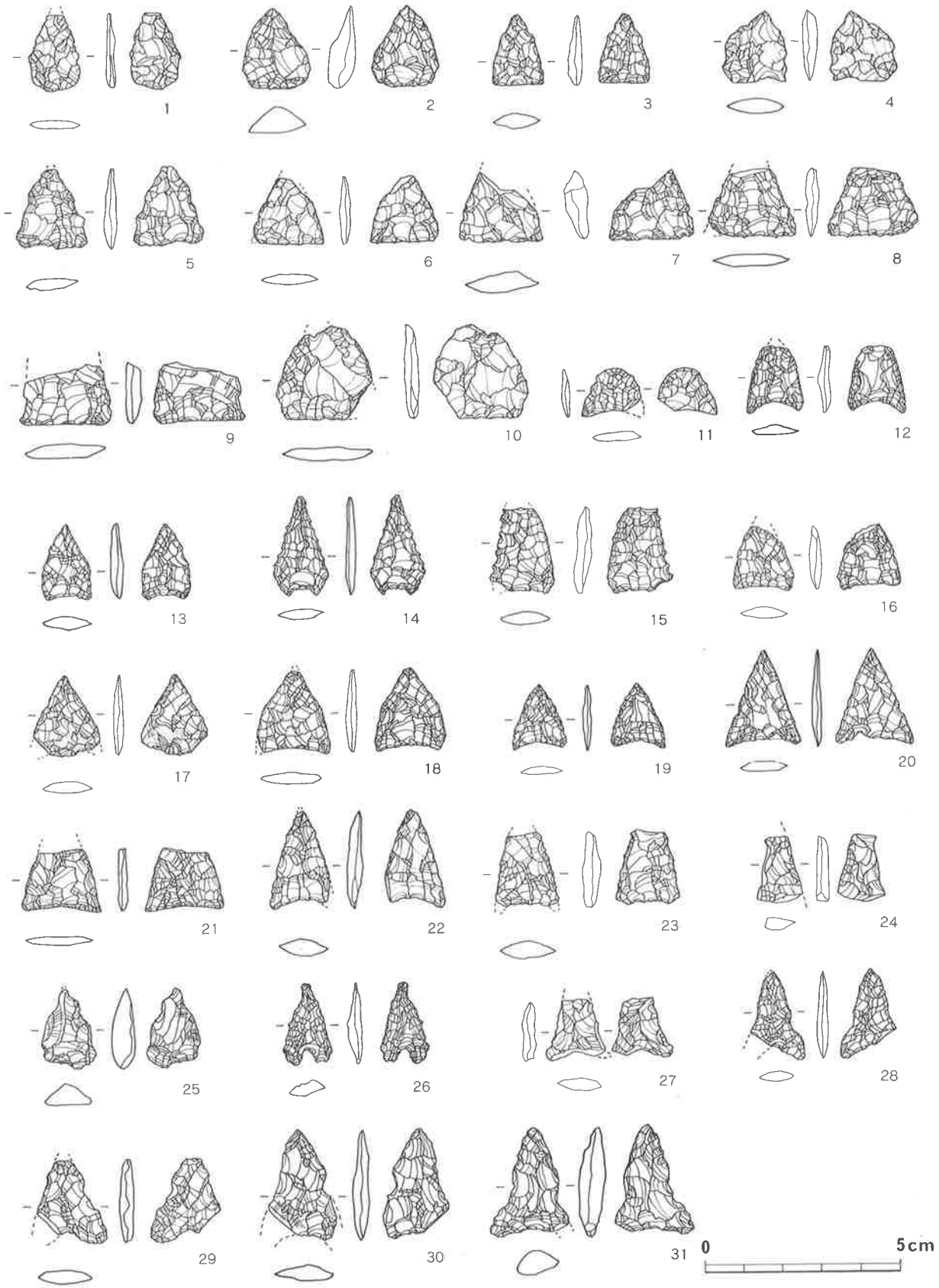
出土遺物では、Ⅱ層まで近世の撹乱を受けており、その中からナイフ形石器や石鏃が出土している。Ⅲ層以降は中世から旧石器時代の遺物包含層で、単独の時期の遺物包含層の検出にはいたらなかった。

第7図　A地点土層図（1／80）

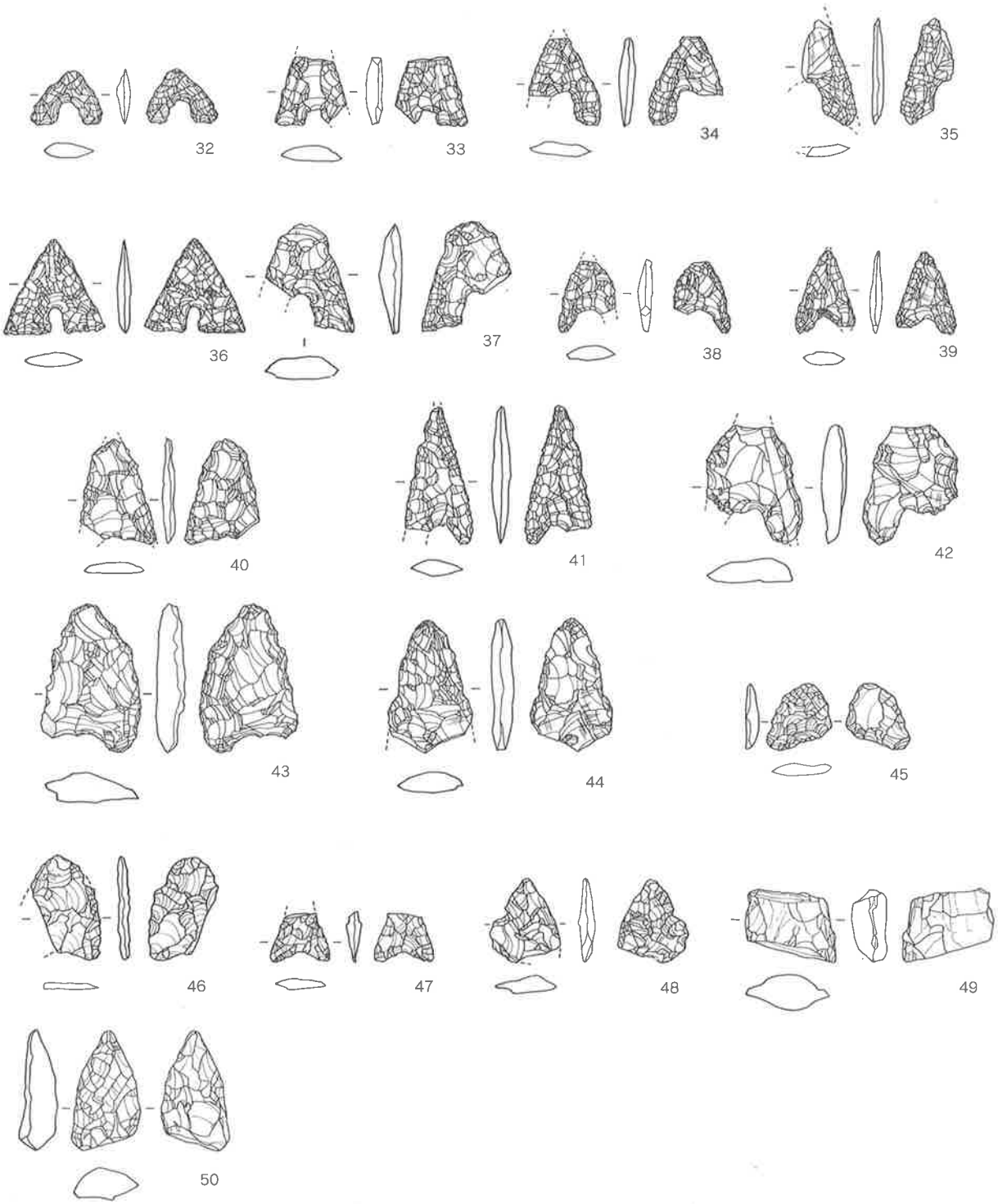
第8図　A地点出土遺物１（2／3）



第9図　A地点出土遺物２（2／3）



第10図　A地点出土遺物３（2／3）



第11図　A地点出土遺物４（2／3）

(2)出土遺物（第８図～第15図）

Ａ地点の調査によって出土した遺物は、前述のように17号小排水路地区がⅡ層からⅥ層まで、溜堀地区がⅡ層からⅦ層まで包含されたものであり、浮上や撹乱によって本来の位置を移動したものと思われる。遺物は約3,300点が出土しており、そのうち140点を図示した。

旧石器時代の遺物（第８図・第９図）

遺物の集中域をユニットとして明瞭に示すことはできなかった。以下遺物について説明を行う。

１～21はナイフ形石器である。すべて黒曜石製の剥片を使用しており、側縁部の二次加工部位によって一側縁加工のものと二側縁加工を施したものとがある。二側縁にブランティング加工を施したものは５cm前後の大型のものと３cm前後の小型のものがある。特に小型のナイフ形石器は薄い縦長剥片を使用することに共通性があり、打面部を先端にもちいるものが多い。12・14・15は厚手の剥片素材をもちいるもので、一側縁のブランティング加工は急傾斜になる。素材剥片の薄手のものは微細なブランティング加工となっている。刃部に使用によると思われる刃こぼれが１・４・５・７・９・11・12・15・16・17・19・20で認められる。17は基部主要剥離面側に平坦剥離が施されており、他のナイフ形石器より先行する資料であろうか。２・７・９・12・14・16は全面パティナが著しい。

22～29は台形石器で８点が出土している。特に22・23は大型の横長剥片を利用しており形状が三角のもので、刃部が若干湾曲している。背面側には数度の平坦剥離が施され器体の厚みを減じている。断面は三角形を呈している。25をのぞくすべての台形石器が剥片を横位にし、打面・打瘤を除去し両側縁に主要剥離面からブランティング加工を施している。台形石器も刃部の幅より器長が長い資料で刃部に最大幅を有する特徴がある。25は縦長剥片の打面部分を刃部とし両側縁に主要剥離面からブランティング加工が施されている。

30は細石核で、灰青色黒曜石の原石を半裁した礫を素材に主要剥離面から調整剥離を側縁に沿って行い、剥離下端部が尖るもので断面がＶ字状を呈している。細石刃の剥離は打面調整を顕著に行った後に素材剥片の先端側から行われ、８状の細石刃剥離を行っている舟底状の形態を持つ細石核である。剥がれた細石核の細石刃剥離面長は2.5cmから2cm前後である。

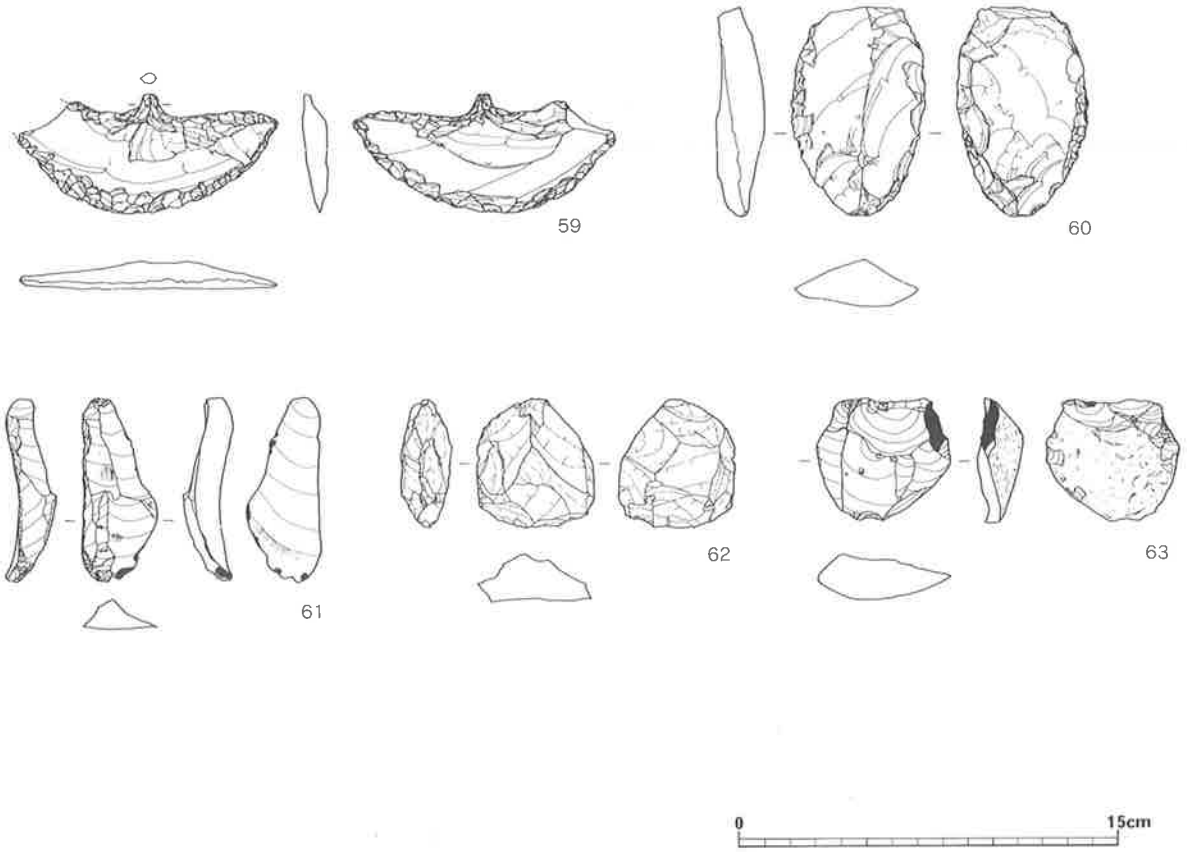
縄文時代の石器（第10図～第13図）

石鏃(第10図・第11図・表３)

出土した全石鏃57点のうち48点を図示した。分類については、おおまかな基部の形態で行った。円基鏃２点、平基無茎鏃８点、凹基無鏃だが凹みが浅いもの22点、凹基無鏃で円形に作り出されているもの12点、欠損などで不明のもの５点である。

１・２は円基鏃で、１は平坦剥離加工を密に行い、かなり薄い作りになっている。鋸歯状の突起が左右に作り出されている。先端部・基部を一部欠損している。２は肉厚で、主要剥離面の打点が残存している。刃部から中央に向かって平坦剥離を施し、鋭い。どちらも二等辺三角形を呈している。

第12図　A地点出土遺物５（1／3）



第13図　A地点出土遺物６（1／3）

３～10は平基無茎鏃で、４と10のみ正三角形タイプであるが、ほとんどは二等辺三角形を呈している。３は完形で、最も小さい。両面とも刃部や基部からの平坦剥離が綿密に施され、主要剥離面がわずかに確認できる程度である。刃部は鋭利である。４は製作途中で先端部を欠損したのか、改めて裏面より加工を行っている。やはり密な加工で、両脚端部を欠損している。５・６は同形態の石鏃で、特に５の刃部は細かく加工が行われている。７～９はいずれも上部が欠損しているが、およそ同形のものであろう。９は裏面に大きく主要剥離面を残しているが、基部・刃部に丹念な加工を施している。10も基部・刃部に丁寧な剥離調整を施している。

11～23・28～31・40・43・45・46は凹が浅い凹基無茎鏃で、11・45・46は先端部が作り出されていない正三角形タイプで、丹念な平坦剥離を施し、薄手に仕上げられている。先端部は丸く加工され、製作過程で鋭利に作り出そうという意図は感じられない。特に11は、基部を磨り潰した形跡が認められる。12・40は先端部を作り出さない二等辺三角形タイプと思われるが、欠損したものか不明である。13～15は基部が袴型の細長い二等辺三角形タイプで、14・15については刃部が鋸歯状になっている。14は整った剥離加工の見事な石鏃であるが、かなり磨滅している。16～18は刃部中央でやや外側に張

るタイプで、完形ではないが、17については表裏・右側縁の一部に擦った形跡が認められる。19～21は二等辺三角形タイプで基部・刃部に丁寧な調整を施している。20は表裏とも擦痕があり、加工後の凹凸をなくしている。21は先端部を欠損しているが、20と同じタイプになると思われる。やや細長い二等辺三角形タイプの22・23は、脚部・先端部を欠損しているが、刃部においては丁寧な調整を施している。22はかなり磨滅しており、23は裏面に擦痕を残している。28～31は刃部中央に抉り込みを施したもので、すべて完形ではないが、比較的肥厚である。特に31は肥厚で刃部からの調整が顕著である。基部の形状からいうと、大型の43も含まれる。粗い調整だが全面に平坦剥離痕を残している。この資料は銛としての使用も考えられる。

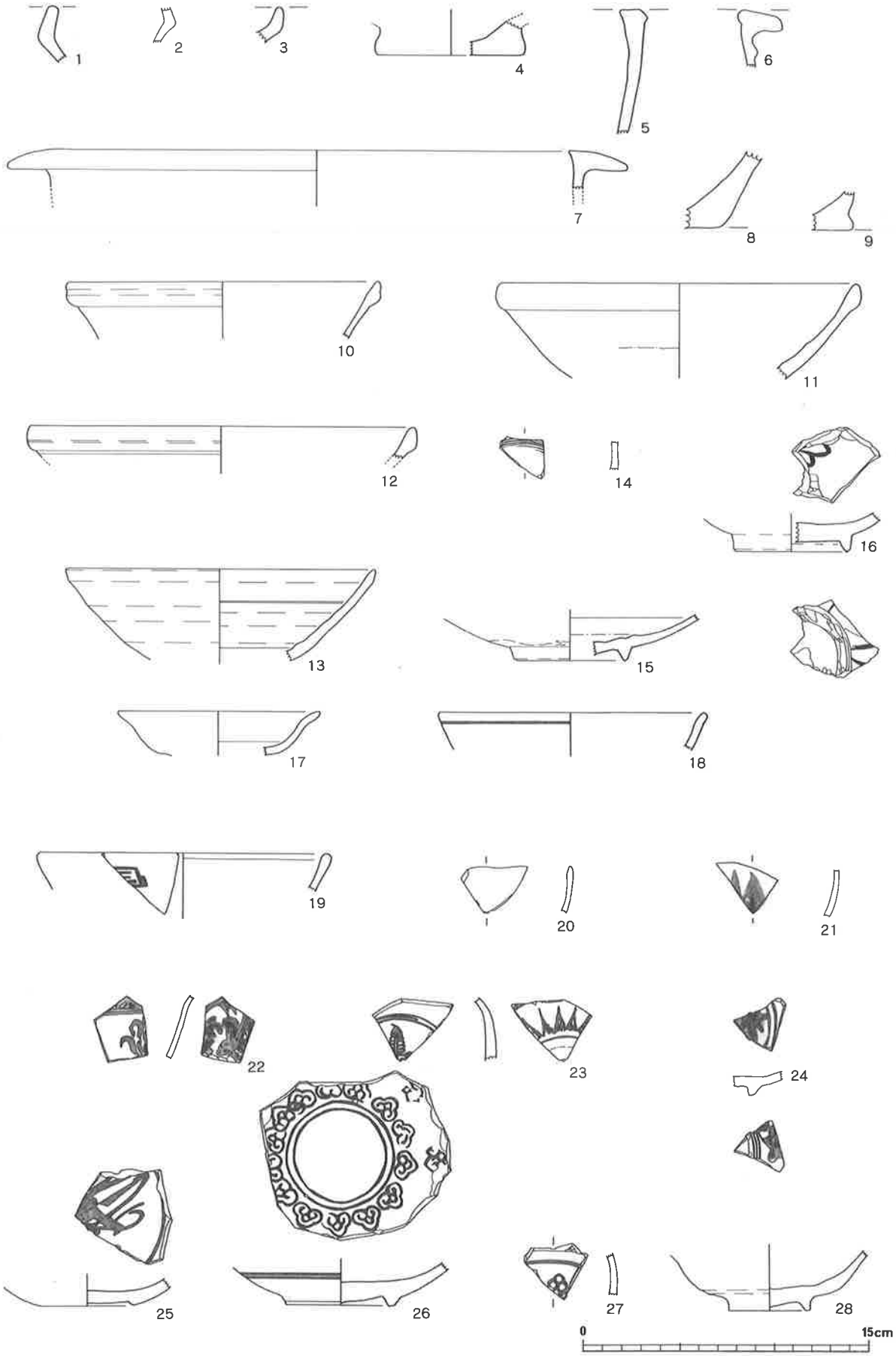
26・32～39・41・42・47は円形に作り出された凹基無茎鏃で、47はやや基部が円形に作り出された二等辺三角形タイプである。基部中央に意図的な剥離加工痕を認めたためここに分類した。丹念な平坦剥離で、厚みを薄くすることに意識された加工が行われている。26・33・39・41は脚部が短い二等辺三角形タイプで、脚部がどっしりとしている33とそうでないもの26・39・41にわかれる。33は後述する脚部が長い正三角形とつくりが似通っている。26・39は裏面に比較的大きな主要剥離面を残している。41はやや大型で、緻密な平坦剥離と刃部の丁寧な調整によって、細かな鋸歯状の刃部を作り出している。32・34・36・37は脚部が長い正三角形タイプで、完形が32・36のみで、脚部がどっしりとしている。いずれも刃部には細かい調整を施し、入念な平坦剥離を行っている。36はまさに正三角形に作り出されており、A地点では1点のみの出土である。35・38は脚部が長い二等辺三角形タイプで、特に35は半分欠損しているが、刃部調整によって鋸歯状を呈している。42は大型であるが、円形の抉り込みを施している。剥離調整は粗雑だが右側縁に裏面から垂直加工を施している。

尖頭器（第11図）

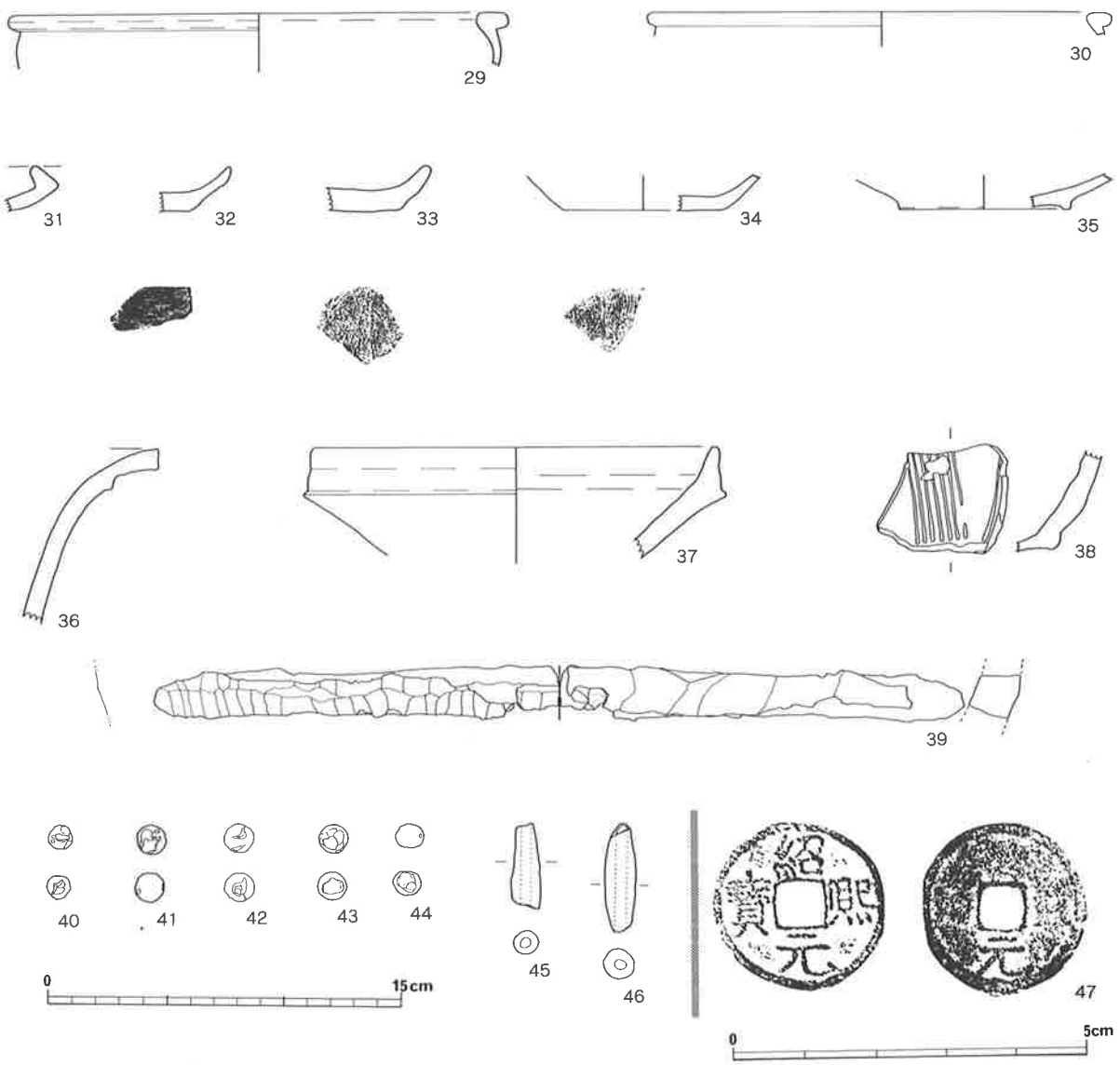
49・50が尖頭器で、かなり厚手で、丸みを帯びている。50は刃部が鋭利に作り出され、先端部は丸く磨滅している。

石斧（第12図）

51～56が石斧である。53・55・56が磨製石斧で、他は打製石斧である。なお、実測後において53・55は同一個体で接合している。出土した地点は53がＤ７Ⅱ層、55がＡ５－８で約15mの距離がある。上端から刃部まで直線的であり、刃部に最大幅を有する頁岩製である。51はかなり磨滅しており、刃部は形状のみが残っている。石材については不明である。Ｂ４－14出土。52は昭和51年に田川遺跡のＡ地点で表採された石斧で頁岩製である。刃部に最大幅を有するが使用によるものか欠損している。２－12－８採集。54は頁岩製でかなり磨滅している片刃石斧である。Ｂ４－20出土。56は丁寧な磨きが全面に施されており、裏面に１カ所の穿孔のあとが残っている。穿孔途中で放棄したものか。石包丁の未製品の可能性もある。Ｂ１－28出土である。



第14図　A地点出土遺物７（1／3）



第15図　Ａ地点出土遺物８（1／3）

スクレイパー（第12図・第13図）

57～60がスクレイパーでいずれも安山岩製である。57は二側縁に粗い加工が施されており、片面には自然面を有している。Ｂ５－５出土。58は二側縁から先端部にかけて丁寧な二次加工が片面からのみ施されている。Ａ２－３出土。長さ13.35cm・幅4.9cm・厚み2.0cm・重量133.0gを計る。59は典型的な石匙で、ノッチ状の抉り込みを両側からもうけてつまみ部を作り出している。Ａ５－２出土。長さ4.7cm・幅10.4cm・厚み1.1cm・重量44.2gである。60は両面から交互に二側縁の刃部に丁寧な二次加工を施しているため、エッジは鋭くなっている。長さ8.3cm・幅5.25cm・厚み1.85cm・重量76.8gを計る。Ｂ１－５出土。61は全面がパティナにおおわれている黒曜石製の使用痕のある剝片である。刃部には刃こぼれが顕著である。62は安山岩製石核で不定形の剝片を剝ぎ取っている。Ｂ２－Ⅶ層出土。63は黒曜石製石核で、打面調整後に同じ方向からのみ横長剝片を剝ぎ取っている。水ＥＶ層出土。

縄文・弥生土器（第14図）

１から４は縄文土器で晩期の浅鉢の器形をするものと思われる資料で、４が底部である。弥生土器と同じように中世の遺物に混在して散発的に出土している。５～９は弥生土器で中期中葉頃の甕形土器の資料である。６はほぼ平坦な逆Ｌ字口縁で若干内側につまんでいる。口縁直下には三角突帯が貼り付けられているが、すぐ下から欠損しているため条数は不明である。胎土には石英・長石を多く含んでいる。７は平坦な口縁で外傾している甕形土器である。復元口径26.6cmを計る。８・９は甕形土器の底部である。１はＡ１－Ⅲ層。２はＡ５－１。３はＣ３－１。４はＡ２－19。５はＣ６－Ⅱ層。６はＢ３－Ⅶ層。７はＡ６－Ⅲ層。８はＡ５－７。９はＡ７－Ⅲ層出土である。

中世の遺物（第14図・第15図）

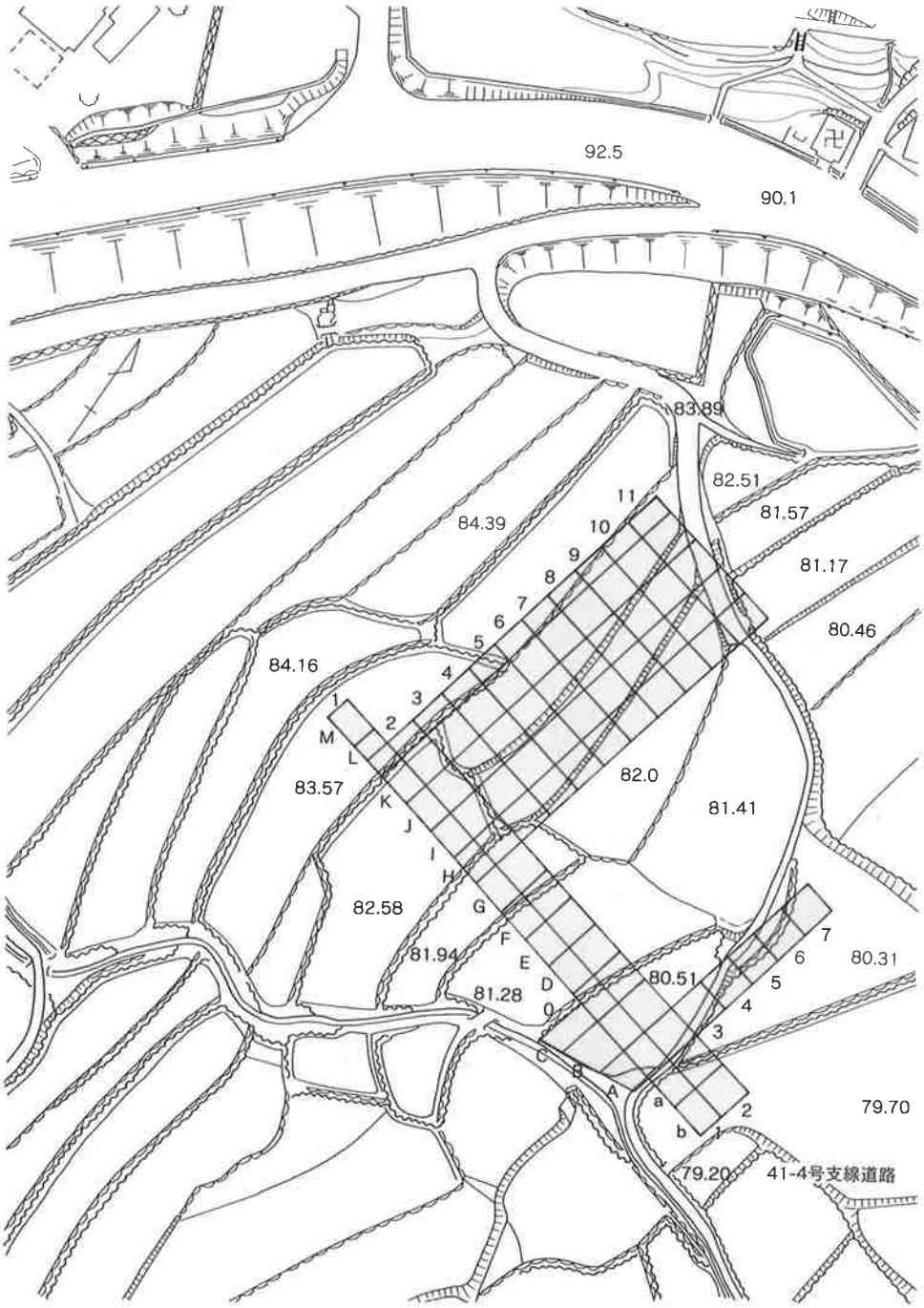
中世の遺物は大きく分けると白磁・青磁・染付に代表される輸入陶磁器と国内産の土器等に分けられる。10～12は輸入陶磁器で白磁碗の資料である。口縁部が玉縁状を呈するもので大宰府分類のⅣ類に属している。いずれも釉は灰白色で全体に薄くかけられている。10は復元口径16.2cmを計る。13は内湾気味に立ち上がり端部を丸く仕上げている体部から口縁部にかけての碗である。内面見込の釉を輪状にカキ取ったものと思われる資料である大宰府分類のⅧ類にあたる。釉は灰緑色で灰色の胎土である。復元口径16.2cmを計る。14は櫛目描きの花文を有する大宰府分類のⅥ類であろう。15は内面見込の釉を輪状にカキ取った碗で低い高台を有している。16は内外面に花文櫛目による花文が描かれている。これらの遺物は11世紀後半から12世紀前半の時期が考えられる。17は白磁の皿で口縁部は外反している。釉は乳白色を呈している。15世紀後半から16世紀代の資料で小野分類の皿Ｃ群にあたる。18から20は青磁である。19は外面体部に雷文帯が描かれている碗である。14世紀後半代から15世紀中頃の資料である。21から25は染付で23・25は碁笥底を呈する皿で、外面に芭蕉葉文が描かれている。染付皿Ｃ群で15世紀後半から16世紀前半代の資料である。26・27は朝鮮産の粉青沙器である。くすんだ灰緑色の釉薬で内外面に白土のみの象嵌を施している。26は見込に二重の回線をめぐらし、外に葵文様を描いている。文様の線が一定でなく丁寧な仕上がりではない。28は朝鮮産の青磁であろう。29・30は口縁部のみ破片であるが陶器の壷と思われる。31から46は国内産の資料で土師器の皿・瓦器碗・須恵質の鉢と擂鉢・瓦質の擂鉢が出土している。32の底部の糸切り離しは磨滅のためはっきりしないが、33・34は糸切り離し痕がわずかに認められる。35は瓦器碗の高台の資料である。36は壷の口縁で、大きく外反し立ち上がる口縁部で一段の突起を有している。内面は回転ナデ、外面もナデ整形されている。37は須恵質土器の擂鉢である。外面を横ナデし、内面は使用により擂目が磨滅している。38は瓦質の擂鉢の底部付近の資料である。擂目は７本あるが磨滅している。39は石鍋の再加工品で穿孔の痕が伺える。40から44は鉄砲玉である。45・46は土師質の土錘である。

銅銭（第15図）

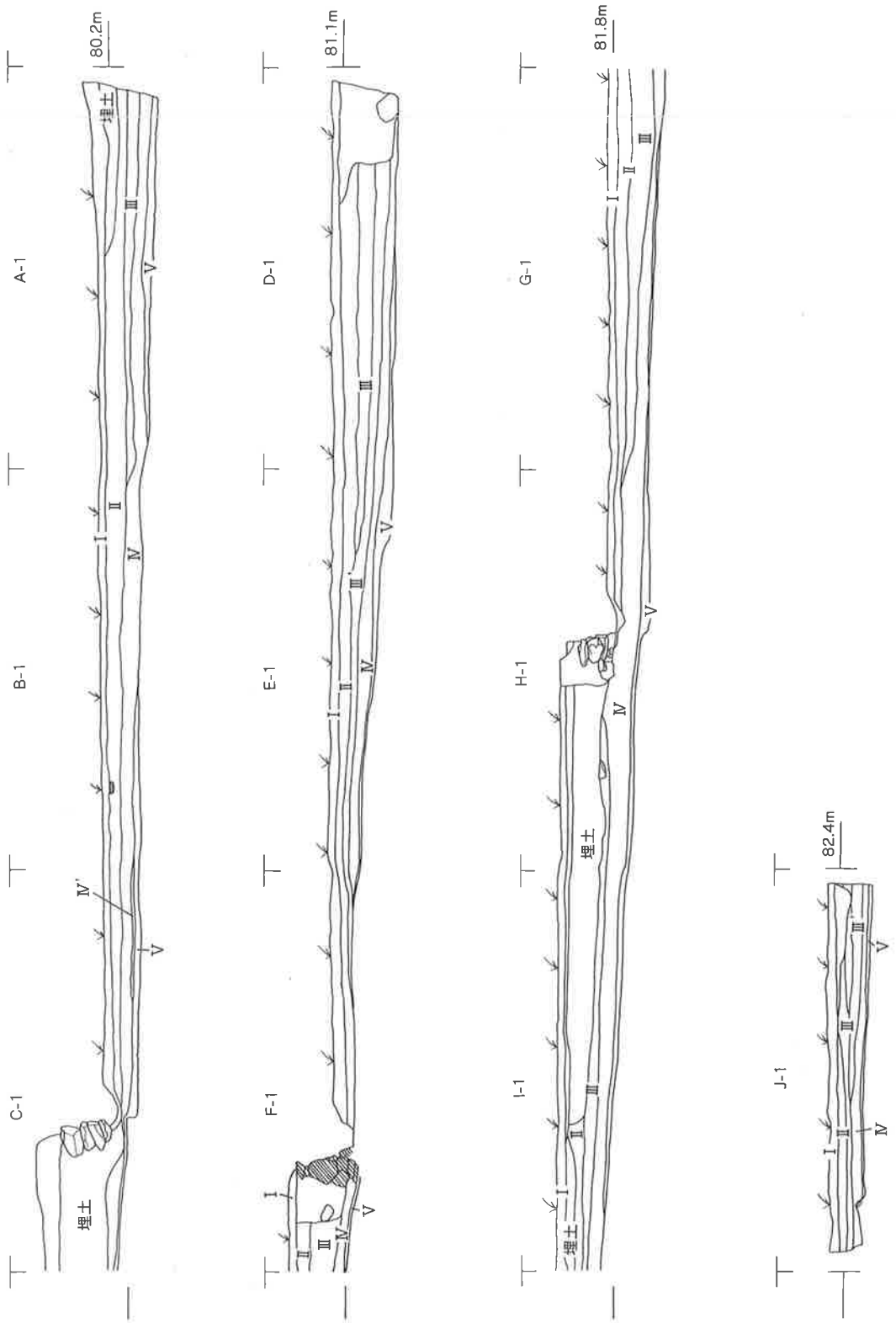
47は銅銭で、1190年に南宋で鋳造された「紹熙元寶」で、裏面には「元」の文字がある。直径2.4cmを計る。Ｃ７－Ⅱ層出土である。

２．Ｂ地点の調査（第16図）

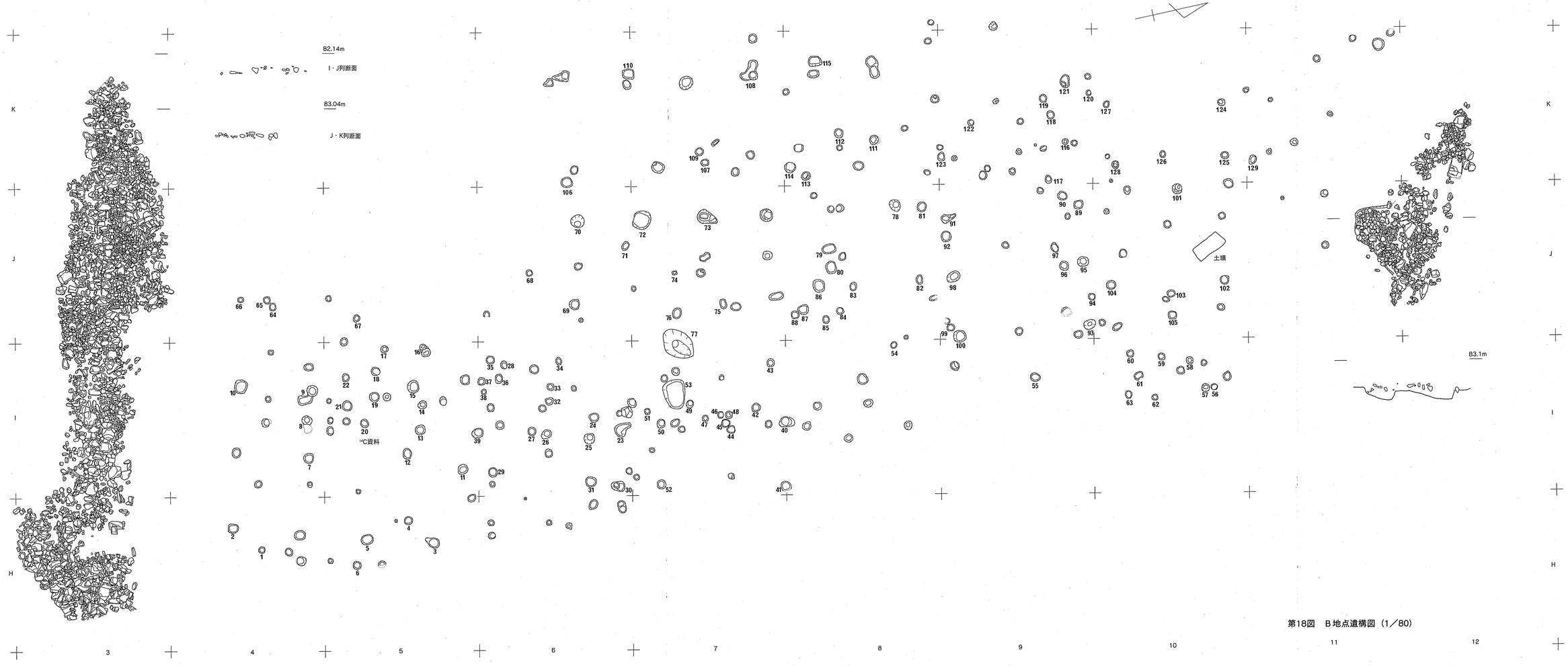
Ａ地点の調査が終了後に再度平成７年度の圃場整備について県北振興局と協議を行い、工事実施で設計変更がきかないＢ地点の41－４号支線道路・圃場面で削平される地区とＣ地点の圃場面で削平される地区の1,240m²の調査を行うことで決定し、平成７年６月29日から平成８年３月25日までの期間行った。調査はまずＣ地点の圃場地区の表土剥ぎから取りかかり、Ｂ地点の41－４号支線道路と圃場地区へと調査を進めた。Ｂ地点の調査区については、41－４号支線道路の幅が９ｍあるため道路の北側を５ｍ、南側を４ｍそれぞれとり、グリット法による５ｍのメッシュに区切って、東から西へＡ～Ｍ



第16図　Ｂ地点調査区設定図（1／1000）



第17図　B地点土層図（1／80）



第18図　B地点遺構図（1／80）

表２　柱穴内出土遺物一覧表

第18図	遺構名	黒曜石		安山岩		石器	土器				陶磁器		○はその他
		剥片	砕片	剥片	砕片		縄文	土師器	須恵器	瓦器	中国産	朝鮮産	
1	H４－１												○
2	2												○
3	H５－１	1	1										○
4	2		3										○
5	3	1	2					1					○
6	5												○
7	I４－１												○
8	2												○
9	3	1											○
10	4												○
11	I５－１	1											○
12	2	1	1										○
13	3		2	1									○
14	4		3										○
15	5	1											○
16	6								1				○
17	7												○
18	8		1										○
19	9	1				つまみ1							○
20	10		2								天月1		○
21	11		1			ufl							○
22	12		1										○
23	I６－１	3	2			磨石小1	4	1					○焼土
24	2					つまみ1							○
25	3												○
26	4												○
27	5												○
28	6	1											○
29	7	1	1										○
30	8		4		1		1	2		1			○
31	9		1										○
32	10		1										○
33	11	1											○
34	12						1						○
35	13		1	1									○
36	14					凹石1							○焼土
37	15	1											○
38	16		1										○
39	17		2				1						○
40	I７－１		1				2					3	○
41	2	1			1	スタンプ1		1				1	○焼土
42	3		1				2						○
43	4		1										○
44	6							2					○
45	7							2					○
46	8												○
47	9	1											○
48	10	1					1						
49	11	1											○
50	12		2					1					○焼土
51	13		1										○
52	14												○
53	15		3				1						○
54	I８－１						1						○
55	I９－１												○
56	I10－１												○
57	2												○
58	3												○
59	4												○
60	5												○
61	6												○
62	7												○
63	8							1					○
64	J４－１												○
65	2	1							1				○
66	3												○
67	J５－１												○
68	J６－１	1	1										
69	2	1	3										
70	3							2					○
71	4						3						○
72	J７－１						1	1					○焼土
73	2												○
74	3												○
75	4	2						1					○
76	5												○
77	6												○
78	J８－１						1						○
79	2	1											○
80	3												○
81	4					剥片錐1							
82	5												○
83	6												○
84	7												○
85	8												○
86	9												○
87	10						1						○
88	11												○
89	J９－１												○
90	2							1					○
91	3												○
92	4												○
93	5												○
94	6												○
95	7												○
96	8												○
97	9		1										○
98	10												○
99	11			1									○
100	12			1									○
101	J10－１												○
102	2												○
103	4												○
104	5												○
105	6		1										
106	K６－１		1										
107	K７－１	1											○
108	2		1										○
109	3												○
110	6												○
111	K８－１												○
112	2												○
113	3												○
114	4												○
115	5												○
116	K９－１												○
117	2												○
118	3							3					○
119	4												○
120	5												○
121	6												○
122	7												○
123	8												○
124	K10－１												○
125	2												○
126	3												○
127	4							1					
128	6												○
129	K11－２												○

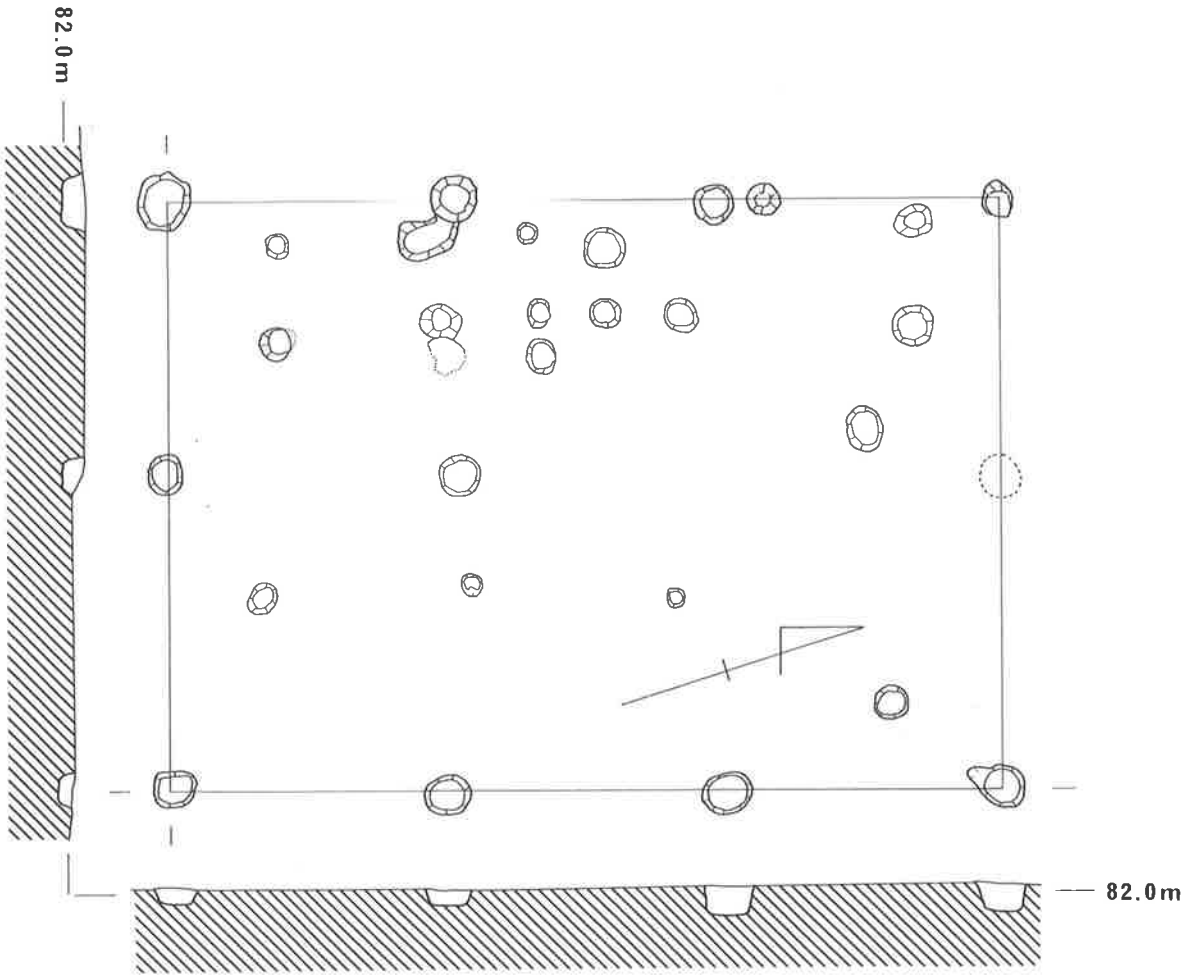
までと、Ａ区の東側にａ・ｂの記号を付した。また南から北へ０～12の記号を付し、各調査区の名称はＡ１、Ｂ１というように呼称した。なお、ｂ２・Ａ６・Ｍ２は２ｍ×２ｍの調査区を設定している。Ｂ地点の調査した面積は合計で1,198.25m²である。

なお、調査における記録措置は、Ａ地点同様に土層図作成については１／20を基本とし、ピットについても１／20で行った。写真撮影もＡ地点同様に行った。

なお、出土した遺物のナンバーリングは、ＴＡＧＢＡ１Ⅱ（田川遺跡Ｂ地点Ａ１区のⅡ層出土）、ＴＡＧＢＤ１石（田川遺跡Ｂ地点Ｄ１区の石垣出土）というように付した。

(1)土　層（第17図）

Ｂ地点の土層は、原則的に調査区の北壁と東壁で土層堆積状況を確認した。特に41－４支線道路地区部分の土層はＣ・Ｆ・Ｈ列の石垣でⅡ層の茶褐色粘質の一部が攪乱を受けている。Ⅲ層は暗茶褐色粘質で、Ⅳ層は茶褐（灰黒褐）色混礫で、Ｈ２ではⅣ層下部にドングリ・自然木が堆積しており、掘り込み等は検出されなかった。Ⅱ層～Ⅳ層が縄文時代の遺物包含層で一部中世の遺物を含んでいる。Ⅴ層は地山の玄武岩の風化した濁黄褐色混礫で、砂質を含んでいる所もある。41－４支線道路北側の



第19図　Ｂ地点掘立柱建物図（1／80）

Ｈ～Ｋ列ではＡ地点同様に表土の耕作土を機械で剝いだ後に調査に入った。Ⅱ層が茶褐色粘質、Ⅲ層が暗茶褐色粘質、Ⅳ層が褐色粘質、Ⅴ層が地山の玄武岩の風化した濁黄褐色混礫である。ピット群はⅡ層下部からⅣ層で確認した。一部地山のⅤ層まで掘り込んでいた。

配石遺構（第18図）

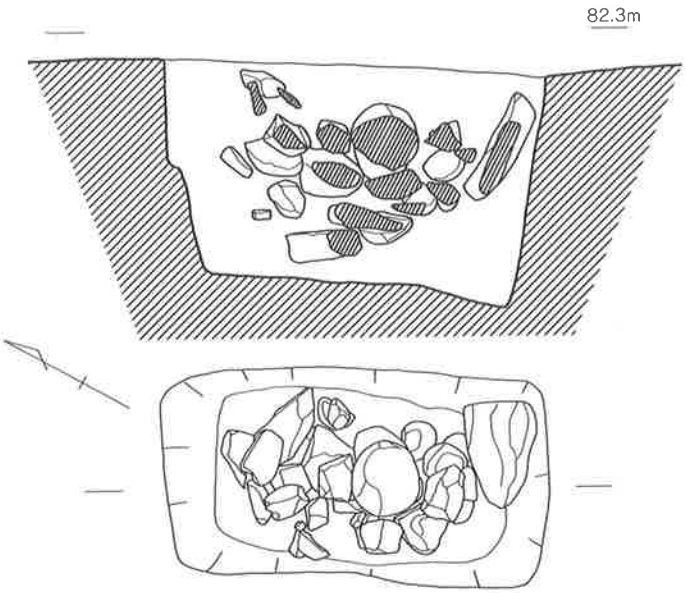
Ｈ３～Ｋ３にかけて１号配石遺構を検出した。長さ17.8m、幅２～３mあり、西北西から東南東の方向に石を配置しており、Ⅲ層の暗茶褐色粘質土層によって被覆されている。Ｈ３の東側は水田の石垣で壊されていた。また、Ｋ３の西側は調査地区外であったため延長しているのか確認できていない。この配石の東西の主軸より北側で約0.5m～1.7mの間隔で配石の下から保存状態は良くないが13本の杭が検出されている。この配石遺構の北側にはピット群がある。Ｈ４列～Ｋ11列まであり、その北端のＪ11、Ｊ・Ｋ12に２号配石遺構がある。調査区設定図（第16図）では２号配石遺構の上に現代の道が構築されている。出土遺物には、石鍋・土師器・瓦質土器・李朝陶器・スラッグがある。

掘立柱建物跡（第18図・第19図・表２）

柱穴群は灰褐色粘質の覆土で、直径約25cm～30cmの大きさを持つ柱穴が多く検出された。柱穴には^{14}Ｃを含んでいるのが多かった。特にNo.20・70・121の柱穴からは柱根が発見されている。No.20は直径20cmあり、樹種同定の結果はマンサク科のイスノキであった。整理作業時に図面上で復元できたのは２間×３間の南北棟１棟のみで、梁行全長4.6m、桁行全長6.56mを計る。住居・倉庫・小屋などさまざま機能が考えられる。柱穴の多さから考えると建て替え等で断続的に営まれたものであろう。

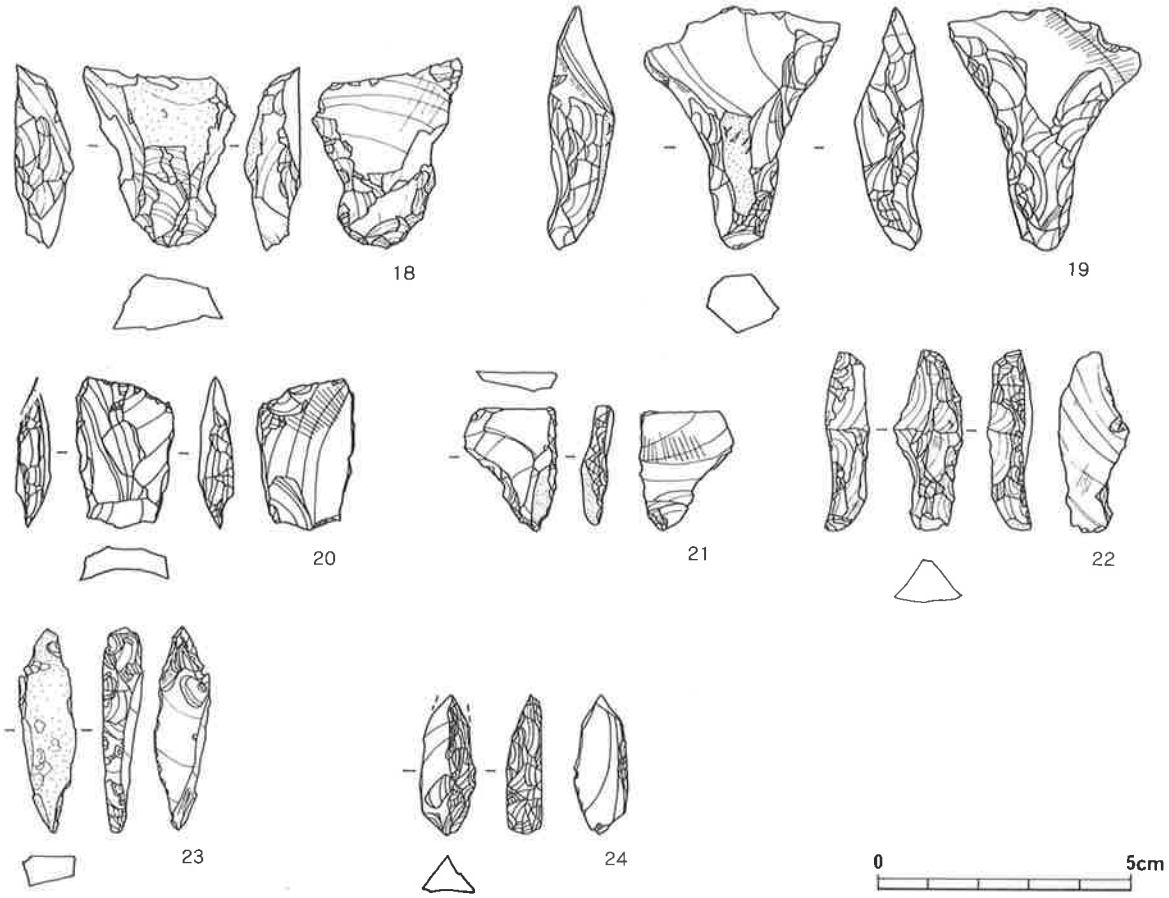
土壙（第20図）

Ｊ10区の北側に位置する。平面形態が長方形を呈し、土壙上面で長さ1.4m、幅0.6m、深さ0.6mあり、壁はほぼ直に立ち上がっている。土壙内は５cm～20cm余りの礫と紫色の土で覆われており、これに混じって無文土器胴部片17点、口縁部１点（第44図２）、底部１点（第44図５）が出土している。胴部片17点のうち２点は胎土に滑石を含んでいない。石器では、黒曜石製石核１点・剝片１点・砕片１点、安山岩製剝片１点があった。



第20図　Ｂ地点土壙図（1／20）

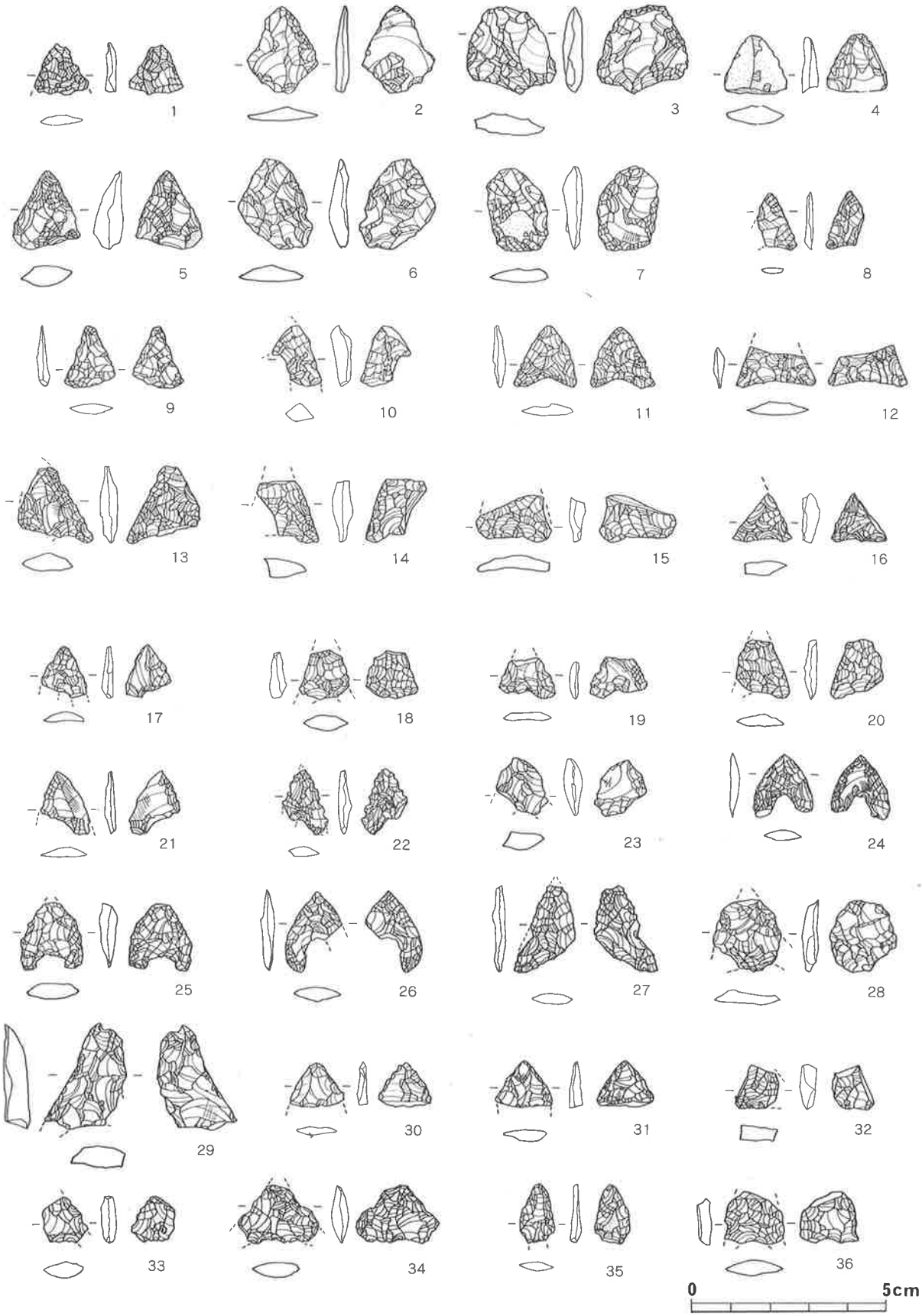
第21図　B地点出土遺物１（2／3）



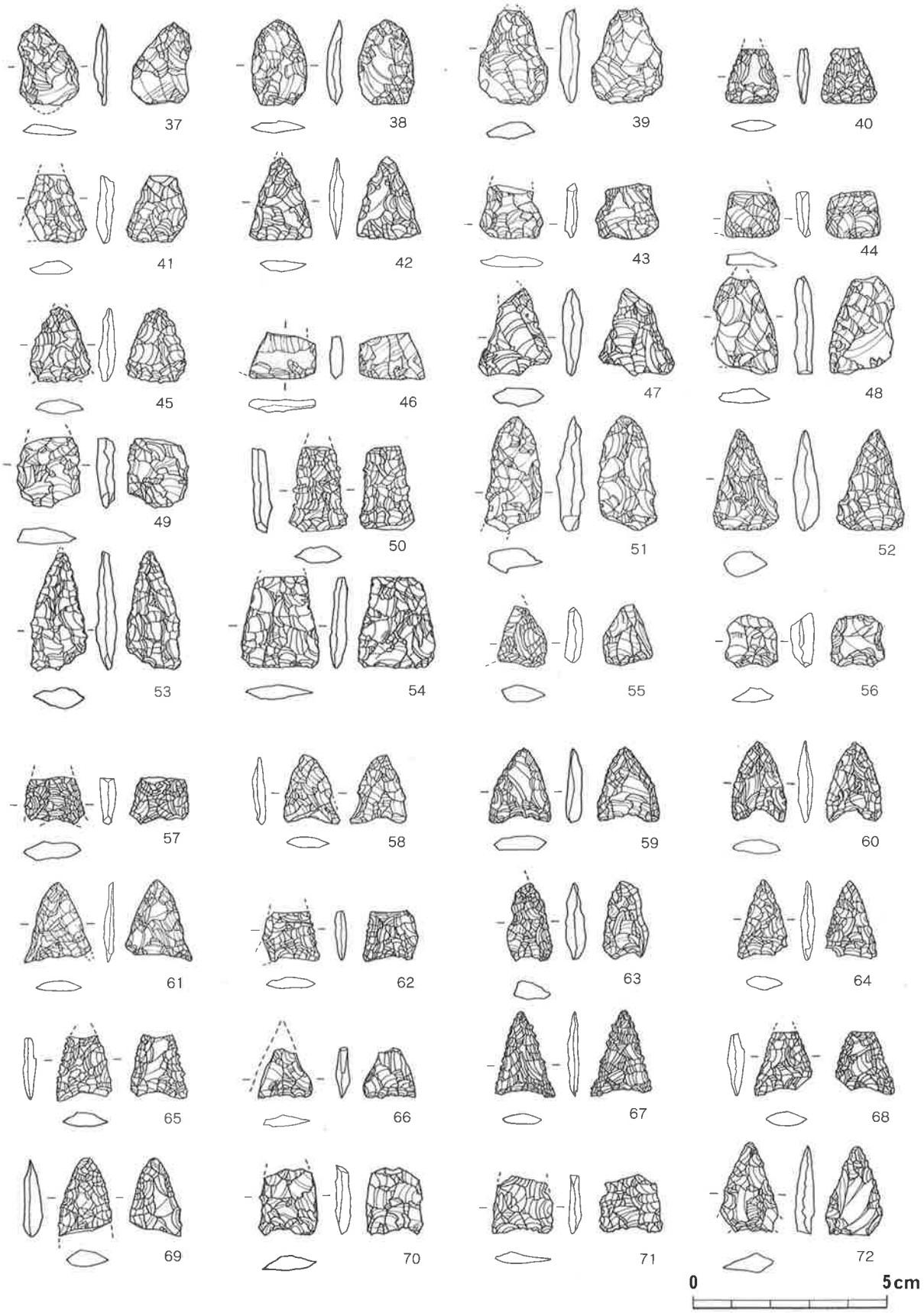
第22図　B地点出土遺物２（2／3）

旧石器時代の遺物（第21図・第22図）

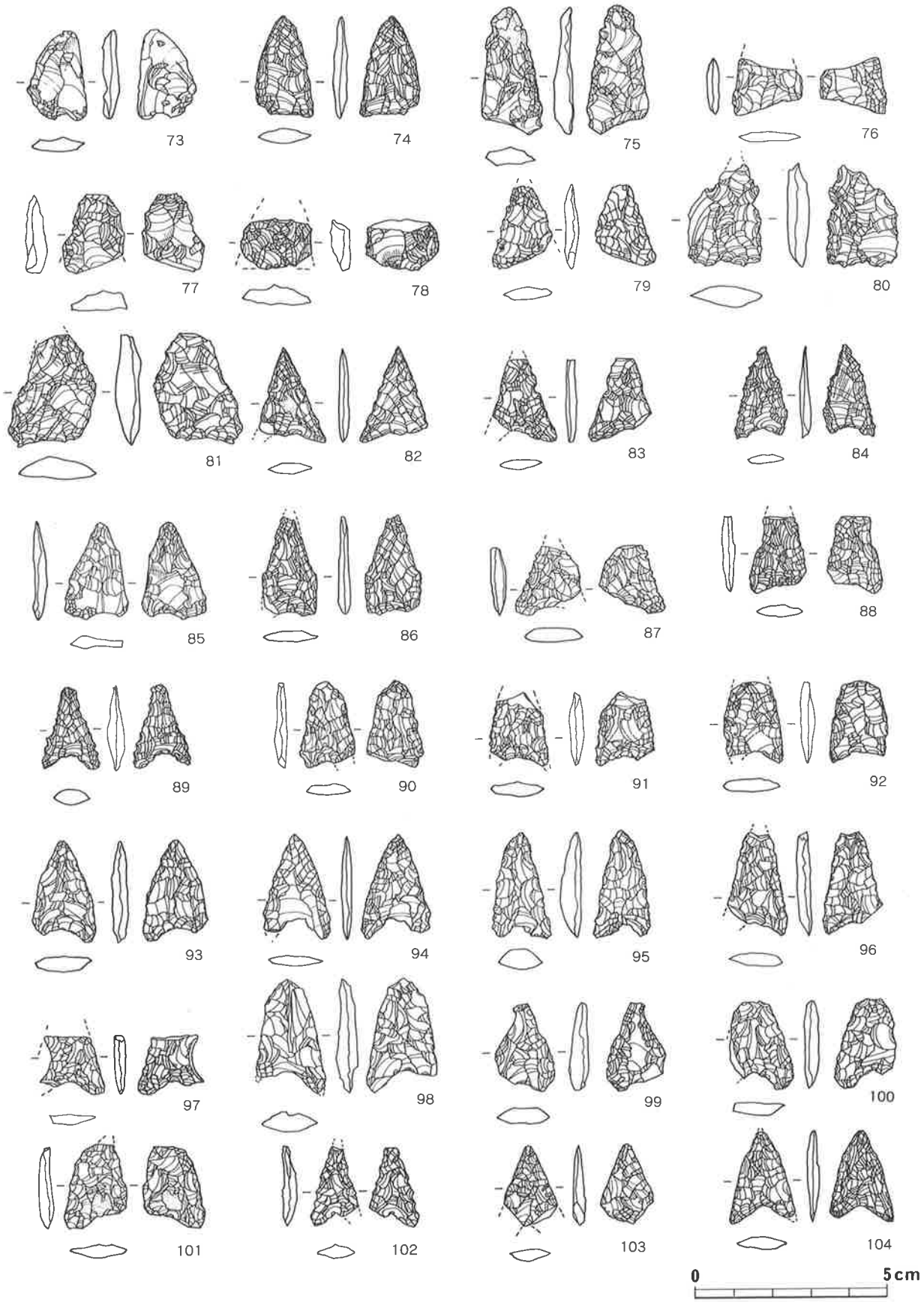
１～７・11～15はナイフ形石器である。石材では13の安山岩以外は黒曜石製で、１～３・５・７・12・14・15の刃部には刃こぼれが認められる。いずれも縦長剥片を使用し、側縁部の加工は一側縁と二側縁加工が認められる。12・15は厚手の剥片素材を用いており、ブランティング加工は急傾斜になっている。８は使用痕のある剥片、10は加工痕のある剥片である。９は打面・打瘤を除去し主要剥離面からブランティング加工を施している。ナイフ形石器であろうか。16～21は台形石器である。いずれも黒曜石を使用しており、刃部には使用痕が認められる。17は未製品であろうか。21は刃部を欠損している。20は斜行する刃部を有するため基部とは平行していない。両側縁ともブランティング加工が施されている。16・19は不定形剥片を利用し、基部表面と刃部の二側縁部に調整加工を行い、長軸に直交する刃部と右側縁に平行する縦の刃部を持っている。18・21は基部に両面からの調整加工を施し、基部に一部自然面を有している。22は尖頭状石器で、断面が三角形状を呈している。調整は大まかな調整で三角形に整形してから微調整を行っている。23は彫器で、一側縁に加工を施し、先端部より斜めに樋状剥離を加えて彫刻刃面を形成している。一部自然面を有しており断面は四角形状を呈している。24は横長剥片を素材とした尖頭状石器で、断面が三角形状を呈している。一側縁のみに調整加工が施されている。A地点とB地点では石器の組成が若干違っているようである。



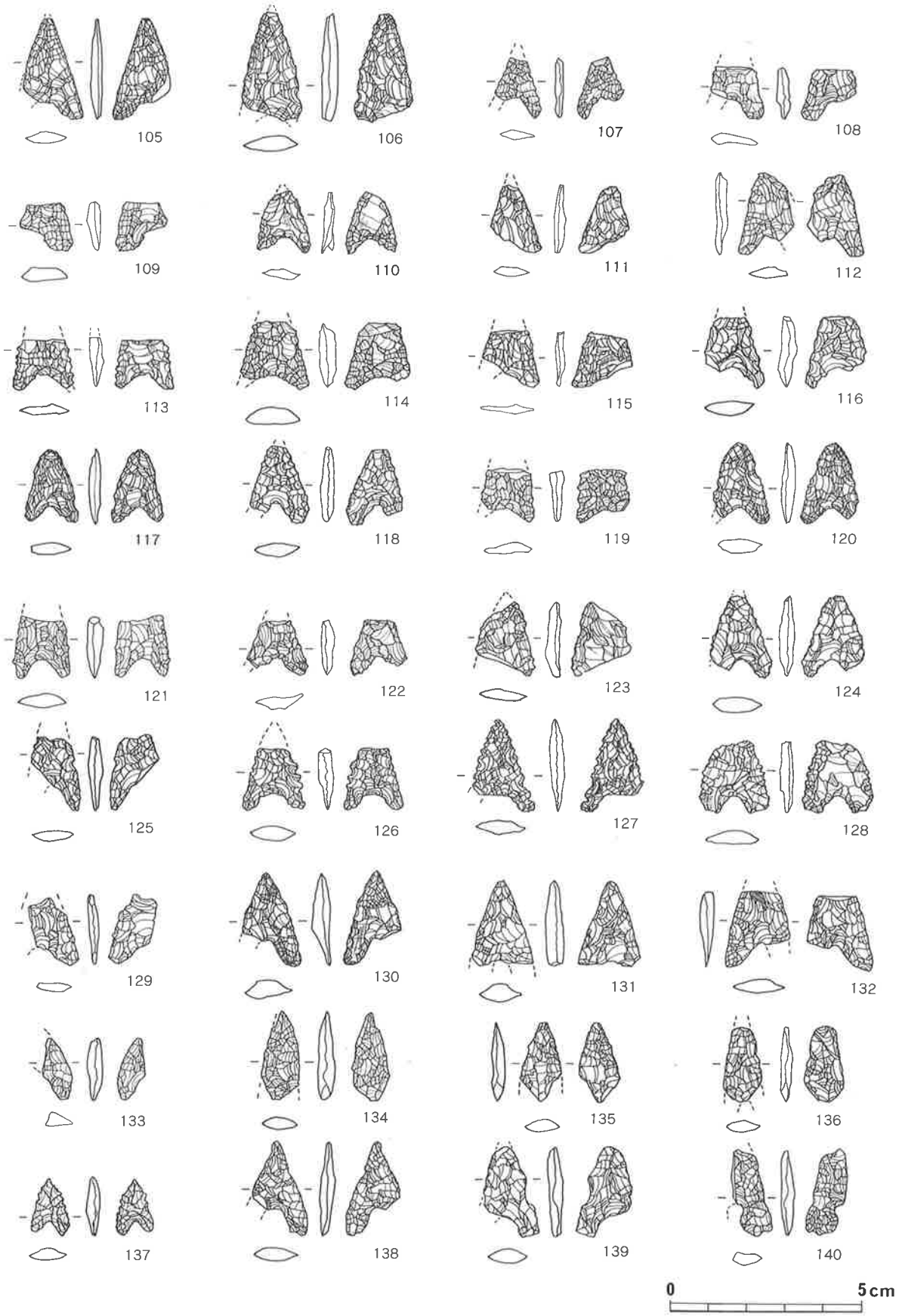
第23図　B地点出土遺物３（2／3）



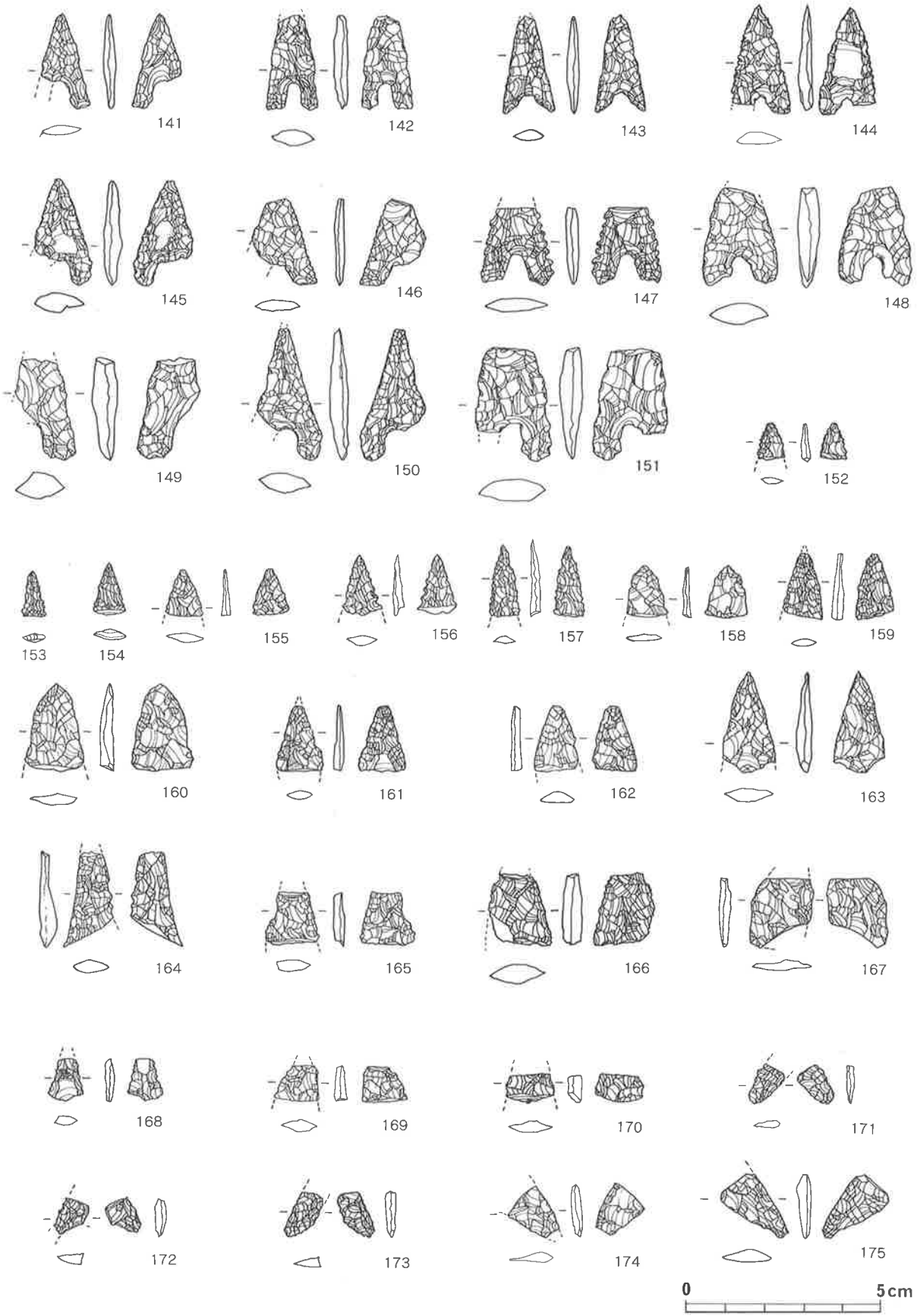
第24図　B地点出土遺物４（2／3）



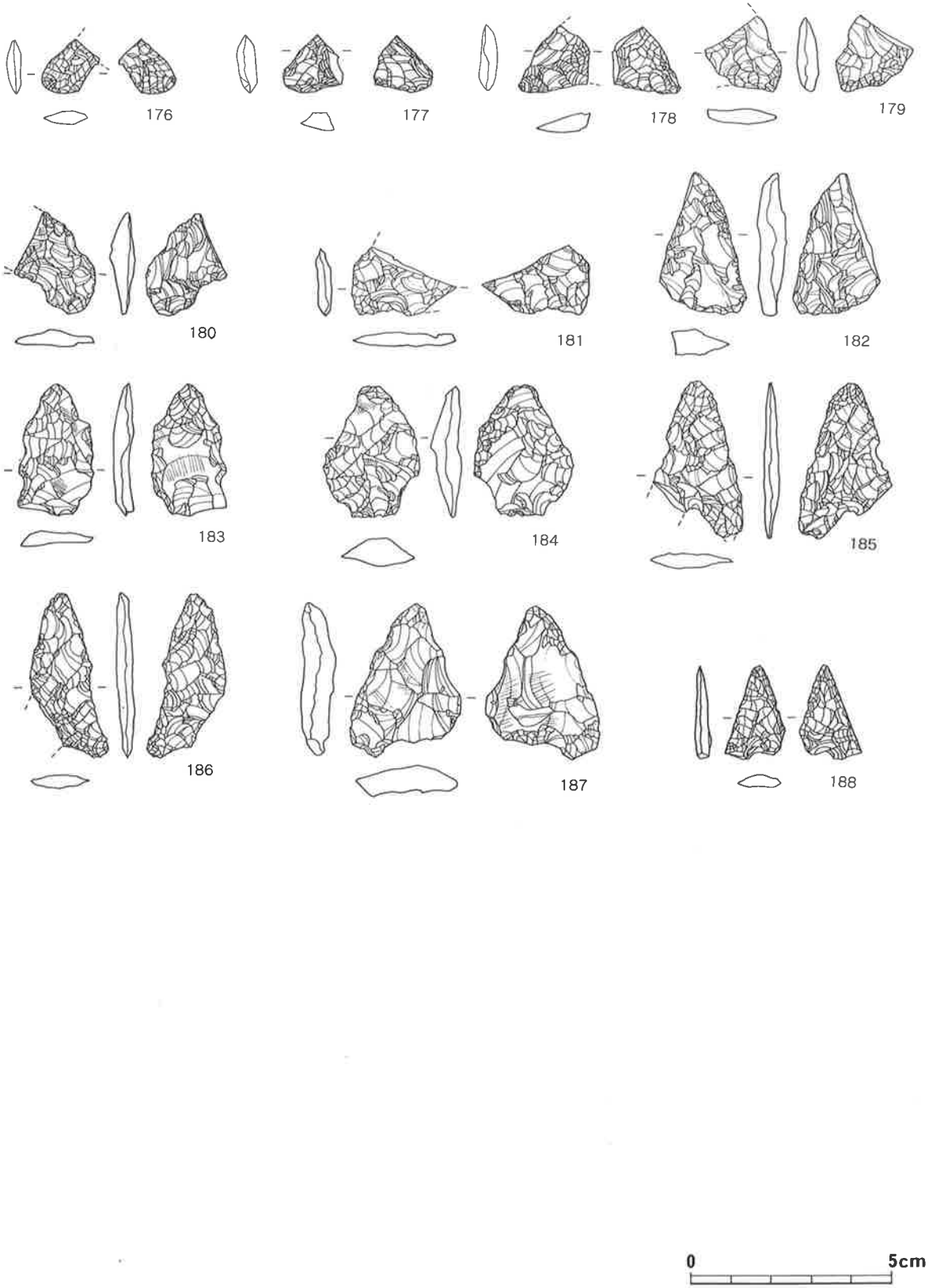
第25図　B地点出土遺物５（2／3）



第26図　B地点出土遺物6（2／3）



第27図　B地点出土遺物７（2／3）



第28図　B地点出土遺物８（2／3）

縄文時代の石器（第23図～第43図）

石鏃（第23図～第28図・表４～表６）

剥片鏃と区別し、ここでは出土した全石鏃215点のうち188点を図示した。分類についてはＡ地点の分類を基本とした。有茎鏃５点、円基鏃８点、平基無茎鏃11点、凹基無茎鏃だが凹みが浅いもの41点、凹基無茎鏃で円形に作り出されているもの70点、異形１点、不明52点である。

２・３・35・47・184が有茎鏃で、３・47は基部に小さな突出を有し、特に３は細かく剥離調整を行っている。184は刃部と基部との境界にわずかに抉り込みを施している。

５～７・37～39・49・183はいずれも二等辺三角形を呈する円基鏃で、主要剥離面をもたない５・６・39・49は入念な平坦剥離を施しており厚手である。183は比較的大型で鋸歯状に加工している。

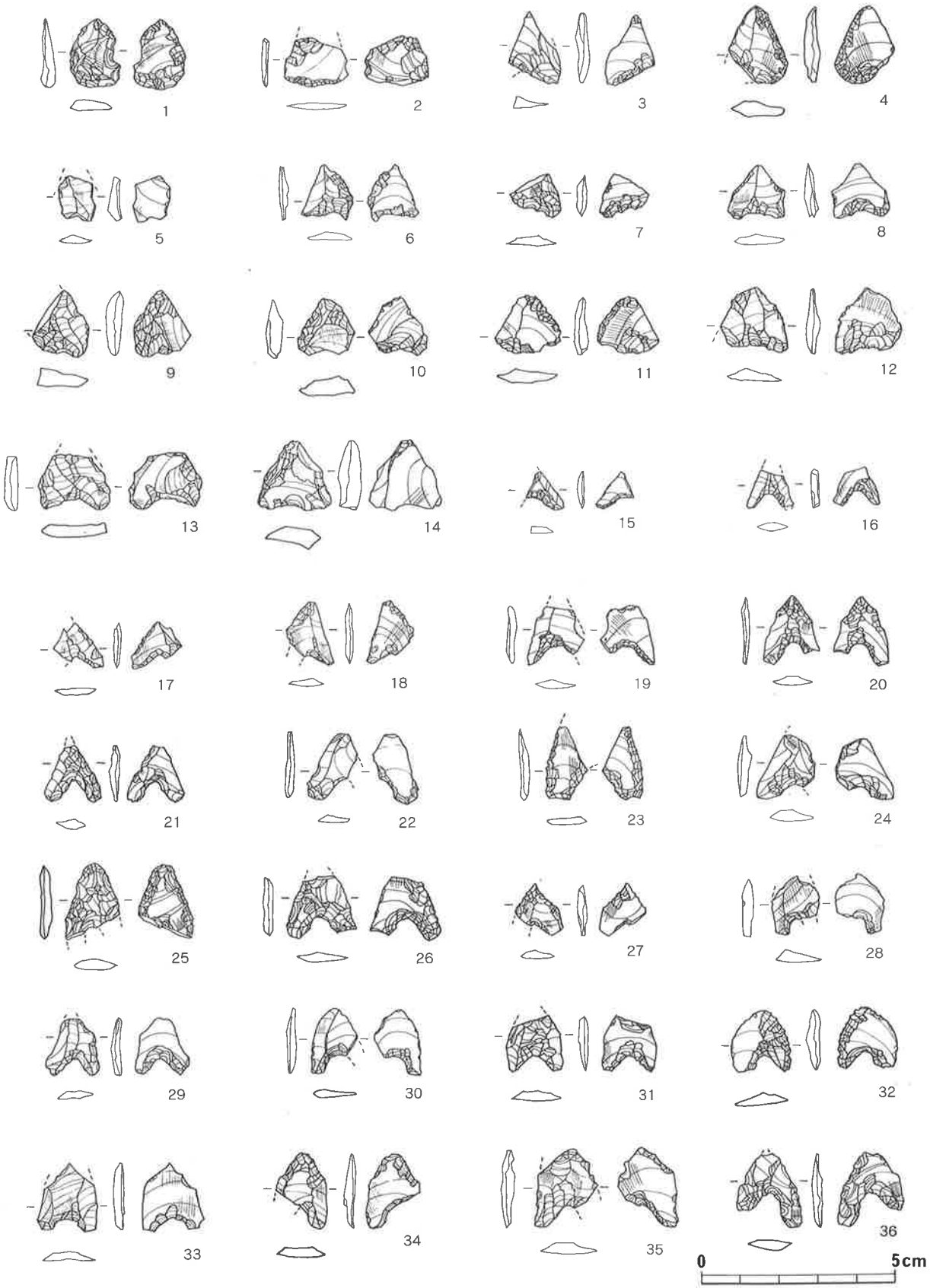
１・４・40～44・46・48・52・54が平基無茎鏃で、１・４の正三角形タイプと二等辺三角形タイプにわかれる。４は自然面を大きく残すが裏面に緻密な刃部調整痕を残している。40は鋸歯状加工をし、43は側縁に抉り込みを施しており丁寧な平坦剥離調整が行われている。

凹みが浅い凹基無茎鏃は、11の正三角形タイプと二等辺三角形タイプがある。11は刃部の一部に鋸歯状加工を行っている。二等辺三角形タイプは基部が外反する12・16・57・58・61・67・82・83・114・115の10点と外反しないもの15・20・59・62・64～66・68・70・72・74・76・84・85・91～93・96・101の19点、基部が袴型を呈する63・71・86・88の４点、刃部に抉り込みを入れた27、80・81の大型と45・55・178・179の不明４点がある。基部が外反するもののうち83は先端部を作り出していない。12・115については脚部の形態が82と類似するためほぼ同一タイプであろう。基部が外反しないものの中で92は円形につくられた先端部をもち脚端部を擦り潰している。101は局部磨製を施している。基部が袴形のものはほぼ刃部中央から角度に変化を付け基部を形成している。86は基部の幅が脚部にかけて尻すぼみに狭まり、88においては基部から先端部にかけては直線的になっている。

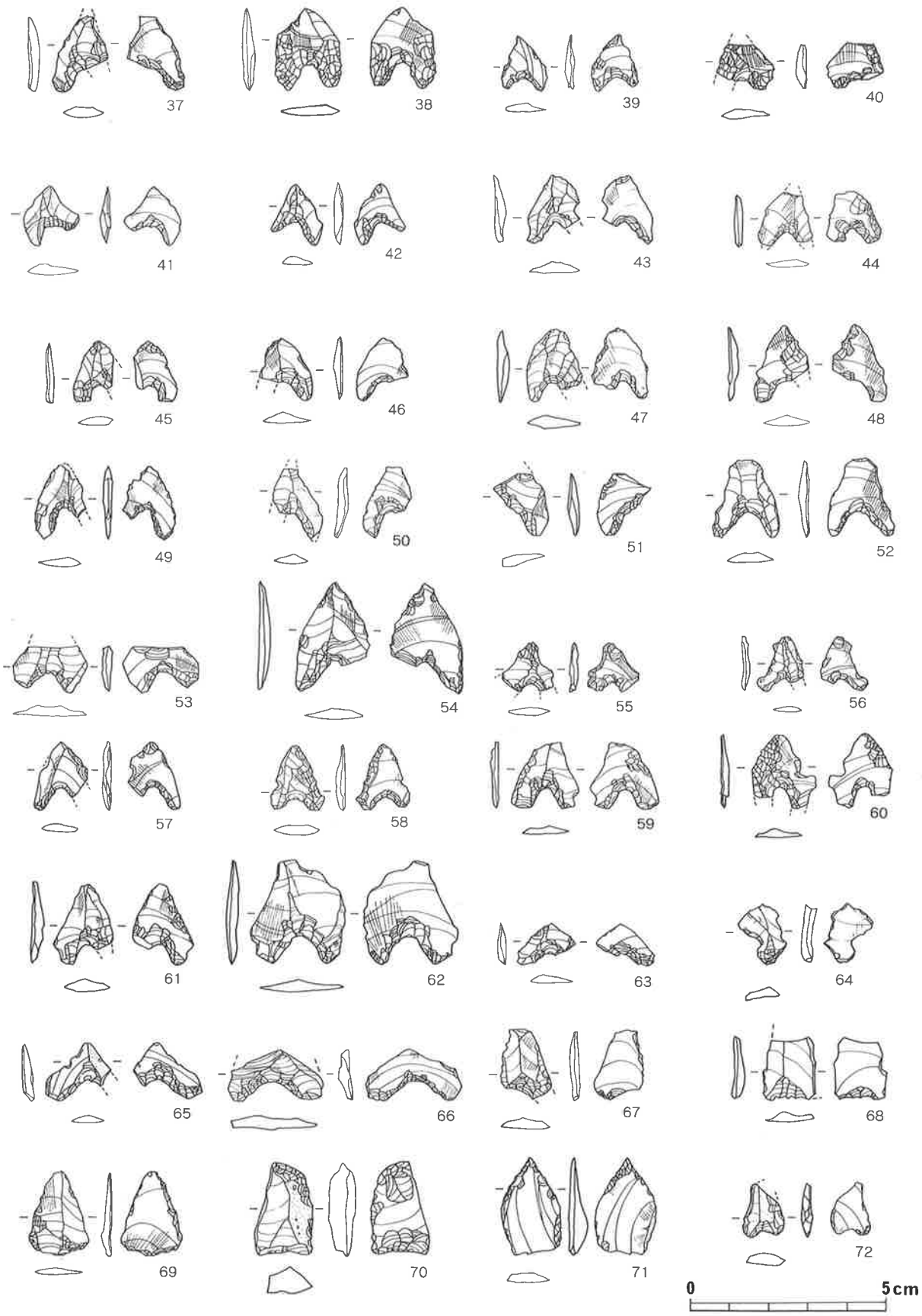
円形に作り出された凹基無茎鏃は、脚部が短い19・73・90・99・106の５点と脚部が長く脚部のつけ根が直線気味の14・87・89・94・95・98・105・110・126・127・143の11点、脚部が長く脚部のつけ根が直線気味でないもの46点、大型３点、不明５点がある。脚部が短いものはすべて二等辺三角形タイプである。脚部つけ根が直線気味のものもすべて二等辺三角形タイプで、110を除いて縦長である。脚部が長く脚部つけ根が直線気味でないものはさらに、脚端部が平らあるいはやや内湾して全体的に安定感があるもの20点とそうでないもの26点に区別した。安定感があるものは正三角形タイプの24～26・133と二等辺三角形タイプの10・128・138～142・144～151・176にわけられる。欠損のものを除き先端部は鋭く作り出されている。10・149は同一個体である。全体的に安定感が弱い22・36・60・97・100・102・104・107～109・112・113・116～122・124・125・129～132・137がある。特に60・104は刃部から先端部にかけて張りを持ち脚端部を鋭く加工している。100は先端部を作り出さず円形に入念に加工している。185～187は大型鏃で、185は薄く仕上げ先端部は丸く加工されている。

34は異形鏃で、上下につぶれた三角形型を呈し粗雑な剥離調整を施している。

石鏃は刃部に鋸歯状加工を施している資料が多く、個体別に緻密な調整のものがほとんどである。

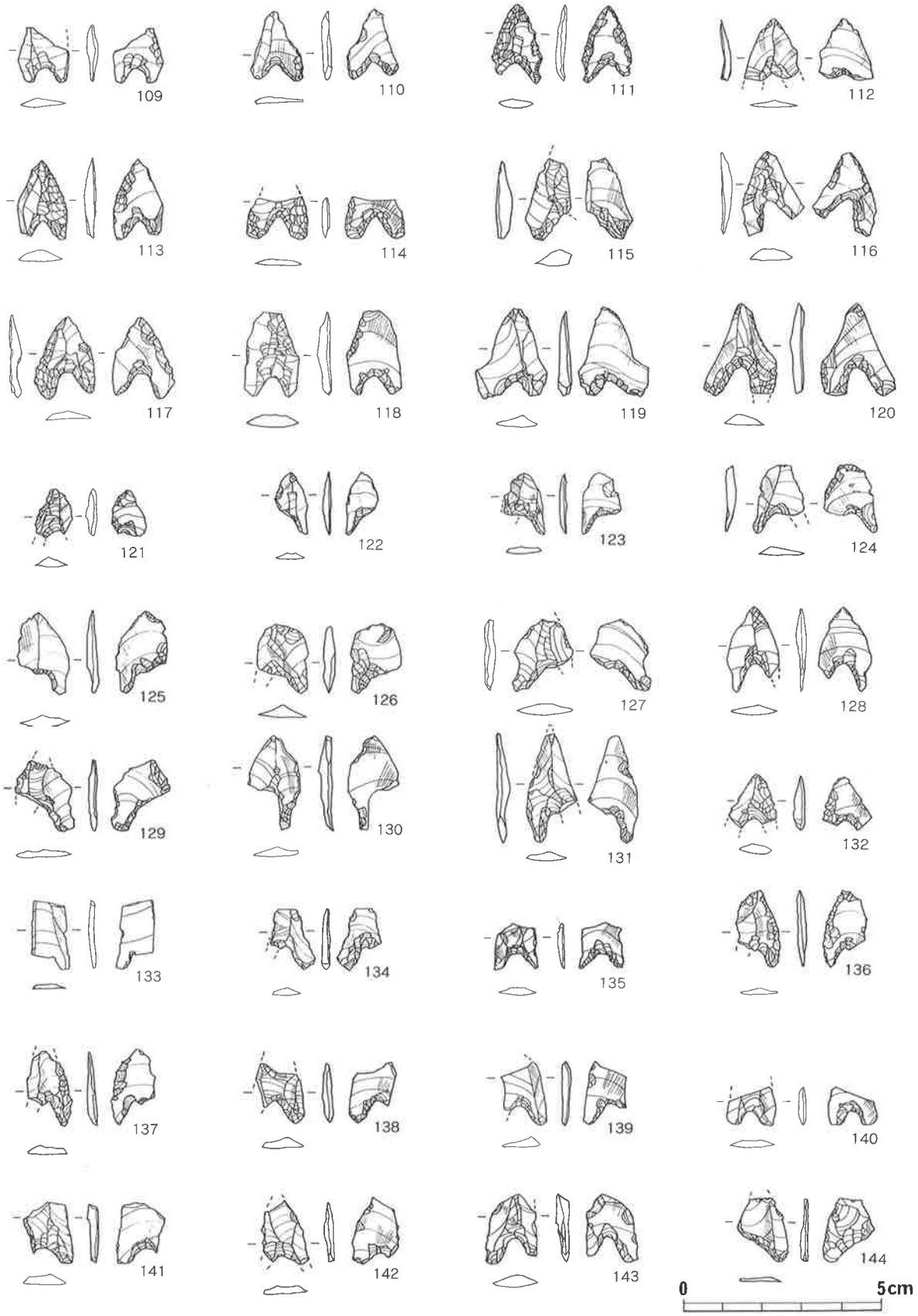


第29図　B地点出土遺物９（2／3）



第30図　B地点出土遺物10（2／3）

第31図　B地点出土遺物11（2／3）



第32図　B地点出土遺物12（2／3）

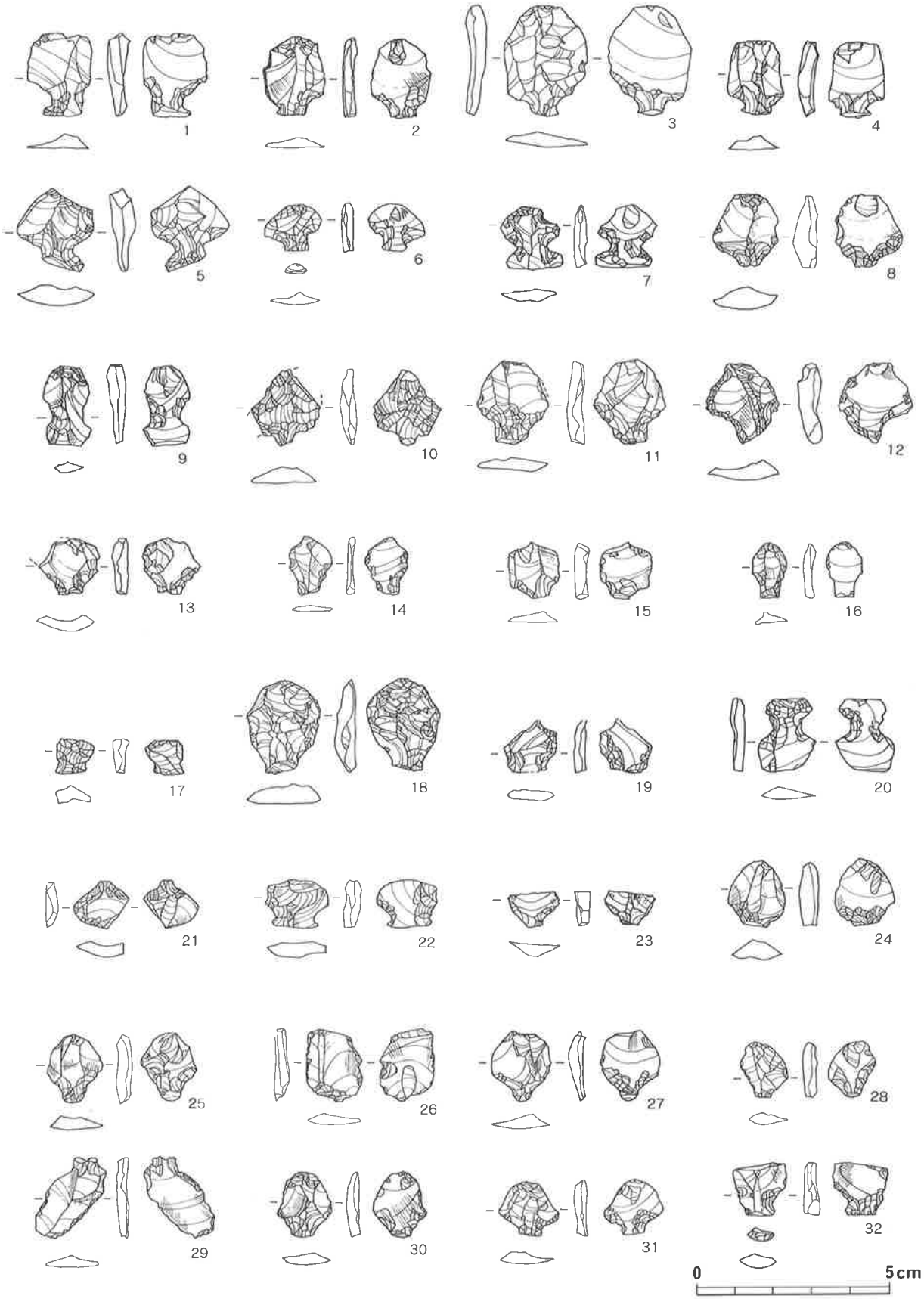
第33図　B地点出土遺物13（2／3）

剝片鏃（第29図～第33図・表６～表８）

剝片鏃は、石核から剝がされた縦長剝片を素材とし、刃部形成などわずかな剝離調整を施しており、剝片の薄さを最大限に生かした大量生産が可能な石鏃である。186点が出土しそのうち162点を図示した。これらを平面形から２～66の正三角形タイプと１・67～162の二等辺三角形タイプとに分類した。

正三角形タイプは65点で、細分できなかったもの10点を含む。２・４・11は円基状を呈し４・11の刃部には丁寧な調整が行われ、細かな鋸歯状を呈する。５～８・10・12～14は凹みが浅い凹基状を呈し、８は刃部に突起を有し、10・14は厚手で裏面から垂直に加工を行っている。16・21・26・30は脚部が長いもので、30は基部のみ調整を行っている。20・27・31・34・35・38は先端部を鋭利に作り出しており、いずれもホームベース型を呈している。32・36・37・39～42・44～47・52・54は刃部から基部へ内湾しており、52は先端部を作り出していない。18・22・24・28・29・43・48～50・53・55～62・66は刃部と脚部との境にかえし状の突起を持っており、すべて突起部分には剝離調整が施されている。63・65は異形鏃で、脚部が外側に踏ん張っており基部には著しい調整が施されている。

二等辺三角形タイプは97点ありうち細分できなかったものは９点である。１・69・71は円基・平基



第34図　B地点出土遺物14（2／3）

第35図　B地点出土遺物15（2／3）

第36図　B地点出土遺物16（2／3）

状のもので、１の刃部には抉入加工が施してある。70・72～79は凹みが浅い凹基状のもので、74のように刃部に突出を持つものがある。81～92・94～101・105・108は先端部に加工が施されており、85・86のように刃部を人為的に作り出したものと、82のように丸いものがある。99は剥片の一部に加工を施している。113・115・117・136・137・146・148・151・152は基部と刃部に丁寧な加工を施している。106・107・109・110・112・116・118～120・145は脚部に段を有するもので、106・107のようにかえし状の加工をするものもある。80・93・111・121～131・147は刃部に張りを有し脚が反りをもつもので脚は細いものが多く、張りの部分はかえしの機能を有すると思われる。104・133・135・138・139・141～143・149・150・153～155・157・158・160は刃部から脚部にかけて直線的になり、脚部には剥離加工を施していないものがほとんどで、一次加工の剥離面をそのまま利用している。102・103は脚部がどっしりしており、刃部は鋸歯状を呈する。67・134は異形鏃で、67の脚部は丁寧な加工を施している。134は刃部が垂直に立上り脚端部が張っている。石材にはすべて黒曜石を用いている。

つまみ形石器（第34図・第35図）

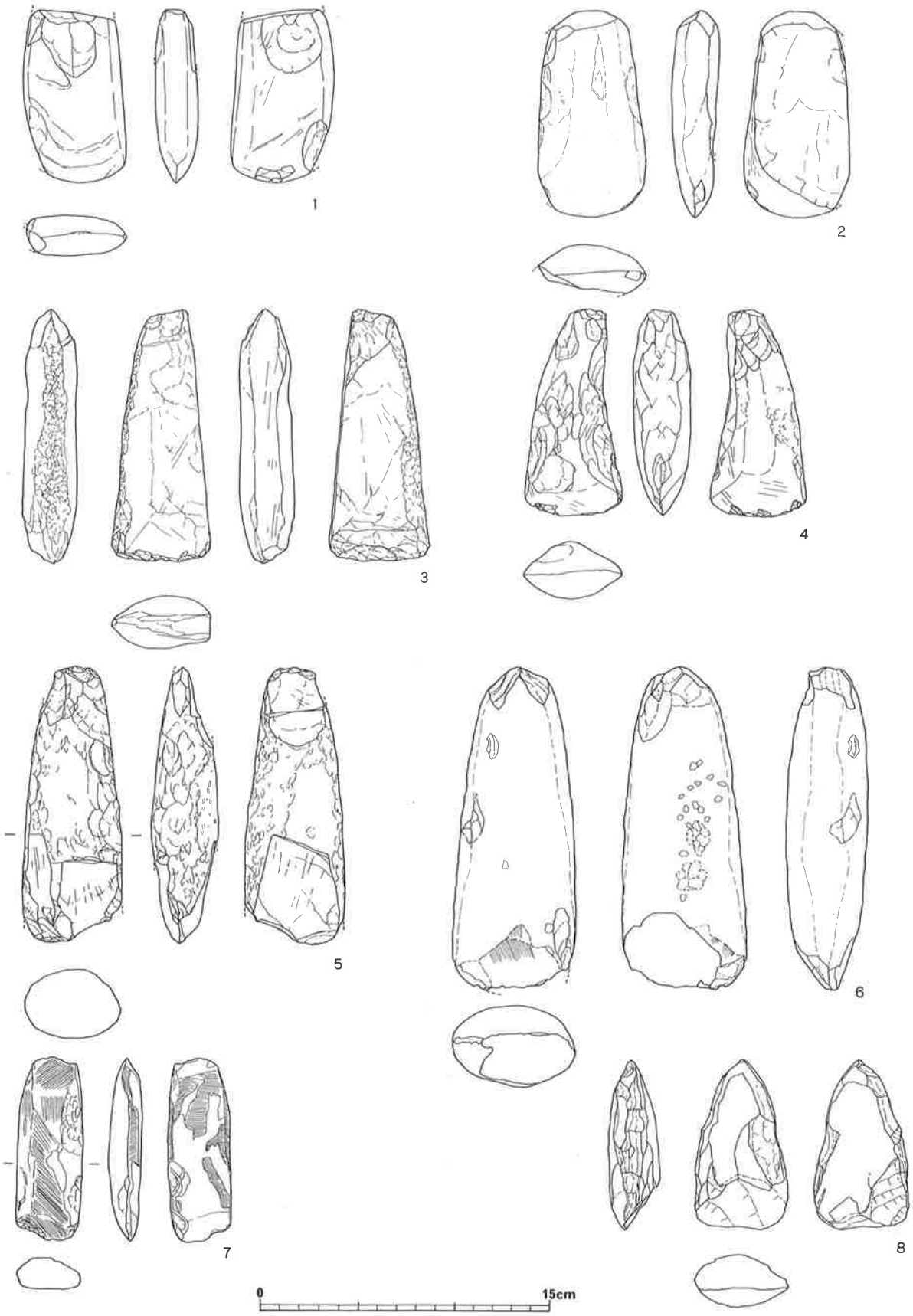
62点中59点を図示した。そのうち剥片鏃の未製品と思われる29・54も含む。つまみ形石器は剥片鏃の製作過程で産出する抉入加工を入念に施したものである。縦長剥片から剥片鏃を製作するにはその抉入部分に表面あるいは裏面から切断し、もう一方の剥片を鏃に加工する必要がある。つまみ形石器はその形態から抉入加工が浅いもの、抉入部より上部が横長の楕円形のもの、抉入部より上部が円形のもの、抉入部より上部が縦長のものに分類した。このつまみ形石器の石材はすべて黒曜石である。

９・14・16・36・39・40・44・50～52は抉入加工が浅いもので、40は抉入部の上部にわずかに加工痕を有している。44は周囲に調整を施している。50は右側縁を薄くするためか剥離が著しい。５～７・12・13・17・19・20～23・31・33～35・37・38・42・47・48・55・57・58は抉入部より上部が横長の楕円形のものである。12は特に左側縁に刃部加工と思われる調整を行っている。38は左側縁に抉り込みを施している。58は全面に剥離調整があり、鏃などに再加工したものと思われる。10・11・18・24・25・27・28・30・41・49は抉入部より上部が円形のものである。18は全面に剥離加工が施され刃部が鋭利に作り出されている。30は左側縁の加工から剥片鏃として再利用されている。１～４・８・15・26・32・43・45・46・53・56・59は抉入部より上部が縦長のものである。２・６・45・53・59は使用痕や調整加工が残り、特に45は鏃として使用している。

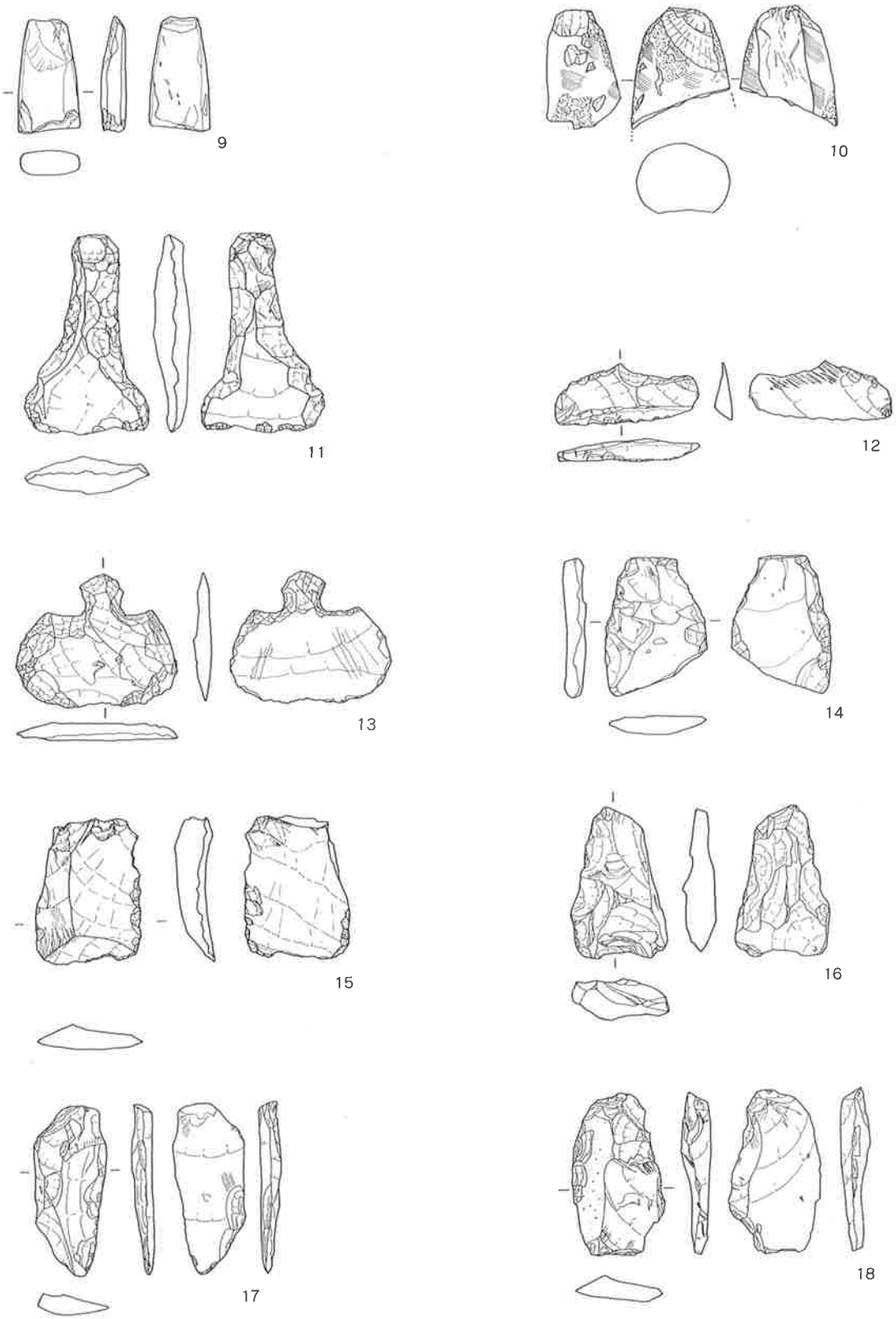
石錐（第36図）

石錐は27点を図示した。つまみ部分の形から４つに分類した。石材は24以外はすべて黒曜石である。

２・６・22・25・26は垂直に立ち上がるもので、26をのぞいてつまみ部分は剥離を残している。いずれも先端部を欠損している。１・３・５は小型のもので、３・５は断面が三角形でかなり厚手である。１の先端部には擦痕がみられる。10・13～16・18は大型のもので、つまみの周囲に剥離加工を施している。10以外は先端部を欠損している。17・19・20・21・23・24・27は錐部が短いもので、17・

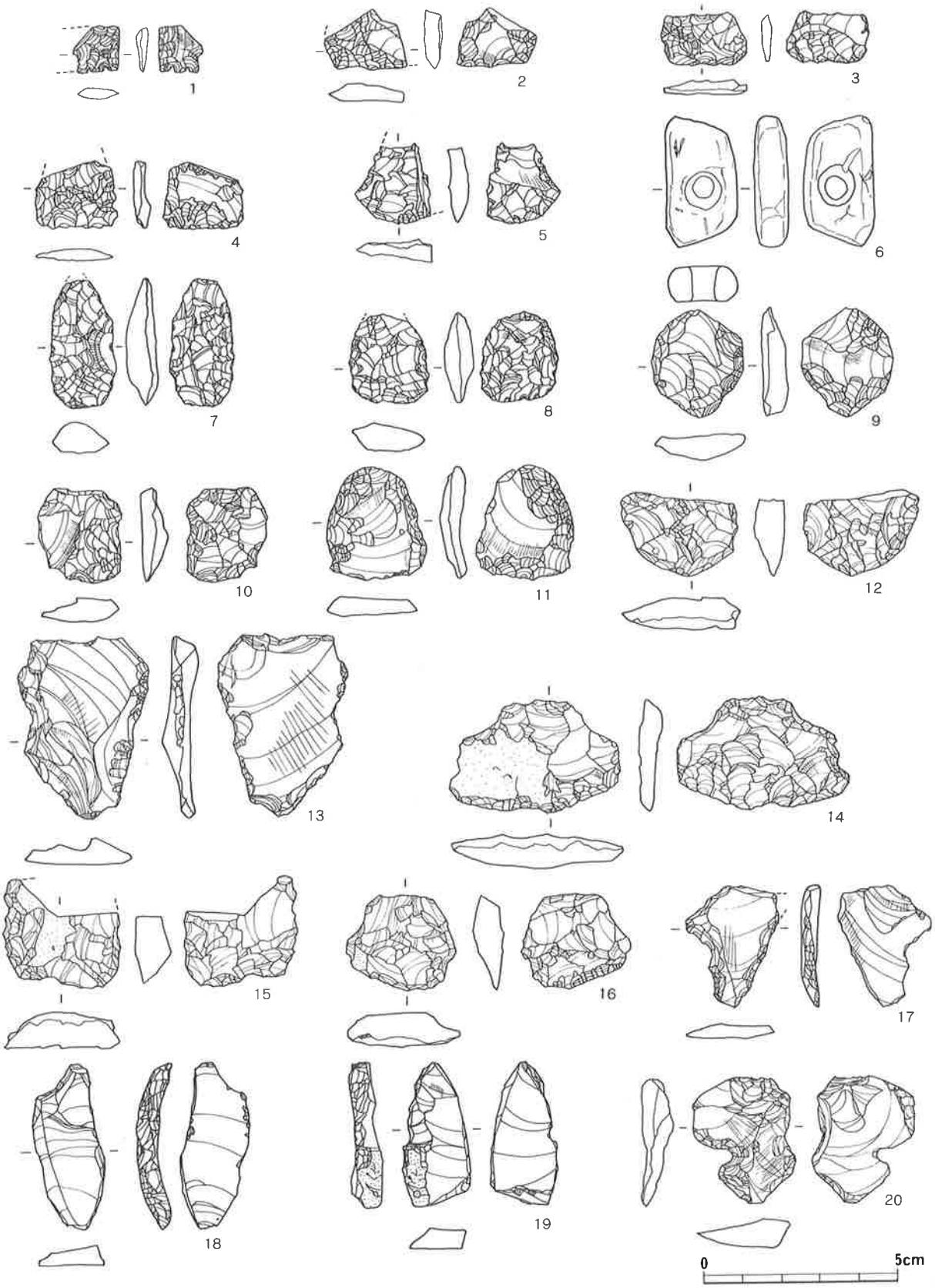


第37図　B地点出土遺物17（1／3）



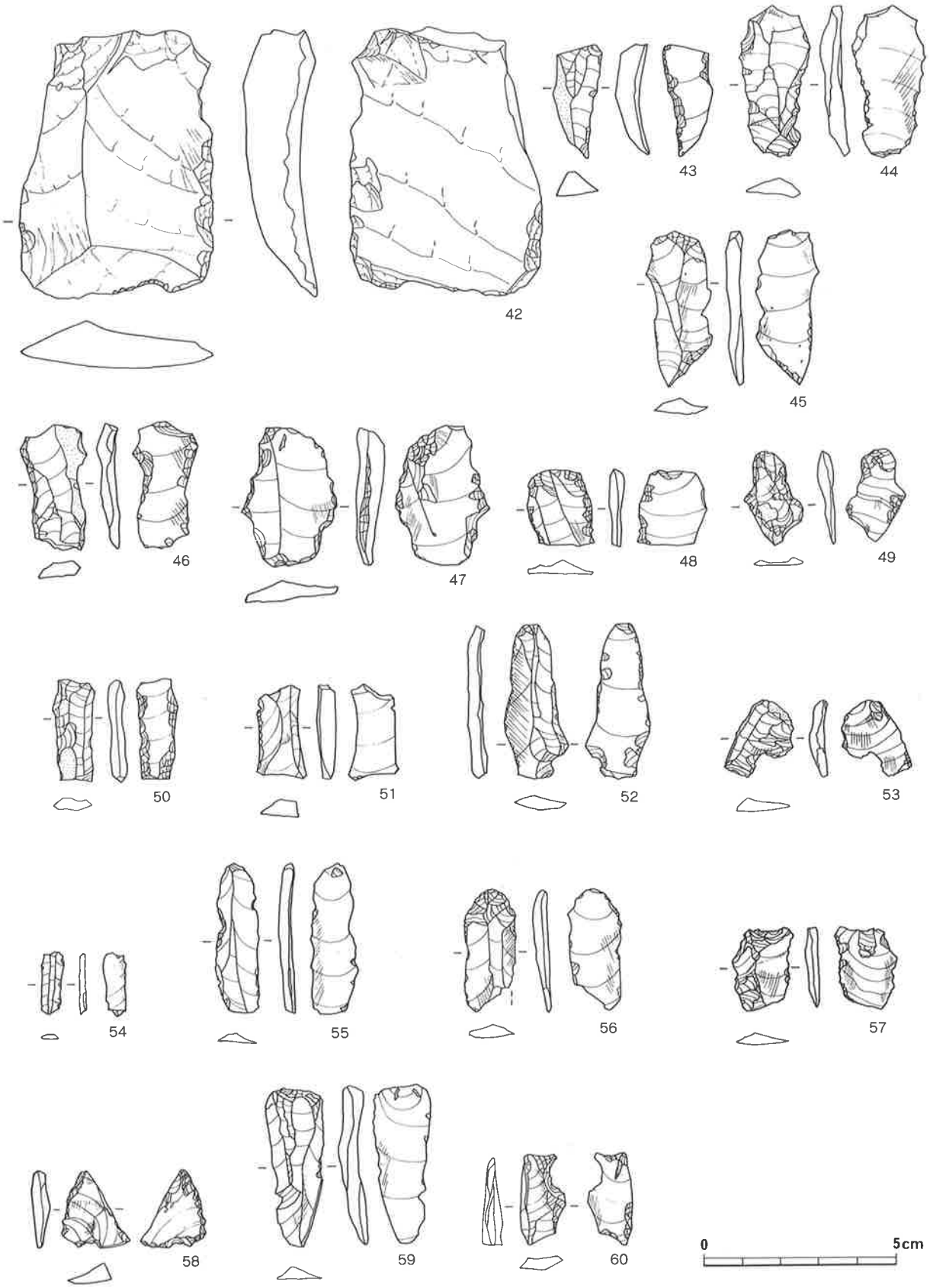
第38図　B地点出土遺物18（1／3）

第39図　B地点出土遺物19（1／3）

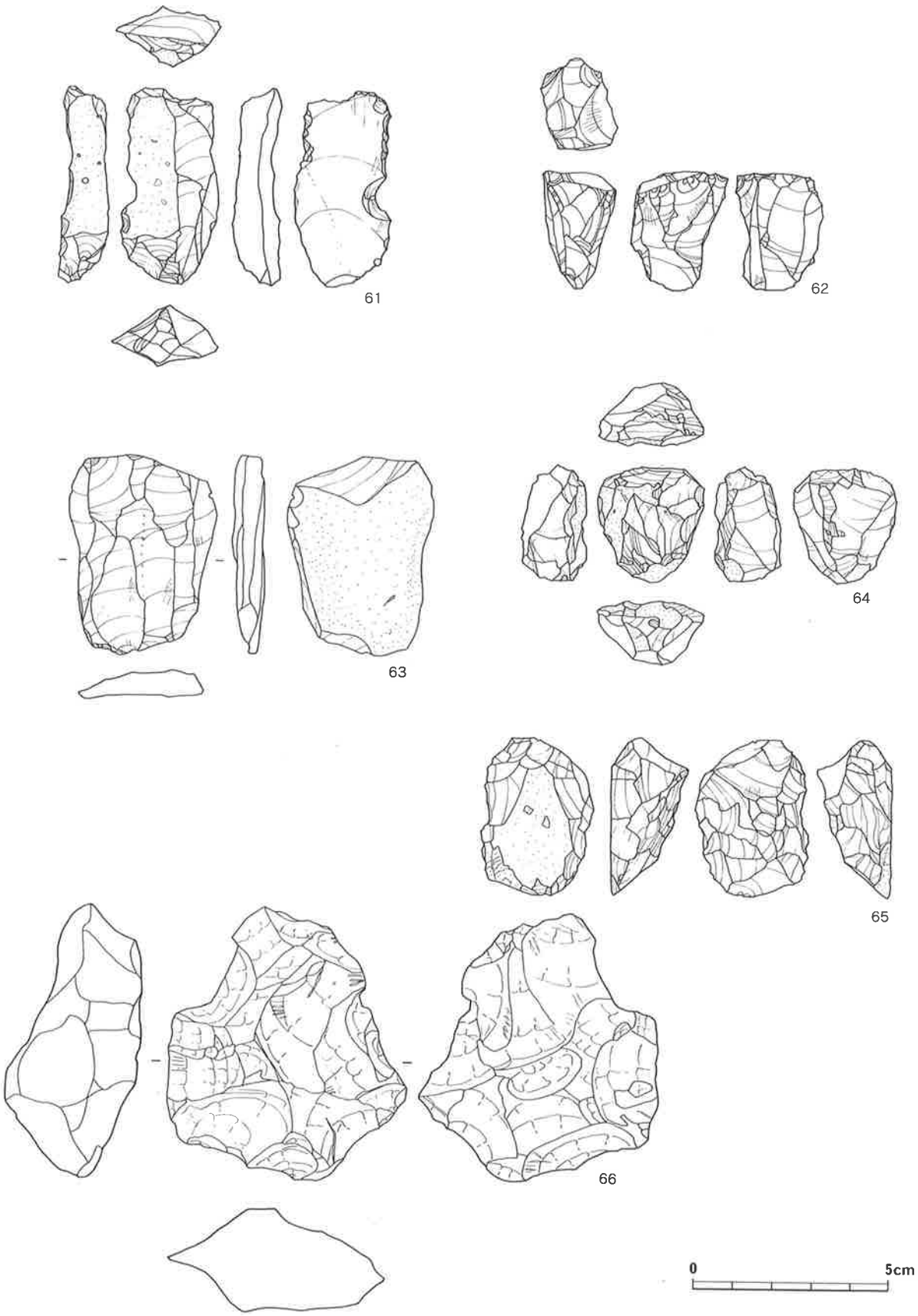


第40図　B地点出土遺物20（2／3）

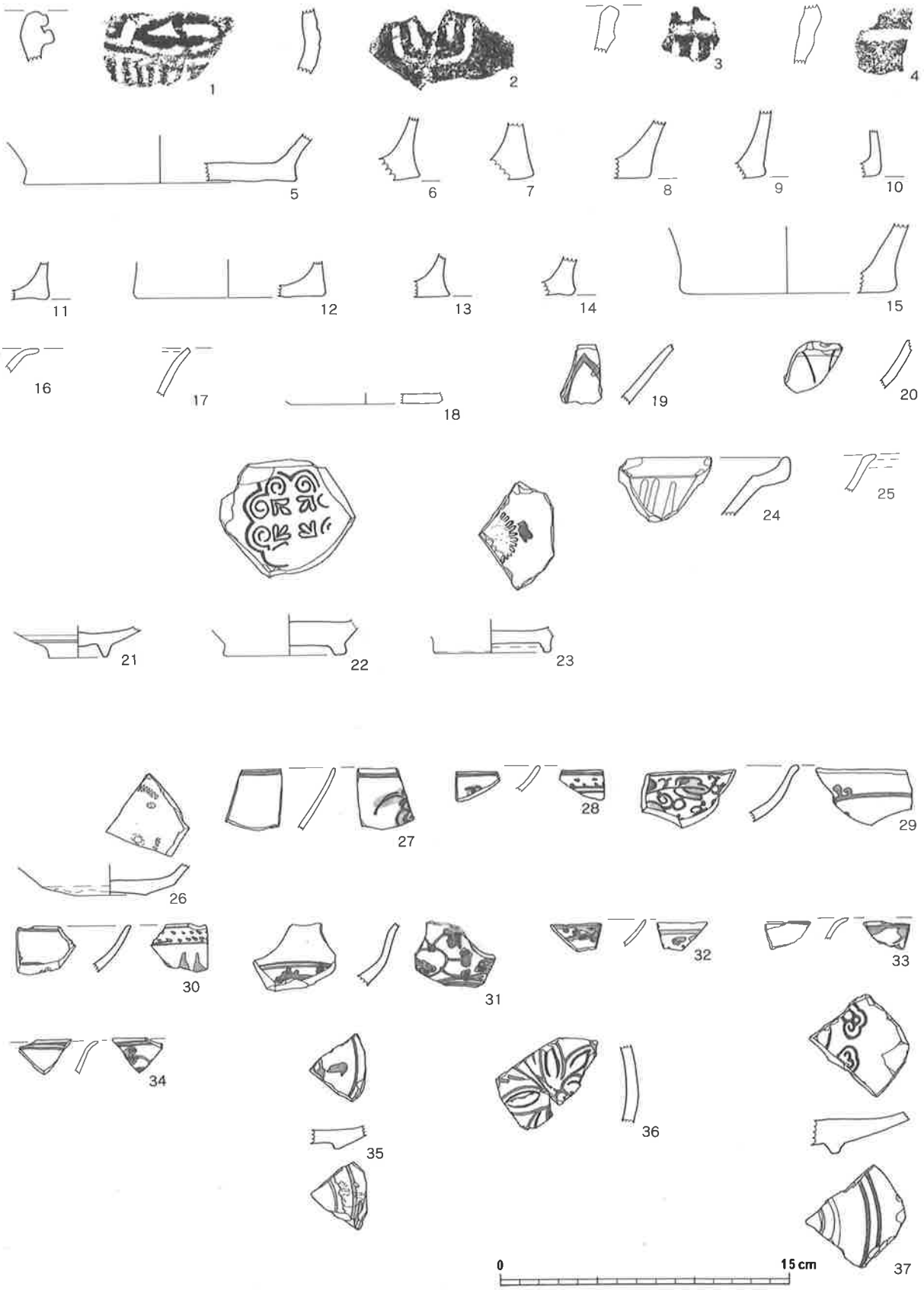
第41図　B地点出土遺物21（2／3）



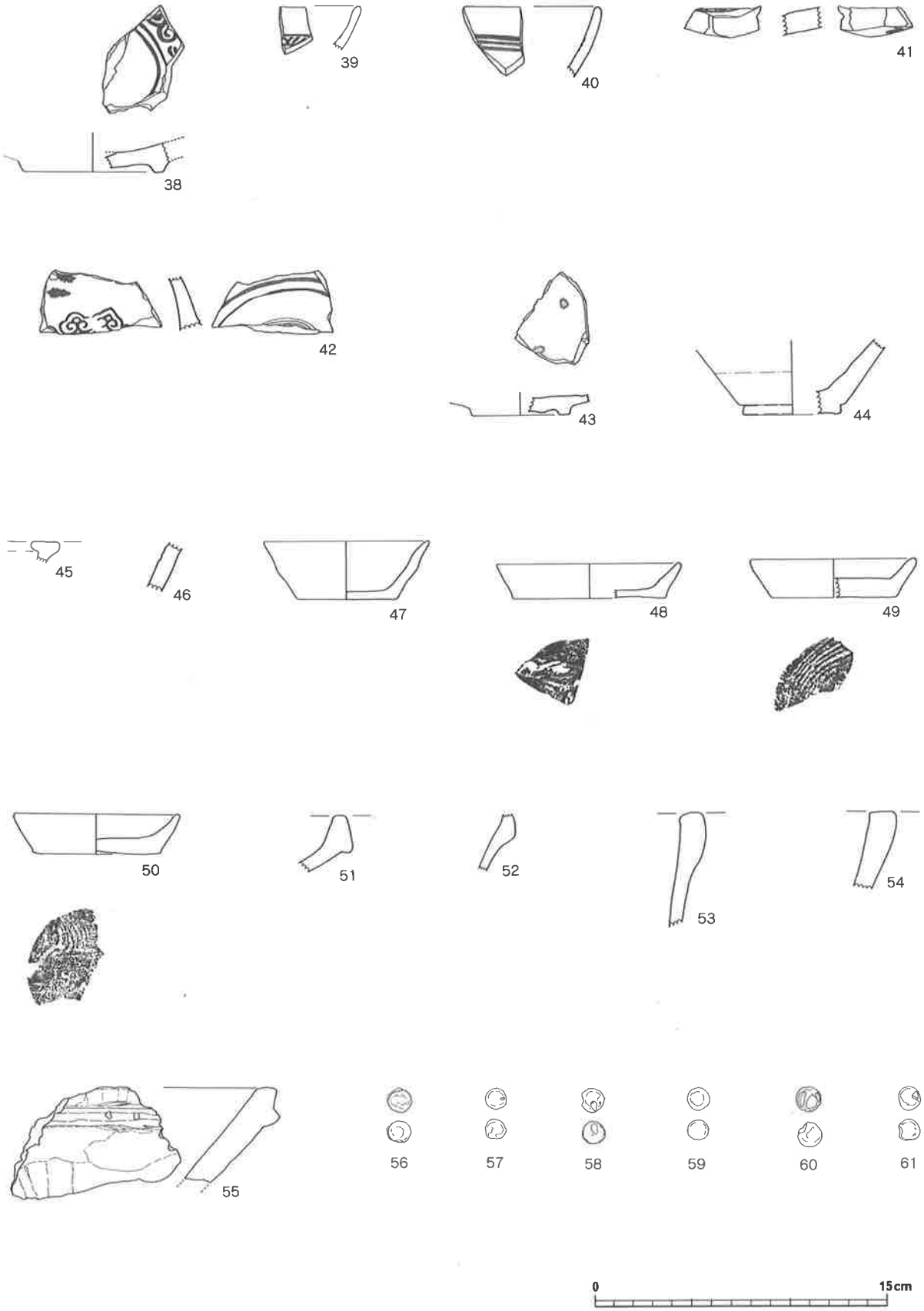
第42図　B地点出土遺物22（2／3）



第43図　B地点出土遺物23（2／3）



第44図　B地点出土遺物24（1／3）



第45図　B地点出土遺物25（1／3）

20は横長で、それ以外は縦長である。24は安山岩製の大型の石錐で、先端部に使用痕が認められる。４・７～９・11・12はつまみ部分が欠損し、細分できなかったもので、入念な加工が施されている。

その他の石器（第37図～第43図）

石斧（第37図・第38図）

１～10が磨製石斧で、すべて欠損し磨滅している。９以外は敲打が残っており、局部研磨をしている。７は扁平片刃石斧で、両端を使用している。７・９以外は両刃に作り出されている。１・２は外形が長方形で厚みは両刃のなかでは比較的薄い。基部に対して刃部が幅広いものは肥厚である。

スクレイパー（第38図～第40図・第42図）

32点中25点を図示した。第40図の黒曜石製以外はすべて安山岩製である。第38図13は横長剥片を素材とした石匙である。第38図・第39図11・16・19～21・23～25は鎌崎型スクレイパーといわれているもので、特に11・19・24は撥状を呈している。第40図８～11・13・14はラウンドスクレイパーと思われ、周囲に細かな剥離加工を施している。

敲石・凹石（第39図）

27・28の２点出土している。28はNo.36の柱穴から出土している。両面ともに明瞭な凹みを持ち、側面も平たく敲打痕が認められる。

石鋸・サイドブレイド（第40図）

１が石鋸で、抉入部分には入念な加工が施され、基部はシャープに作り出されている。２～５がサイドブレイドで、いずれも刃部形成をしっかり行い、２・３については浅い鋸歯状を呈している。

石製垂飾（第40図）

６は柿色で台形状を呈し、全面に研磨整形を行っている。穿孔は両面から行っている。石材は不明。

尖頭器・彫器（第40図）

７は先端部を欠損しているが、刃部に丁寧な加工を施している尖頭器である。18・19は彫器で、整った縦長剥片を使用し、双方とも彫刃面を作り出している。

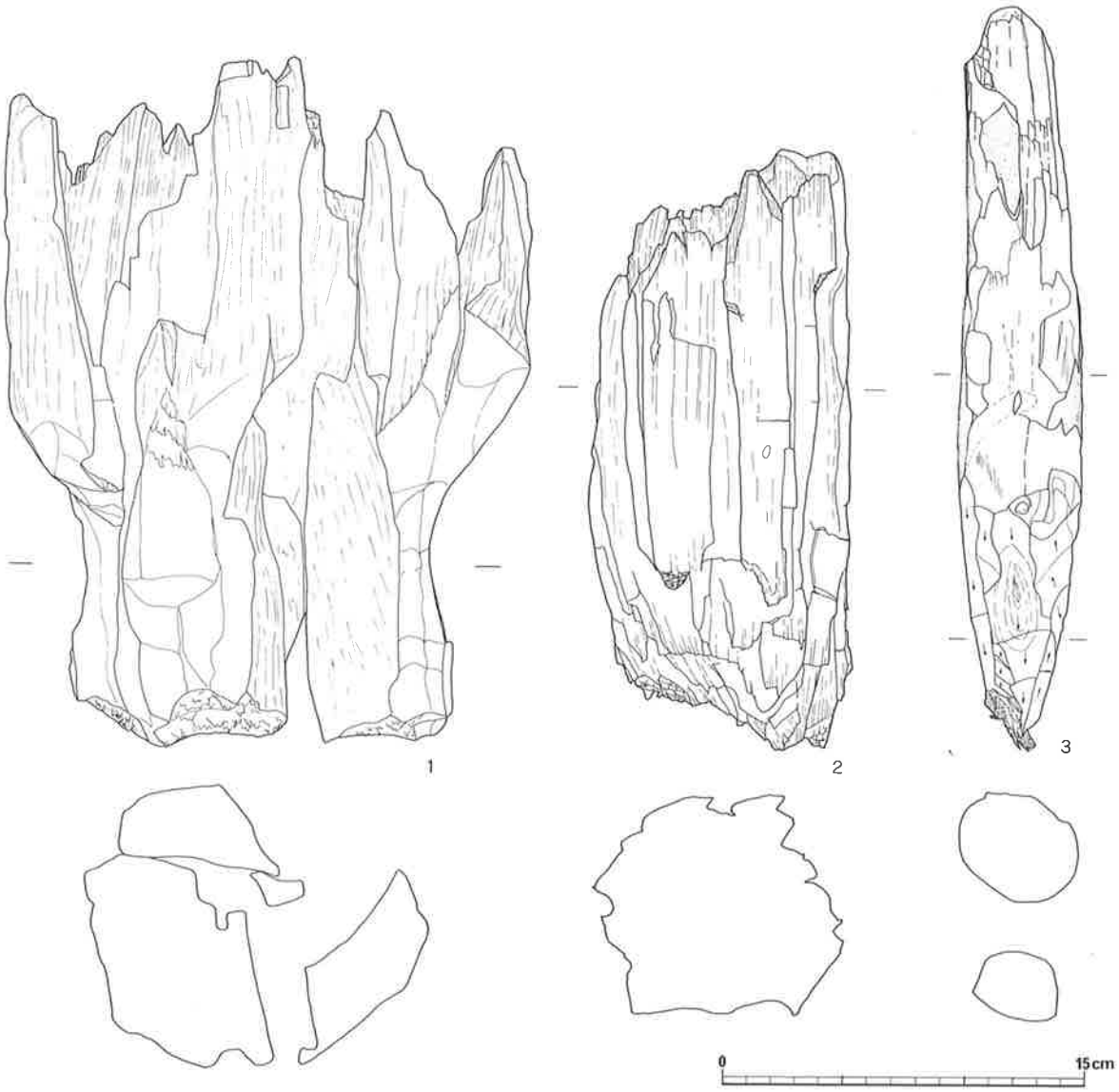
加工痕のある剥片・使用痕のある剥片（第38図～第43図）

17・20～22・28・47・53・60については抉入加工があり、裏面からの垂直方向の剥離加工を持つ。使用痕のある剥片は、15・43～46・48～52・55～59・61で、縦長剥片を使用している。わずかに加工するものもある。

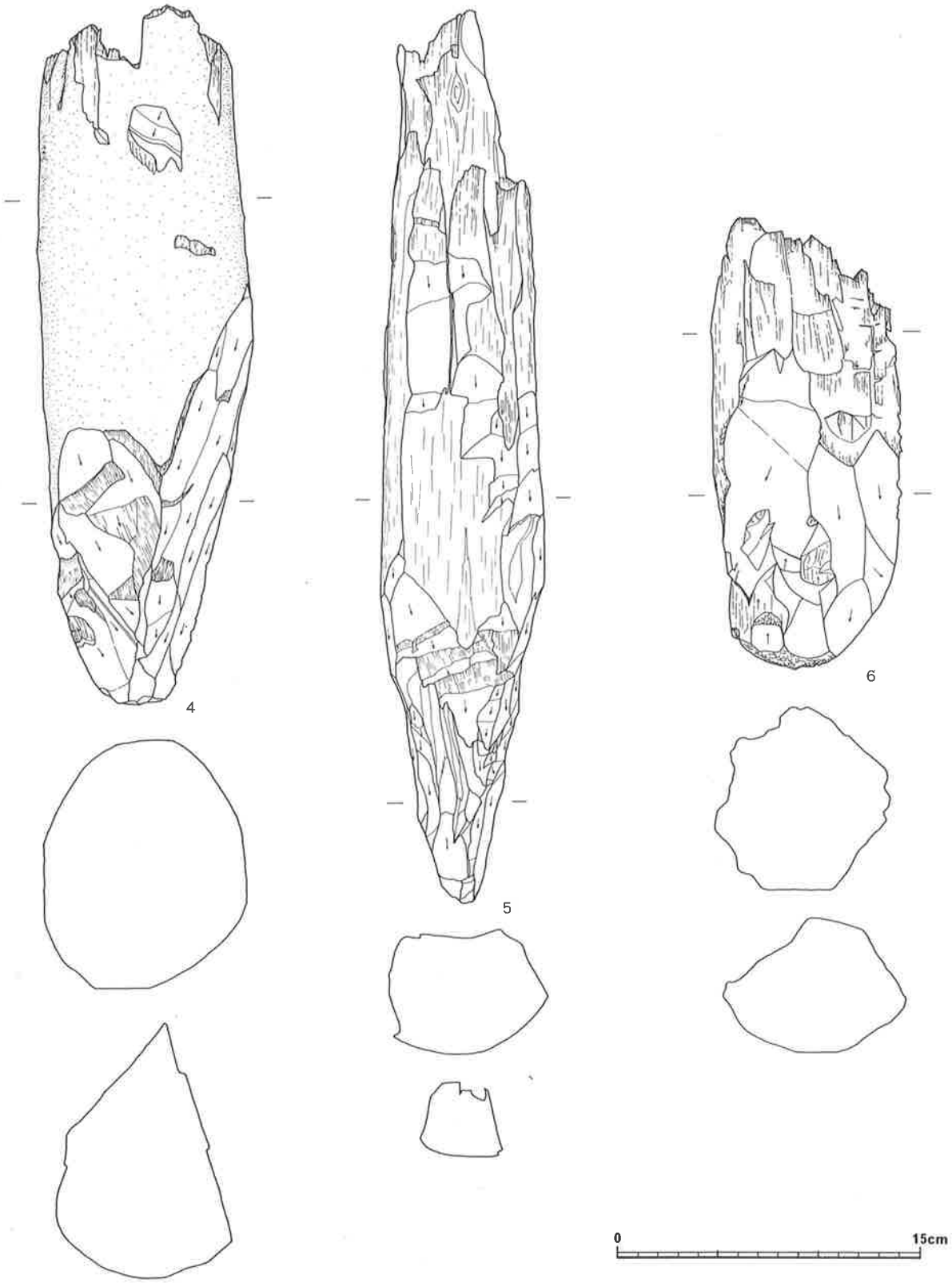
石核（第43図）

63は腰岳産の黒曜石を使用し、縦長剥片を生産するいわゆる鈴桶技法を用いている。65・66は剥片摂取後にスクレイパーとして使用している。

このほかでは、図示できていないが、双角状礫器が1点出土している。



第46図　B地点出土遺物26（1／3）



第47図　B地点出土遺物27（1／3）

縄文時代の土器（第44図）

362点が出土している。しかし、ほとんど無文の土器が多く器形が復元できるものはなかった。その中でも特徴的な口縁部と底部の15点しか図示することができなかった。１～４は文様が認められるものである。１～12の胎土に滑石を含む一群と、13～15の滑石を含まない一群である。１は口縁部に貼付けがあり、その下部に３条の凹線が施されている。２は口縁部に沈線でＵ字形に施文されている。３は凹点と沈線とによって口縁部を作り出している。３も沈線が施されている。２・５はＪ10区の土壙内出土である。これらの土器は明確な区別がつけがたいので、ここでは坂の下Ⅰ式から坂の下Ⅱ式の中で包括しておきたい。

中世の遺物（第44図・第45図）

16～18は輸入陶磁器の白磁で、17は口禿げの碗であろう。19～23は龍泉窯系青磁で、19は鎬連弁文青磁碗で、釉調は緑灰色を呈す。20は線彫りの蓮弁を有す。21は全体に施釉されている。22・23は内面見込に花文を有す。24は盤か鉢であろう。やや斜めに開く体部を有し、口縁端付近で水平に折れひろがって端は上方につまみ上げている。体部内面には菊弁文を型押している。釉は黄色味の緑灰色のガラス質の釉である。25・26は同安窯系青磁の碗と皿である。27～35は明染付で碗と碁笥底を呈する皿がある。36は高麗象嵌の草文梅瓶の破片で黒白の蓮弁文が施されている。37～42は朝鮮産粉青沙器で、白土で象嵌されている。43は見込に砂目痕が２個残っている白磁である。図示していないが朝鮮産はあと40点の破片がある。44は天目碗で、高台脇を水平に削り込んでいる。釉は黒色から黒茶色を呈している。45・46は輸入陶器であろう。47～50は土師器の皿で、47以外は糸切りである。51・52は東播系須恵質捏鉢である。53・54は瓦質土器の捏鉢である。55は石鍋で、体部を口縁斜め上方に立ち上がらせ、鍔の削り出しが小さく断面が三角形状を呈している。石鍋としては末期的な形態をしている。15世紀の所産である。56～61は鉛製の鉄砲玉である。36・55は２号配石遺構より出土している。

木器（第44図・第45図）

木製品・自然木は柱穴内からと１号配石遺構から検出することができた。１は第17図No.20の柱穴内から出土している。柱穴の深さは50cmあり、柱は柱穴内部に直接設置されていた。このためか腐蝕が著しい。現存の長さ28.8cm、直径22.0cmで、柱は中央が腐蝕して空洞になっている。先端部を意識的に直径14.4cmに加工している。２は第17図No.70の柱穴内から出土しており、柱穴は深さ34cmを計る。柱穴内部に直接柱を設置していたため腐蝕が著しい。このため加工の状況は不明である。長さ25.0cm、直径10.9cmを計る。３～６は杭で、１号配石遺構内出土である。３はＨ３区出土で、杭の先端を鋭利に加工している。外面の一部に樹皮が残っている。長さ31.0cm、直径5.1cmを計る。４はＩ３区出土で、上部は腐蝕折れにより欠損している。長さ34.6cm、直径10.5cmを計る。５はＩ３区の西側で検出した。上部は腐蝕折れにより欠損しており、長さ44.2cm、直径8.1cmを計る。杭先端を鋭利に加工している。６はＩ３区の東側で検出した。杭の先端は丸くなっている。長さ22.3cm、直径9.3cmを計る。

３．Ｃ地点の調査（第48図）

Ｃ地点の調査は、圃場整備で削平される地区を対象としていた。調査は平成７年６月29日から開始し、予定地の表土剝ぎから取りかかった。途中でＢ地点と並行して調査を行ったり、あるいは調査の進捗状況をみながら中断したりした。最終的にＣ地点のピットの実測及び写真撮影が終了したのは10月30日であった。なお、調査した面積は33.8m²である。

調査地点については、平成２年度に行った14トレンチ調査区のすぐ北側に位置している。

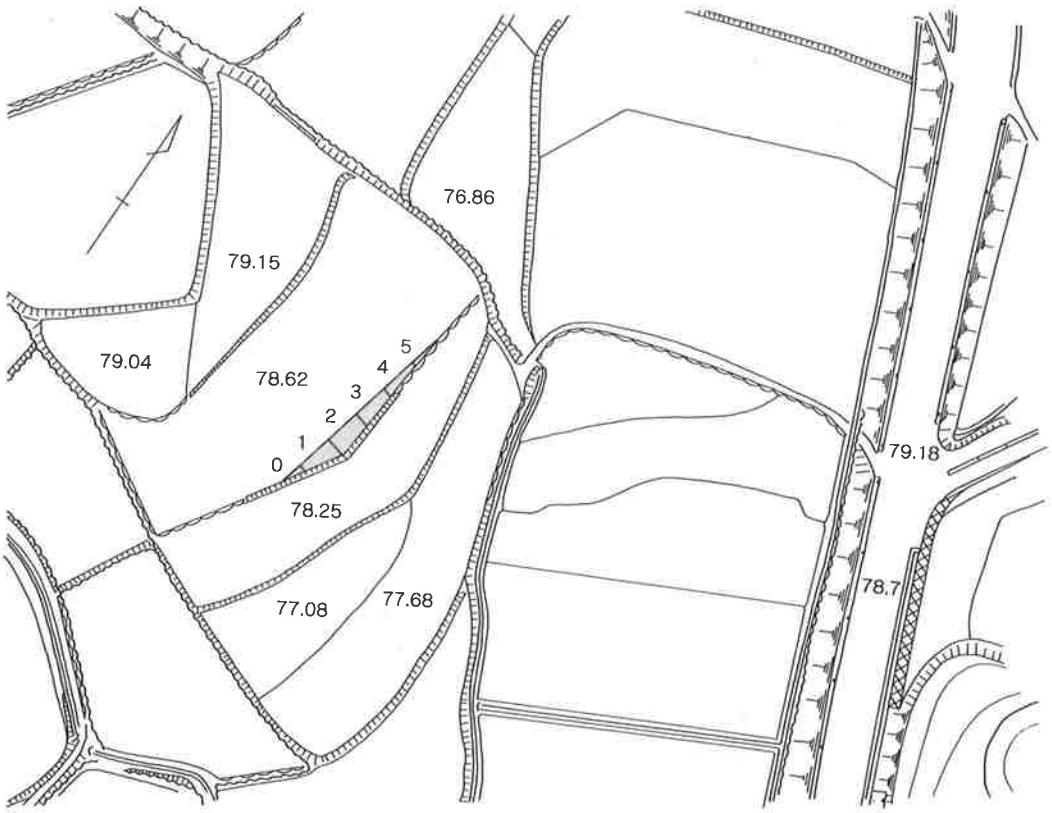
調査は、Ａ地点同様にグリット法による５ｍのメッシュに区切って、南から北へ０～５の記号を付し、各調査区の名称はＣ１・Ｃ２というように呼称した。

なお、調査における記録措置は、Ａ地点同様に土層図作成については1／20を基本とし、ピットについても1／20で実測を行った。写真撮影もＡ地点同様に行った。

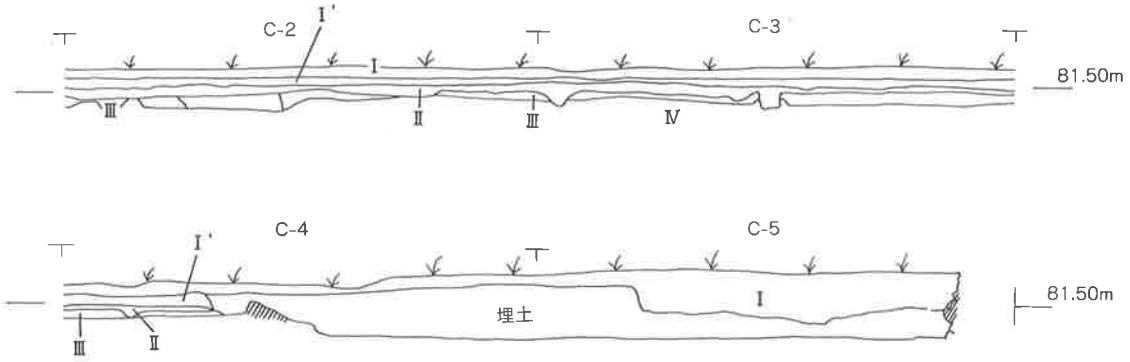
なお、出土した遺物のナンバーリングは、ＴＡＧＣＣＯⅢ（田川遺跡Ｃ地点ＣＯ区のⅢ層出土）、ＴＡＧＣＣＯＨ（田川遺跡Ｃ地点ＣＯ区の耕作土出土）というように付した。

(1)土　層（第49図）

Ｃ地点の土層は、調査区の東側が水田の畦畔にあたっているため、西壁で土層堆積状況を確認した。全体的に薄い堆積で、Ⅰ層は耕作土で10cmの厚さがある。Ⅰ層の下には厚さ10cmの濁黄色と灰褐色が混在した埋土層がある。Ⅱ層は茶褐色粘質で、厚さ５cmから10cmある。ピット群はこのⅡ層の下



第48図　Ｃ地点調査区設定図（1／1000）



第49図

部からⅢ層一部地山のⅣ層まで掘り込んでいた。Ⅲ層は褐色粘質でＣ０区で20cm程あり、北側にいくほどその厚みは薄くなり、Ｃ４区の南側では畦畔の石垣の裏込めで壊されている状況である。このⅢ層の上面はカチカチに固まっていた。Ⅱ・Ⅲ層が中世以前の遺物包含層である。Ⅳ層は濁黄褐色粘質土層で、地山である。遺跡の全体にわたって確認した土層でもある。第三紀層の上に堆積している玄武岩の風化した土層である。

掘立柱建物跡（第50図）

Ｃ地点においてもＢ地点と同じようにＣ０からＣ４区の南側にかけて柱穴群が検出されている。総数47個があった。調査区が限定された地区であったため建物の復元までには至っていない。Ｃ３区の最も北側にある柱穴からは、土師器の皿が２枚重なった状態で出土している。同じくその東側の柱穴からは染付碗が１点出土している。西側のＣ３とＣ４区にまたがる柱穴は長さ約40cm、幅約30cm、厚さ約15cmの礎石と思われる石が確認された。ただし礎石らしき石が配置されているのはこの１カ所のみであり、調査範囲外のため確認できなかった。調査範囲外の西側部分にはまだ柱穴群の存在があると思われる。これについては将来の発掘調査に期待したいところである。

Ｃ地点の柱穴は約20cmから約30cmの径をもつ柱穴がほとんどで、その中に長軸約1.9m、短軸約0.82m、深さ0.33mの楕円形状を呈する土壙を１基検出した。Ｃ２区の中央で検出し、内部からは炭化物が出土している。^{14}Ｃの測定結果によると暦年代はAD1020年～1295年の年代結果が出ている。

Ｃ地点の遺物（第51図・第52図）

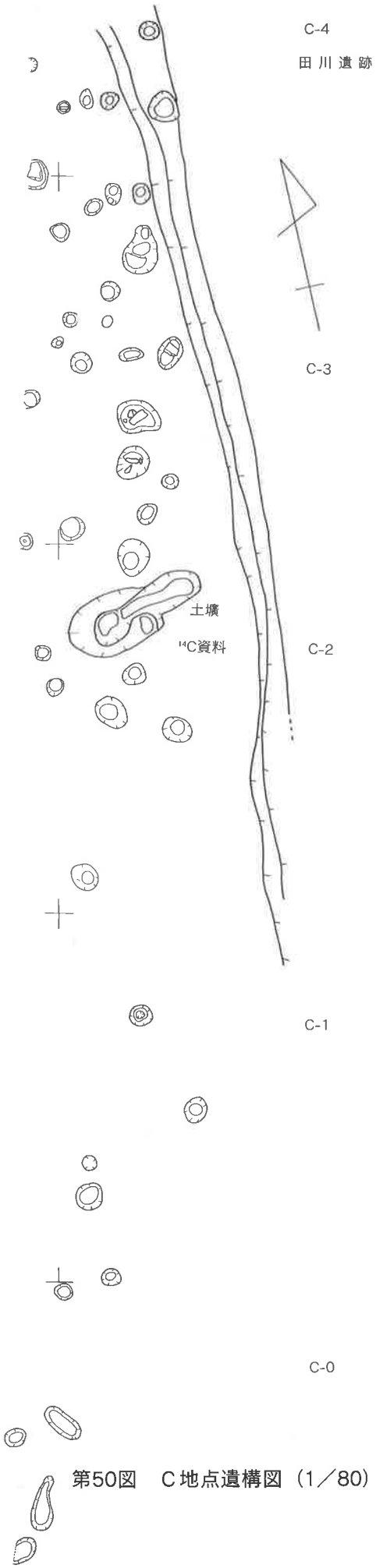
Ｃ地点からは390点の遺物が出土している。その中の256点は石器であった。そのほとんどが黒曜石製の剝片及び砕片であった。土器では134点のうち83点が近世からの陶磁器であった。出土した遺物で実測したのは19点である。

石器（第51図）

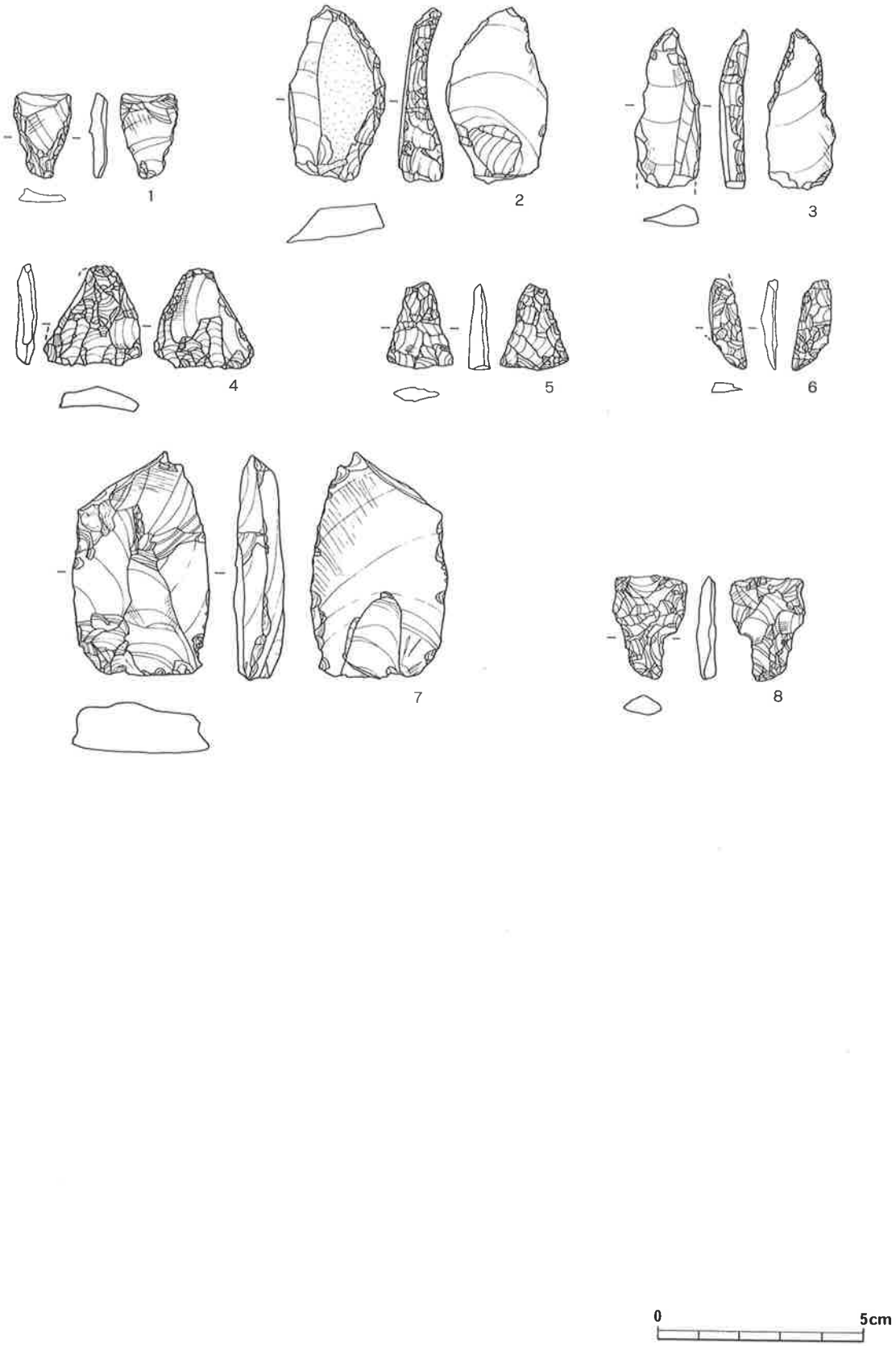
１～８が石器である。１～３はナイフ形石器で、１の刃部から先端部にかけては欠損ではなく、故意に切断し、打点を残している。正面に使用痕がある。２は厚い剝片を素材とし、断面が台形状を呈している。右側縁の調整は、裏面より丹念なブランティング加工を行っている。３は基部を欠損しており、刃部にも使用痕が認められる。４はサイドブレイドである。表面には丹念な剝離加工を施している。５・６は石鏃である。２点とも密な加工をし、６は基部が円形に形成されている。脚先端は鋭利になっている。５は下部欠損後に再利用されている。７は、加工痕のある大型の縦長剝片である。端部に調整加工をし、両側縁には使用痕がみられる。８は異形石器である。全面に丹念な平坦剝離加工がみられ、全側縁を鋭く作り出している。右側縁に抉入加工を施す。一見形状から台形石器に似ているようである。石器はすべて黒曜石製である。

土器（第52図）

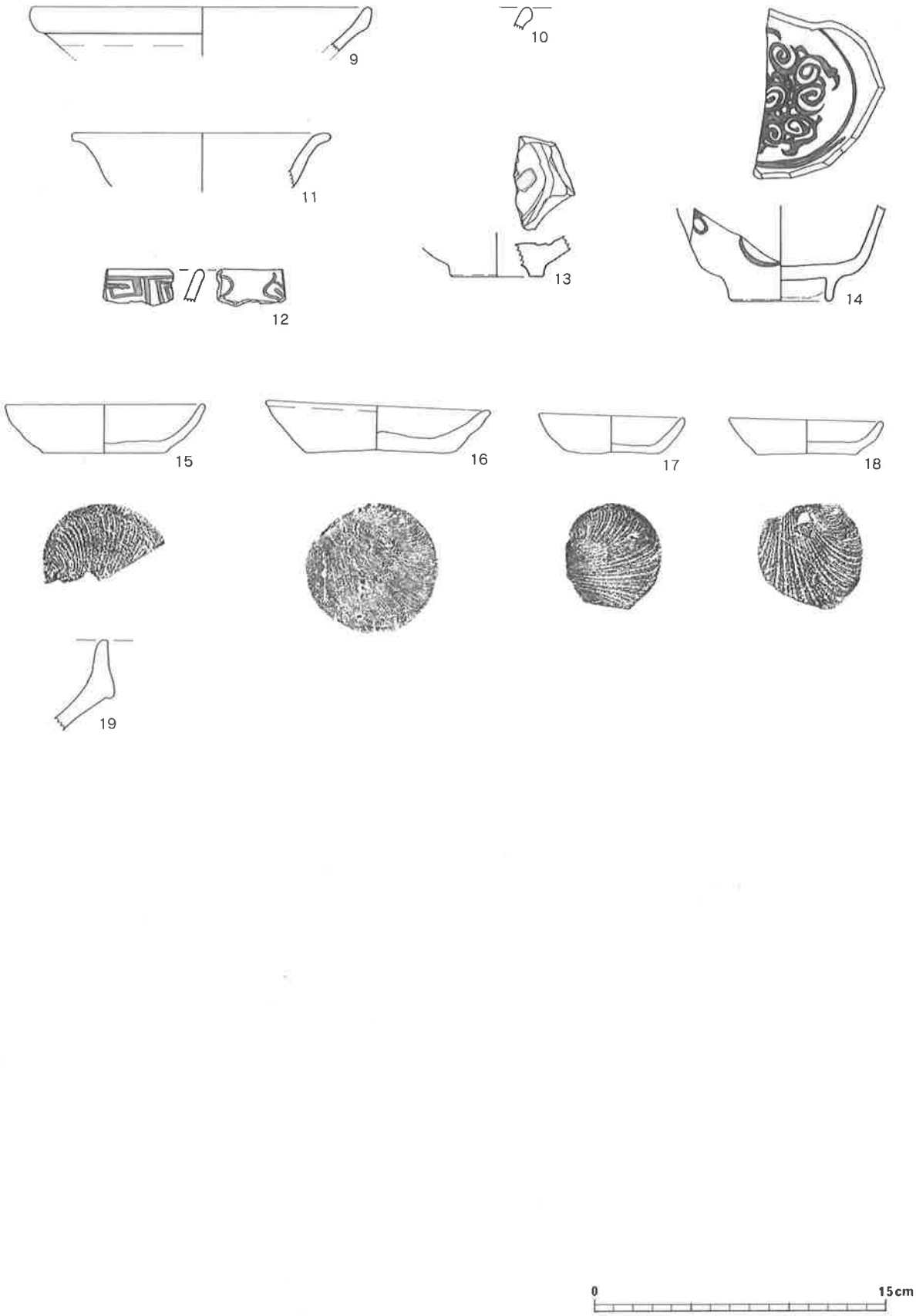
９は輸入陶磁器の白磁の碗である。口縁部には大きな玉縁を有し、体部の器肉も厚い。釉は淡い灰白色で胎土に黒粒を含んでいる。貫入が顕著である。耕作土出土。復元口径17.2cmを計る。10～12は龍泉窯系青磁の破片である。10は口縁端部が丸くやや肥厚になっている。釉は緑灰色で、胎土は灰色である。11は口縁部が外反しており、釉は青みを帯びた緑色が均等にかけられている。胎土は灰色を呈している。使用によると思われる傷が内面に顕著である。復元口径12.8cmを計る。坏であろうか。12は器壁が立上り口径の狭まる碗形で、全体に厚く施釉し、外面口縁部に雷文帯を巡らし、内面体部にも肩切彫による草花文が描かれている。14世紀後半の資料である。Ｃ３区柱穴内出土。13は朝鮮産の雑釉陶器で、内面



第50図　Ｃ地点遺構図（1／80）



第51図　C地点出土遺物１（2／3）



第52図　C地点出土遺物２（1／3）

見込に粗い砂目跡が１個残っている。14は明の染付碗で、高台が内傾し、釉は高台内にも施釉され、高台畳付の釉も掻き取っている。15～18は土師器の小皿で、いずれも糸切り底である。柱穴内出土で、15・17・18は同じ柱穴より出土している。15は器形のほぼ1／3の残存で、口径10.2cm、底径6.1cm、器高2.5cmを計る。16は器形のほぼ4／5の残存で、器壁が厚く、底部中央がやや厚みを帯びている。口径10.7cm、底径7.4cm、器高2.5cmを計る。17・18は完形品で、Ｃ３区最北側の柱穴内の覆土より２枚が重なった状況で検出されている。17は口径7.6cm、底径5.0cm、器高2.1cmを計る。18は口径7.9cm、底径5.0cm、器高1.9cmを計る。19は内外面灰色を呈する擂鉢で、内面にわずかに２条の擂目が認められる。備前焼であろうか。

4. 古環境研究所

Ⅰ. 田川遺跡における放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

試　　料	種　類	前　処　理・調　整	測定法
B地点I4グリッド	炭	酸―アルカリ―酸洗浄・ベンゼン合成	β線法
C地点C2グリッド	炭	酸―アルカリ―酸洗浄・ベンゼン合成	β線法

2. 測定結果

試　　料	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦　年　代	測定No. beta-
B地点I4グリッド No.10ピット	620±70	-28.6	560±70	交点：AD1410 2σ：AD1290 to 1455 1σ：AD1310 to 1355, AD1385 to 1430	100616
C地点C2グリッド	900±80	-28.5	850±80	交点：AD1215 2σ：AD1020 to 1295 1σ：AD1055 to 1090, AD1150 to 1270	100617

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と歴年代補正曲線との交点の歴年代値を意味する。1σ（確率68％）および2σ（確率95％）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数のσ値が表記される場合もある。

Ⅱ．田川遺跡から出土した木材の樹種同定

1．試料

試料は、Ⅰ5P-20から出土した木材（柱材）１点である。

2．方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は、これらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3．結果

結果を下記に示し、同定根拠となった特徴を記す。また、各断面の顕微鏡写真を示す。

試　　料	樹　　種（和　名／学　名）
木材（柱材、Ⅰ5P-20）	イスノキ　*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.

イスノキ　Distylium racemosum Sieb. et Zucc.　マンサク科

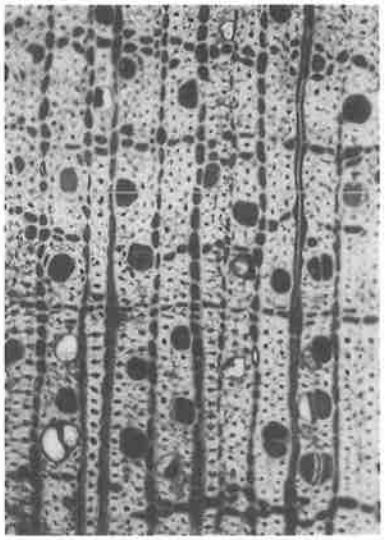
横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが１～２細胞幅であるが、まれに３細胞幅のものも存在する。

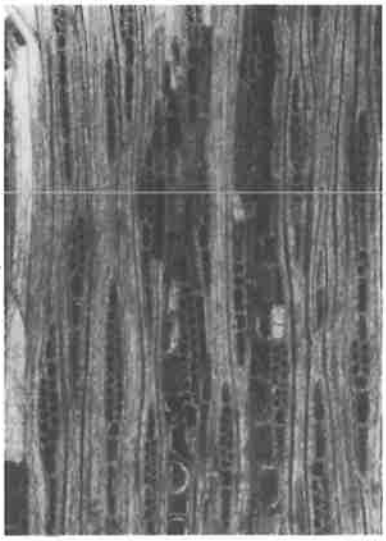
以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径１mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、現在では建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

田川遺跡出土木材の顕微鏡写真



横断面 ……0.2mm

放射断面 ……0.2mm



接線断面 ……0.2mm

木材（柱材）：イスノキ

4．所　　見

同定されたイスノキは、西南日本の照葉樹林に普通に生育する樹木である。遺跡から出土する木製品としては、横櫛に用いられることは多いが、柱材としての用材は珍しい。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣出版，296p.

表３　Ａ地点石器観察表

挿図番号	地区	器種	石質	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
8-1	Ａ４－９	ナイフ形石器	黒色ob	3.60	1.50	0.50	2.25	
8-2	Ａ４－２	〃	〃	4.15	1.20	0.60	1.95	
8-3	Ａ７－Ⅱ	〃	〃	3.60	1.10	0.55	2.00	
8-4	Ｂ０－Ⅲ	〃	〃	3.35	1.20	0.55	1.65	
8-5	Ｃ４－Ⅱ'	〃	〃	3.30	1.10	0.40	1.28	
8-6	Ｄ６－Ⅱ'	〃	〃	3.45	1.00	0.50	1.05	
8-7	Ａ４－７	〃	〃	3.50	2.80	0.85	0.65	
8-8	Ｂ２－Ⅱ'	〃	〃	3.10	1.00	0.45	0.95	
8-9	Ｃ２·３－Ⅱ	〃	〃	2.80	1.20	0.40	1.10	
8-10	Ｄ６－Ⅱ'	〃	〃	2.80	1.15	0.45	0.90	
8-11	Ｂ５－７	〃	〃	5.30	2.00	1.05	8.65	
8-12	Ａ７－Ⅲ	〃	〃	4.10	2.20	0.85	7.20	
8-13	水Ａ－Ⅱ	〃	〃	1.90	1.50	0.55	1.50	
8-14	水Ｆ－Ⅳ	〃	〃	4.35	2.50	0.75	7.55	
8-15	水Ｃ－Ⅲ	〃	〃	4.45	2.05	0.85	6.50	
8-16	水Ｄ－Ⅳ	〃	〃	3.30	1.65	0.65	2.90	
8-17	水Ｃ－Ⅵ	〃	〃	3.65	1.85	1.00	4.55	
8-18	Ｃ３－Ⅱ'	〃	〃	2.30	1.40	0.40	0.95	
8-19	水Ｆ－Ⅵ	〃	〃	3.15	1.15	0.40	1.00	
9-20	Ｂ６－Ⅱ	〃	〃	2.80	1.00	0.50	0.90	
9-21	Ａ１－Ⅱ	〃	〃	1.40	0.90	0.50	0.70	
9-22	ＢＣ３－Ⅲ	台形石器	〃	2.00	3.15	1.10	7.60	
9-23	水Ａ－２	〃	〃	4.20	2.70	1.10	8.45	
9-24	Ｂ１－24	〃	〃	2.95	1.65	1.20	3.00	
9-25	水Ｄ－Ⅳ	〃	〃	2.10	1.50	0.40	5.55	
9-26	Ｃ４－Ⅱ'	〃	〃	2.90	1.55	0.75	1.90	
9-27	Ｃ６－Ⅰ'	〃	〃	3.00	1.70	0.80	2.70	
9-28	Ｂ１－Ⅱ	〃	〃	2.45	1.40	0.80	1.80	
9-29	Ｂ４－Ⅱ	〃	〃	2.15	1.30	0.70	1.45	
9-30	Ｂ５－11	細石核	灰青色ob	4.90	3.85	1.65	24.0	
10-1	Ａ４－４	石鏃	黒色ob	1.95	1.30	0.25	0.80	
10-2	水ＡⅡ	〃	灰青色ob	2.10	1.75	0.70	2.00	
10-3	Ｄ６－Ⅱ	〃	黒色ob	1.80	1.30	0.35	0.80	
10-4	水ＢⅡ	〃	〃	1.90	1.70	0.40	1.40	
10-5	Ｄ４－Ⅱ	〃	〃	2.05	1.85	0.35	1.20	
10-6	Ｃ７－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.75	0.30	0.80	
10-7	Ａ１－Ⅱ'	〃	〃	1.80	2.15	0.65	1.60	
10-8	Ａ４－28	〃	〃	1.75	2.30	0.35	1.40	
10-9	Ｂ１－Ⅱ	〃	〃	1.50	2.35	0.40	1.59	
10-10	Ｂ７－Ⅱ'	〃	〃	2.45	2.50	0.35	2.30	

挿図番号	地区	器種	石質	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
10-11	Ｂ４－Ⅱ	石鏃	黒色ob	1.25	1.50	0.20	1.50	
10-12	Ａ３－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.50	0.30	0.60	
10-13	Ｂ３－Ⅱ	〃	〃	1.95	1.55	0.30	0.60	
10-14	２－12－10	〃	灰色ob	2.55	1.40	0.25	0.70	表採
10-15	水ＣⅥ	〃	黒色ob	2.20	1.70	0.45	1.30	
10-16	Ｂ２－Ⅱ'	〃	〃	1.65	1.60	0.30	0.80	
10-17	Ａ２－Ⅱ	〃	〃	2.10	1.75	0.25	1.00	
10-18	Ａ４－Ⅶ	〃	〃	2.10	1.85	0.30	0.90	
10-19	Ｂ４－Ⅱ	〃	〃	1.70	1.35	0.20	0.40	
10-20	Ｂ４－Ⅱ	〃	〃	2.50	1.95	0.25	0.85	
10-21	Ａ１－Ⅱ	〃	〃	1.65	2.05	0.25	0.95	
10-22	Ｃ６－Ⅰ'	〃	灰青色ob	2.50	1.50	0.40	1.20	
10-23	Ａ10－Ⅲ	〃	黒色ob	1.90	1.60	0.45	1.40	
10-24	水ＣⅥ	〃	〃	1.75	1.25	0.35	0.75	
10-25	水ＢⅡ	〃	〃	2.05	1.40	0.60	1.40	
10-26	水ＣⅥ	〃	〃	2.10	1.25	0.40	0.60	
10-27	水ＥⅢ	〃	灰青色ob	1.50	1.55	0.35	0.80	
10-28	Ｂ５－Ⅱ	〃	黒色ob	2.25	1.45	0.30	0.80	
10-29	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	2.15	1.80	0.40	1.35	
10-30	Ａ３－Ⅱ	〃	〃	2.80	1.75	0.45	1.40	
10-31	水ＣⅥ	〃	〃	2.80	2.00	0.65	2.20	
11-32	水Ｃ－Ⅲ	〃	〃	1.35	1.70	0.35	0.40	
11-33	水ＡⅡ	〃	〃	1.65	1.75	0.40	1.00	
11-34	Ａ５－３	〃	〃	2.10	1.80	0.40	1.00	
11-35	Ｂ２－Ⅱ'	〃	灰青色ob	2.60	1.35	0.30	0.80	
11-36	Ａ２－Ⅱ	〃	黒色ob	2.25	2.45	0.35	1.40	
11-37	Ａ５－１	〃	〃	2.65	2.15	0.55	2.00	
11-38	Ｂ３－Ⅱ'	〃	〃	1.75	1.40	0.35	0.60	
11-39	Ｂ３－Ⅱ	〃	〃	1.95	1.55	0.30	0.60	
11-40	Ｂ３－１	〃	〃	2.50	1.85	0.30	1.20	
11-41	Ｂ４－Ⅱ	〃	〃	3.35	1.65	0.45	1.40	
11-42	水ＣⅥ	〃	〃	2.80	2.30	0.60	3.40	
11-43	Ａ１－26	〃	〃	3.55	2.40	0.70	4.80	
11-44	Ａ６－Ⅲ	〃	〃	3.15	2.00	0.50	2.60	
11-45	水ＣⅥ	〃	〃	1.60	1.60	0.35	0.75	
11-46	２－12－１	〃	〃	2.50	1.65	0.30	1.05	表採
11-47	水ＢⅢ	〃	〃	1.20	1.45	0.45	0.45	
11-48	Ａ３－Ⅱ	〃	〃	2.05	1.70	0.45	1.00	
11-49	水ＣⅢ	尖頭器	安山岩	1.75	2.15	0.85	4.00	
11-50	水ＣⅥ	〃	〃	2.85	1.65	0.90	3.90	

表４　Ｂ地点石器観察表(1)

挿図番号	地　区	器種	石質	法量 長(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚(cm)	法量 重(g)	備考
23-1	Ｄ１－石	石鏃	黒色ob	1.30	1.35	0.30	0.40	
23-2	Ｂ２－Ⅳ	〃	〃	2.30	1.80	0.50	1.10	
23-3	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	2.15	2.30	0.50	1.65	未製品
23-4	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	1.55	1.60	0.45	1.00	
23-5	ｂ２－Ⅲ	〃	〃	2.00	1.75	0.75	1.75	
23-6	Ｃ１－Ⅲ	〃	〃	2.30	1.95	0.50	1.90	
23-7	Ａ１－Ⅱ’	〃	〃	2.15	1.55	0.55	1.45	
23-8	Ｋ３－Ⅲ	〃	〃	1.45	1.05	0.25	0.30	
23-9	排　土	〃	〃	1.55	1.25	0.40	0.55	先端部
23-10	Ｆ２－Ｈ	〃	〃	1.55	1.30	0.55	0.65	脚　部
23-11	ＢＯ－Ⅱ	〃	〃	1.60	1.65	0.35	0.50	
23-12	ＨＩ３－Ⅱ	〃	〃	1.05	2.05	0.30	0.45	
23-13	Ｆ２－Ⅳ	〃	〃	2.00	1.90	0.45	1.15	
23-14	Ｉ７－Ⅱ	〃	〃	1.60	1.60	0.55	1.00	
23-15	Ｇ１－Ⅱ	〃	〃	1.20	1.95	0.40	0.75	
23-16	Ｄ１－Ⅲ	〃	〃	1.25	2.00	0.40	0.85	
23-17	Ｊ２－Ⅳ	〃	灰色ob	0.85	1.15	0.30	0.45	
23-18	Ｊ11－Ⅱ*	〃	黒色ob	1.25	1.30	0.45	0.55	
23-19	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	1.05	1.50	0.25	0.40	
23-20	Ｅ１－Ⅳ	〃	〃	1.55	1.40	0.30	0.65	
23-21	Ｄ１－石	〃	〃	1.65	1.20	0.25	0.35	
23-22	Ｉ１－Ⅲ	〃	〃	1.80	1.15	0.35	0.45	
23-23	ＢＣ１－Ⅱ	〃	〃	1.50	1.40	0.50	0.65	
23-24	Ａ３･４－Ⅲ’	〃	〃	1.65	1.50	0.25	0.45	
23-25	Ａ１－Ⅱ’	〃	〃	1.70	1.60	0.45	1.05	
23-26	ＣＯ－Ⅰ	〃	〃	2.10	1.45	0.35	0.75	
23-27	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	2.45	1.55	0.30	0.75	
23-28	Ｄ２－Ⅳ’	〃	〃	1.85	1.75	0.50	1.35	
23-29	Ｋ３－Ⅰ’	〃	〃	1.50	2.85	0.55	3.05	
23-30	Ｆ１－Ⅳ	〃	〃	1.10	1.35	0.25	0.25	先端部
23-31	Ｃ１－Ⅳ	〃	〃	1.20	1.50	0.40	0.45	
23-32	Ａ３･４－Ⅱ	〃	〃	1.15	1.10	0.40	0.50	
23-33	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.20	1.15	0.40	0.55	
23-34	Ｇ２－Ⅳ	〃	〃	1.50	2.15	0.45	1.15	
23-35	Ｂ１－Ⅳ’	〃	〃	1.50	0.90	0.30	0.35	
23-36	Ｄ１－Ⅳ	〃	〃	1.60	0.90	0.40	0.70	
24-37	Ａ１･２－Ⅳ	〃	〃	2.10	1.75	0.30	1.10	未製品
24-38	Ｆ１－Ｈ	〃	〃	1.20	0.90	0.50	1.30	表土
24-39	ＡＯ－Ｈ	〃	〃	2.45	1.80	0.50	2.00	表土、未製品
24-40	Ａ１－Ⅱ’	〃	〃	1.40	1.80	0.55	0.65	
24-41	Ａ３･４－Ｈ	石鏃	黒色ob	1.75	1.50	0.45	1.15	表土
24-42	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	2.15	1.60	0.35	0.90	
24-43	Ｂ１－Ⅱ	〃	〃	1.50	1.60	0.30	0.70	サイドブレイド？
24-44	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	1.20	1.40	0.35	0.60	
24-45	ＢＯ･１－Ｈ	〃	〃	1.90	1.55	0.45	1.15	表土
24-46	Ｆ１－Ⅳ	〃	〃	1.20	1.70	0.30	0.90	
24-47	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	2.25	1.90	0.50	1.35	
24-48	ＢＯ－Ⅱ	〃	〃	2.50	1.60	0.50	2.20	
24-49	ＢＯ－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.50	0.45	1.55	
24-50	Ａ２－Ⅱ’	〃	〃	2.20	1.50	0.50	1.50	鋸歯
24-51	Ｊ10－Ⅱ	〃	〃	3.00	1.40	0.70	2.60	
24-52	Ｂ２－Ｈ	〃	〃	2.60	1.75	0.65	2.20	表土
24-53	Ｇ１－Ⅳ’	〃	〃	3.05	1.45	0.50	1.75	
24-54	Ｈ１－Ⅲ*	〃	〃	2.35	2.00	0.45	1.75	
24-55	ＢＯ－Ⅱ	〃	〃	1.65	1.25	0.45	0.65	
24-56	ＢＯ－Ⅱ	〃	〃	1.40	1.35	0.60	1.05	
24-57	Ａ２－Ⅱ*	〃	〃	1.20	1.55	0.45	0.80	
24-58	Ａ３･４－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.45	0.35	0.70	
24-59	Ａ３･４－Ⅱ	〃	〃	1.95	1.60	0.40	1.10	
24-60	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	2.10	1.45	0.35	0.90	
24-61	Ｆ２－Ｈ	〃	〃	2.05	1.80	0.25	0.75	表土
24-62	Ａ２－Ⅱ’	〃	〃	1.25	1.45	0.30	0.55	
24-63	Ａ１－Ⅱ’	〃	〃	1.95	1.15	0.50	0.90	
24-64	Ｉ３－Ⅱ	〃	〃	2.00	1.30	0.35	0.75	
24-65	Ｇ２－Ｈ	〃	〃	1.60	1.40	0.30	0.65	鋸歯、表土
24-66	Ｈ４－Ⅱ	〃	〃	1.25	1.40	0.30	0.65	
24-67	Ｄ２－Ⅱ’	〃	〃	2.20	1.55	0.25	0.55	鋸歯
24-68	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.60	1.45	0.40	0.80	
24-69	Ａ２－Ⅲ	〃	〃	1.70	1.35	0.50	1.10	
24-70	Ｄ１－Ⅱ	〃	〃	1.90	1.45	0.40	1.15	
24-71	ＡＯ･１－Ⅱ	〃	〃	1.50	1.50	0.30	0.65	
24-72	ｂ２－Ⅱ	〃	〃	2.30	2.50	0.50	1.30	
25-73	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	2.35	1.55	0.45	1.40	未製品
25-74	Ｆ２－Ⅱ	〃	〃	2.70	1.60	0.35	1.60	
25-75	ＡＯ･１－Ⅲ	〃	〃	3.35	1.60	0.50	2.20	未製品
25-76	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	1.50	1.75	0.30	0.65	
25-77	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	2.05	1.65	0.55	1.65	
25-78	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	1.30	1.90	0.50	1.05	サイドブレイド？
25-79	Ｈ３－Ⅲ	〃	〃	2.20	1.60	0.40	1.05	
25-80	Ｅ１－Ⅳ	〃	〃	2.65	1.90	0.55	2.50	

表５　Ｂ地点石器観察表(2)

挿図番号	地　区	器種	石質	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
25-81	Ｄ２－Ⅱ	石鏃	黒色ob	2.90	2.35	0.65	3.90	大形
25-82	ｂ２－Ⅲ	〃	〃	2.45	1.8	0.30	0.85	
25-83	Ｃ１－Ⅳ	〃	〃	2.15	1.70	0.30	0.90	
25-84	Ａ６－Ｈ	〃	〃	2.40	1.35	0.30	0.65	表土
25-85	Ｇ２－Ⅳ'	〃	〃	2.65	1.70	0.35	1.35	
25-86	Ｊ２－Ｈ	〃	〃	2.55	1.45	0.35	1.20	五角形、表土
25-87	Ａ２－Ⅱ	〃	〃	2.05	1.55	0.40	1.05	
25-88	Ａ３・４－Ⅲ'	〃	〃	2.00	1.50	0.35	0.95	
25-89	Ａ２－Ⅱ'	〃	〃	2.15	1.50	0.45	0.85	
25-90	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	2.15	1.45	0.35	1.20	
25-91	ｂ１－石	〃	〃	1.95	1.55	0.35	1.15	
25-92	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	2.15	1.55	0.35	1.15	
25-93	Ａ３・４－Ｈ	〃	〃	2.65	1.70	0.40	1.70	表土
25-94	Ｂ１－Ⅱ	〃	〃	2.75	1.80	0.30	1.15	
25-95	Ａ２－Ⅱ	〃	〃	2.80	1.50	0.60	1.60	
25-96	Ｆ１・２－Ⅳ	〃	〃	2.70	1.60	0.35	1.35	
25-97	Ｉ５－Ⅱ	〃	〃	2.00	1.70	0.30	0.65	
25-98	Ａ１－Ⅳ	〃	灰青色ob	3.00	1.85	0.55	2.05	
25-99	Ａ３・４－Ｈ	〃	黒色ob	2.30	.165	0.60	1.30	表土
25-100	ＢＯ・１－Ⅱ	〃	〃	2.30	1.65	0.40	1.40	
25-101	Ｉ２－Ⅱ	〃	〃	2.20	1.60	0.40	1.20	
25-102	Ｉ３－Ⅱ	〃	〃	2.10	1.30	0.40	0.55	
25-103	Ｅ１－Ⅱ	〃	〃	2.10	1.30	0.35	1.00	
25-104	Ｄ１・２－Ⅲ	〃	〃	2.40	1.70	0.30	0.95	
26-105	Ｊ３－列	〃	〃	2.65	1.55	0.30	0.90	
26-106	Ｂ１－Ⅲ'	〃	〃	2.80	1.55	0.40	1.60	
26-107	Ｈ３－Ⅱ	〃	〃	1.65	1.20	0.25	0.30	
26-108	Ｂ２－Ⅲ	〃	〃	1.40	.140	0.35	0.45	
26-109	Ｅ１－Ⅱ	〃	〃	1.30	1.35	0.40	0.50	
26-110	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	1.70	1.40	0.35	0.45	
26-111	Ｃ１－Ⅱ	〃	〃	1.85	1.35	0.35	0.45	
26-112	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	2.20	1.55	0.35	0.95	
26-113	Ｄ１－Ⅳ	〃	〃	1.35	1.65	0.45	0.60	鋸歯
26-114	Ｈ１・３－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.75	0.45	1.05	
26-115	Ｏ	〃	〃	1.65	1.40	0.25	0.45	表採
26-116	Ｅ２－Ⅳ'	〃	〃	1.90	1.65	0.50	1.10	
26-117	ＣＤ２－石	〃	〃	1.90	1.40	0.30	0.75	
26-118	Ｉ４－Ⅱ	〃	〃	2.00	1.50	0.40	0.85	
26-119	Ｉ10－Ⅲ	〃	〃	1.40	1.40	0.45	0.55	
26-120	ＡＯ－Ⅲ	〃	〃	2.10	1.50	0.35	0.85	
26-121	ＣＯ－Ⅳ	石鏃	黒色ob	1.65	1.45	0.45	0.85	
26-122	Ｏ	〃	〃	1.40	1.45	0.40	0.50	表採
26-123	Ｏ	〃	〃	1.90	1.50	0.45	1.00	表採
26-124	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	2.10	1.60	0.35	0.85	
26-125	Ｈ４－Ⅱ	〃	〃	1.90	1.30	0.45	0.55	
26-126	Ｆ２－Ⅱ	〃	〃	1.65	1.65	0.40	0.90	鋸歯
26-127	Ｊ11－Ⅰ'	〃	〃	2.40	1.65	0.35	0.75	鋸歯
26-128	Ｇ１－Ⅳ'	〃	〃	1.85	1.85	0.35	1.05	鋸歯
26-129	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.85	1.05	0.35	0.65	
26-130	ＢＯ	〃	〃	2.40	1.50	0.45	0.95	表採
26-131	ＡＢ２－Ⅳ	〃	〃	2.30	1.65	0.55	1.25	
26-132	Ａ２－Ⅲ	〃	〃	1.95	1.70	0.40	0.90	
26-133	Ｈ２－Ｈ	〃	〃	1.60	0.75	0.40	0.35	表土
26-134	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	2.35	1.00	0.50	0.85	
26-135	ＡＯ－Ⅲ	〃	〃	2.10	1.05	0.40	0.65	
26-136	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.95	1.05	0.35	0.65	
26-137	Ａ６－Ｈ	〃	〃	1.50	1.00	0.35	0.25	鋸歯、表土
26-138	Ｉ２－Ⅲ	〃	〃	2.45	1.40	0.40	0.90	
26-139	ＢＯ－Ⅳ	〃	〃	2.80	1.50	0.45	1.00	
26-140	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.25	1.05	0.30	0.70	
27-141	Ｉ１－Ⅲ	〃	〃	2.50	1.35	0.35	0.65	
27-142	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	2.40	1.35	0.40	1.10	
27-143	Ｉ３－Ⅱ	〃	〃	2.50	1.35	0.30	0.70	
27-144	Ａ１・２－Ⅳ	〃	〃	2.85	1.50	0.35	1.05	鋸歯
27-145	Ｃ２－Ⅳ'	〃	〃	2.70	1.50	0.50	1.15	
27-146	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	2.20	1.70	0.25	0.95	鋸歯
27-147	Ｇ１－Ⅳ	〃	〃	2.00	1.85	0.35	1.15	鋸歯
27-148	ＣＯ－Ⅳ	〃	〃	2.55	1.95	0.60	2.10	鍬形
27-149	Ｉ２－Ｈ	〃	〃	2.70	1.65	0.65	1.85	表土
27-150	Ｏ	〃	〃	3.40	1.70	0.50	1.90	表採
27-151	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	2.90	1.95	0.50	3.15	
27-152	Ａ２－Ⅳ	〃	〃	1.00	0.70	0.25	0.15	先端部
27-153	Ｇ１－Ⅱ	〃	〃	1.25	0.65	0.20	0.15	先端部
27-154	Ａ２－Ⅱ'	〃	〃	1.35	0.85	0.25	0.25	先端部
27-155	Ｄ１・２－Ⅱ	〃	〃	1.20	1.00	0.25	0.25	先端部
27-156	Ｃ２－Ｈ	〃	〃	1.60	1.15	0.30	0.35	先端部、表土
27-157	Ｄ１－Ⅳ'	〃	〃	1.90	0.75	0.30	0.30	鋸歯、先端部
27-158	Ｉ３－Ⅲ	〃	〃	1.35	1.10	0.25	0.30	先端部
27-159	Ｈ１－Ⅲ	〃	〃	1.70	1.05	0.35	0.40	先端部
27-160	Ｅ２－Ⅳ'	〃	〃	2.25	1.60	0.35	11.55	

表６　Ｂ地点石器観察表(3)

挿図番号	地　区	器種	石質	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
27-161	Ｄ２－Ⅱ	石鏃	黒色ob	1.95	1.20	0.30	0.50	先端部
27-162	Ｂ２－Ⅳ	〃	〃	1.80	1.20	0.30	0.65	
27-163	Ｂ１－Ⅱ	〃	〃	2.60	1.35	0.35	1.05	
27-164	Ｇ２－Ⅴ	〃	〃	2.45	1.45	0.45	0.95	
27-165	Ａ０・１－Ｈ	〃	〃	1.40	1.45	0.30	0.65	表土
27-166	Ａ１・２－Ⅳ	〃	〃	1.85	1.65	0.55	1.65	
27-167	Ａ０－Ⅲ	〃	〃	1.75	1.65	0.30	0.75	
27-168	Ｆ２－Ｈ	〃	〃	1.10	0.95	0.30	0.25	表土
27-169	Ｃ２－石	〃	〃	1.15	0.90	0.35	0.40	
27-170	Ｅ２－Ⅳ	〃	〃	0.70	1.30	0.35	0.35	
27-171	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.05	0.95	0.30	0.30	脚部
27-172	Ｃ２－石	〃	〃	0.90	0.95	0.30	0.20	脚部
27-173	Ｂ２－Ⅳ	〃	〃	1.15	1.00	0.30	0.25	脚部
27-174	Ｇ１－Ｈ	〃	〃	1.40	1.30	0.30	0.35	脚部、表土
27-175	Ａ２－Ⅲ	〃	〃	1.95	1.85	0.35	0.55	脚部
28-176	0	〃	〃	0.85	1.40	0.35	0.55	脚部、表採
28-177	Ｂ２－Ⅲ	〃	〃	1.40	1.45	0.45	0.85	脚部
28-178	Ｅ１－Ⅱ	〃	〃	1.55	2.75	0.40	1.00	脚部
28-179	Ｆ１－Ⅱ	〃	〃	1.90	1.90	0.50	1.45	脚部
28-180	Ｄ２－Ⅳ'	〃	〃	2.60	2.00	0.65	2.05	大形
28-181	Ａ２－Ⅱ'	〃	〃	1.70	2.60	0.40	1.35	大形
28-182	Ｇ２－Ⅳ'	〃	〃	3.45	2.20	0.70	4.05	大形
28-183	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	3.30	1.90	0.50	3.00	大形、スクレイパー
28-184	Ｊ10－Ⅱ	〃	〃	3.25	2.40	0.80	4.15	大形
28-185	Ｂ０－Ⅱ	〃	〃	3.85	2.25	0.40	2.80	大形
28-186	Ｅ１－Ⅳ	〃	〃	4.10	2.00	0.35	2.25	大形
28-187	Ｇ２－Ⅳ	〃	〃	4.00	2.85	0.95	6.80	大形
28-188	Ａ１－Ⅱ'	〃	灰青色ob	2.30	1.95	0.40	1.05	
29-1	Ａ１・２－Ⅳ	剝片鏃	黒色ob	1.85	1.35	0.40	0.85	
29-2	Ｂ０－Ⅳ	〃	〃	1.30	1.60	0.25	0.50	
29-3	Ｃ０－Ⅰ	〃	〃	1.85	1.30	0.35	0.45	
29-4	Ａ０－Ⅱ	〃	〃	2.05	1.50	0.40	0.85	
29-5	Ｄ１・２－Ⅳ	〃	〃	1.20	0.95	0.40	0.30	
29-6	Ｇ２－Ⅳ	〃	〃	1.45	1.35	0.25	0.35	
29-7	Ｄ１－Ⅱ	〃	〃	1.25	1.35	0.25	0.30	
29-8	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	1.45	1.45	0.35	0.45	
29-9	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.50	0.50	0.90	
29-10	Ｃ－Ｈ	〃	〃	1.50	1.45	0.50	0.80	表土
29-11	Ｅ２－Ⅳ'	〃	〃	1.55	1.60	0.40	0.60	
29-12	Ｃ０－Ⅳ	〃	〃	1.70	1.65	0.45	0.75	

挿図番号	地　区	器種	石質	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
29-13	Ｄ１－Ⅳ	剝片鏃	黒色ob	1.45	1.90	0.35	0.95	
29-14	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.85	1.90	0.60	1.95	
29-15	Ｃ１－Ｈ	〃	〃	1.05	1.10	0.15	0.10	表土
29-16	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	1.00	1.20	0.20	0.15	
29-17	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.20	1.25	0.20	0.15	
29-18	Ａ１－Ⅱ'	〃	〃	1.60	1.25	0.20	0.25	
29-19	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	2.00	1.45	0.25	0.35	
29-20	Ｃ２－Ⅳ'	〃	〃	1.85	1.45	0.20	0.40	
29-21	Ｈ３－Ⅱ	〃	〃	2.00	1.50	0.25	0.30	
29-22	Ｃ２－石	〃	〃	1.90	0.90	0.25	0.35	
29-23	Ｉ６－Ⅱ	〃	〃	1.90	1.05	0.35	0.35	
29-24	Ａ３・４－Ｈ	〃	〃	1.60	1.45	0.30	0.65	表土
29-25	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	2.00	1.45	0.35	0.80	
29-26	Ｅ１－Ⅱ	〃	〃	1.80	2.00	0.25	0.65	
29-27	Ｃ２－Ⅳ'	〃	〃	1.30	1.20	0.20	0.25	
29-28	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.50	1.20	0.30	0.45	
29-29	Ｄ１・２－Ⅱ	〃	〃	1.50	1.40	0.25	0.40	
29-30	Ｆ１－Ⅳ	〃	〃	1.70	1.20	0.25	0.25	
29-31	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	1.50	1.40	0.25	0.45	
29-32	Ｋ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.60	1.50	0.35	0.60	
29-33	0	〃	〃	1.80	1.60	0.30	0.60	表採
29-34	Ｅ２－Ⅳ	〃	〃	1.95	1.30	0.30	0.50	
29-35	Ｉ３－Ⅲ	〃	〃	2.20	1.30	0.30	0.70	
29-36	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	1.90	1.60	0.25	0.80	
30-37	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	1.95	1.50	0.30	0.45	
30-38	Ｄ１－Ⅲ	〃	〃	1.60	1.60	0.30	0.90	
30-39	Ｄ１－Ⅲ	〃	〃	1.45	1.15	0.20	0.25	
30-40	ＥＦ２－Ⅱ	〃	〃	1.10	1.55	0.25	0.40	
30-41	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	1.50	1.50	0.20	0.25	
30-42	Ａ０－Ⅲ	〃	〃	1.05	1.35	0.20	0.25	
30-43	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	1.85	1.40	0.25	0.45	
30-44	ＡＢ１－Ⅱ	〃	〃	1.35	1.40	0.20	0.35	
30-45	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	1.55	1.10	0.20	0.35	
30-46	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	1.60	1.40	0.20	0.40	
30-47	Ｆ２－石	〃	〃	1.90	1.40	0.35	0.60	
30-48	Ａ２－Ⅲ	〃	〃	1.90	1.40	0.25	0.45	
30-49	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	1.95	1.30	0.20	0.30	
30-50	Ｅ２－Ⅳ'	〃	〃	1.75	1.30	0.30	0.40	
30-51	Ｇ２－Ⅳ	〃	〃	1.75	1.45	0.30	0.45	
30-52	Ｄ１－Ⅲ	〃	〃	2.00	1.70	0.25	0.60	

表７　Ｂ地点石器観察表(4)

挿図番号	地　区	器種	石質	法量 長(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚(cm)	法量 重(g)	備考
30-53	Ｇ１－Ⅱ	剝片鏃	黒色ob	1.25	1.90	0.30	0.45	
30-54	Ｄ１－Ⅲ	〃	〃	1.85	1.85	0.35	1.20	
30-55	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.30	1.30	0.20	0.30	
30-56	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	1.50	1.20	0.25	0.20	
30-57	Ｂ１－Ⅱ	〃	〃	1.70	1.35	0.30	0.20	
30-58	Ｄ１－石	〃	〃	1.70	1.40	0.25	0.40	
30-59	Ｉ３－Ⅳ	〃	〃	1.75	1.80	0.20	0.45	
30-60	Ｉ３－Ⅲ	〃	〃	1.95	1.60	0.20	0.55	
30-61	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	2.10	1.60	0.35	0.70	
30-62	ＪＫ３－Ⅳ	〃	〃	2.70	2.40	0.35	1.55	
30-63	ＤＥ２－Ⅳ	〃	〃	1.50	1.05	0.15	0.25	
30-64	Ｆ１－Ｈ	〃	〃	1.60	1.20	0.30	0.35	表土
30-65	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	1.50	1.75	0.30	0.40	
30-66	Ｊ３－Ⅱ	〃	〃	1.35	2.50	0.70	0.60	
30-67	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	1.80	1.30	0.25	0.45	
30-68	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.35	0.30	0.75	
30-69	Ｃ１－石	〃	〃	2.20	1.60	0.25	0.75	未製品
30-70	Ｈ２－Ⅳ	〃	〃	2.40	1.55	0.75	2.45	未製品
30-71	Ａ１－Ⅱ'	〃	〃	2.55	1.60	0.50	1.10	石錐？
30-72	Ｂ１－Ⅰ	〃	〃	1.40	1.10	0.30	0.35	
31-73	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.55	1.05	0.35	0.30	
31-74	Ｉ２－Ⅳ	〃	〃	1.70	0.95	0.30	0.30	
31-75	ＢＯ－Ⅱ	〃	〃	1.15	1.0	0.30	0.35	
31-76	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	1.10	1.00	0.20	0.25	
31-77	Ａ３・４－Ⅲ	〃	〃	0.75	1.15	0.30	0.20	
31-78	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	1.30	1.25	0.30	0.50	
31-79	Ａ２－Ｈ	〃	〃	1.00	1.20	0.35	0.35	表土
31-80	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.85	1.00	0.30	0.35	
31-81	ＣＯ－Ⅱ	〃	〃	2.20	1.20	0.20	0.25	
31-82	Ｂ１－Ⅳ'	〃	〃	1.60	1.00	0.15	0.20	
31-83	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	2.00	1.10	0.30	0.35	
31-84	Ｆ１－Ⅳ	〃	〃	1.85	1.10	0.30	0.40	
31-85	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	1.55	1.00	0.35	0.30	
31-86	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.65	1.30	0.25	0.35	
31-87	Ｄ１－Ⅳ	〃	〃	1.80	1.40	0.25	0.40	
31-88	Ｄ１－Ⅳ	〃	〃	1.95	1.10	0.20	0.45	
31-89	Ｈ３－Ⅳ	〃	〃	1.90	1.30	0.25	0.60	
31-90	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	2.00	1.30	0.20	0.40	
31-91	ＡＯ－Ｈ	〃	〃	2.10	1.10	0.15	0.45	表土
31-92	Ｄ１－Ⅱ	〃	〃	2.15	1.30	0.30	0.55	
31-93	Ｄ２－Ⅳ'	剝片鏃	黒色ob	2.10	1.25	0.20	0.45	
31-94	Ｅ１－Ⅱ	〃	〃	2.20	1.15	0.25	0.35	
31-95	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	2.05	1.20	0.25	0.45	
31-96	Ａ２－Ⅲ	〃	〃	2.45	1.15	0.40	0.75	
31-97	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	2.30	1.20	0.50	0.65	
31-98	Ｉ３－Ⅲ	〃	〃	1.45	1.70	0.35	0.55	
31-99	Ｈ３－Ⅳ	〃	〃	1.20	1.45	0.35	0.30	
31-100	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.65	1.15	0.30	0.35	
31-101	Ａ２－Ⅳ	〃	〃	2.80	1.30	0.20	0.40	
31-102	Ｉ４－Ⅱ	〃	〃	1.95	1.50	0.20	0.45	
31-103	Ａ３・４－Ｈ	〃	〃	2.10	1.85	0.40	1.00	表土
31-104	Ｆ２－Ｈ	〃	〃	1.50	1.40	0.30	0.60	表土
31-105	Ｈ１－Ｈ	〃	〃	1.55	1.20	0.35	0.35	表土
31-106	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	1.70	1.20	0.20	0.30	
31-107	Ｅ１－Ⅳ	〃	〃	1.65	1.20	0.20	0.20	
31-108	Ｊ11－Ⅰ'	〃	〃	2.05	1.30	0.40	0.50	
32-109	Ｅ１－Ⅳ	〃	〃	1.45	1.30	0.30	0.30	
32-110	ＡＯ－Ⅲ	〃	〃	1.80	1.30	0.25	0.35	
32-111	Ｅ１－Ⅱ	〃	〃	1.95	1.30	0.25	0.50	
32-112	Ｈ３－Ⅳ	〃	〃	1.60	1.40	0.25	0.30	
32-113	Ｅ２－Ⅳ	〃	〃	2.05	1.30	0.30	0.55	
32-114	Ｅ２－Ⅳ	〃	〃	1.00	1.60	0.20	0.30	
32-115	Ｆ２－Ⅳ	〃	〃	2.10	1.10	0.45	0.65	
32-116	Ａ２－Ⅲ	〃	〃	2.20	1.60	0.30	0.50	
32-117	Ｈ３－Ⅳ	〃	〃	2.10	1.60	0.30	0.60	
32-118	Ａ２－Ⅱ'	〃	〃	2.15	1.20	0.30	0.65	
32-119	Ｊ２－Ⅳ	〃	〃	2.20	1.80	0.30	0.55	
32-120	Ｉ７－Ⅱ	〃	〃	2.35	2.00	0.30	7.50	
32-121	Ａ２－Ⅳ	〃	〃	1.20	0.90	0.25	0.25	
32-122	Ｃ２－Ⅳ	〃	〃	1.55	0.90	0.20	0.15	
32-123	Ｂ２－Ⅱ	〃	〃	1.60	1.10	0.20	0.25	
32-124	Ｈ３－Ⅱ	〃	〃	1.80	1.35	0.30	0.30	
32-125	ＤＥ１－Ｈ	〃	〃	2.10	1.40	0.30	0.40	表土
32-126	Ｇ１・２－Ｈ	〃	〃	1.80	1.30	0.40	0.60	石錐？、表土
32-127	Ｃ２－Ｈ	〃	〃	1.80	1.55	0.30	0.65	表土
32-128	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	2.05	1.40	0.25	0.40	
32-129	Ｈ５－Ⅱ	〃	〃	1.80	1.50	0.20	0.35	
32-130	Ｉ３－Ⅲ	〃	〃	2.30	1.40	0.40	0.60	
32-131	Ｃ１－Ⅳ	〃	〃	2.80	1.30	0.30	0.60	
32-132	Ａ１－Ⅳ	〃	〃	1.40	1.20	0.30	0.40	

表８　Ｂ地点石器観察表(5)

挿図番号	地　　区	器　　種	石　　質	法　　量				備　　考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	
32-133	Ａ２－Ⅱ’	剝片鏃	黒色ob	1.80	0.95	0.15	0.15	
32-134	Ｉ４－Ⅱ	〃	〃	1.55	1.10	0.20	0.25	
32-135	ＡＩ・２－Ⅱ	〃	〃	1.15	1.10	0.20	0.25	
32-136	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.90	1.10	0.20	0.35	
32-137	Ｆ２－Ⅳ	〃	〃	1.90	1.10	0.25	0.20	
32-138	Ｊ３－Ⅰ’	〃	〃	1.50	1.25	0.30	0.35	
32-139	Ｄ１－石	〃	〃	1.60	1.20	0.20	0.30	
32-140	Ａ３・４－Ｈ	〃	〃	1.00	1.25	0.20	0.15	表土
32-141	Ｃ２－Ⅳ’	〃	〃	1.55	1.30	0.30	0.45	
32-142	Ｄ１－Ⅲ	〃	〃	1.70	1.20	0.30	0.40	
32-143	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.30	0.35	0.65	
32-144	Ｃ１－Ⅳ	〃	〃	1.60	1.30	0.20	0.40	
33-145	Ｄ２－Ⅳ	〃	〃	2.20	1.35	0.45	0.59	
33-146	Ａ１・２－Ⅱ	〃	〃	2.10	1.45	0.25	0.45	
33-147	Ｄ２－Ｈ	〃	〃	1.95	1.30	0.30	0.35	表土
33-148	ＤＥ１－Ⅳ	〃	〃	1.95	1.65	0.30	0.45	
33-149	ＣＤ２－石	〃	〃	1.25	1.40	0.25	0.25	
33-150	Ｉ３－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.50	0.30	0.60	
33-151	Ｂ２－Ⅳ	〃	〃	2.00	0.80	0.30	0.45	
33-152	Ｈ２－Ⅳ’	〃	〃	1.70	1.45	0.35	0.75	
33-153	Ｉ５－Ⅱ	〃	〃	1.40	1.55	0.60	0.70	
33 154	Ｄ２－Ⅱ	〃	〃	2.15	1.35	0.45	1.00	
33-155	Ａ３・４－Ⅱ	〃	〃	1.40	1.30	0.40	0.55	
33-156	Ａ１－Ⅲ	〃	〃	1.60	1.30	0.20	0.35	
33-157	ＤＥ１－Ｈ	〃	〃	2.30	1.30	0.30	0.80	表土
33-158	Ｊ３－Ⅰ’	〃	〃	2.55	1.50	0.25	0.70	
33-159	Ｅ２－Ⅳ	〃	〃	2.05	1.65	0.60	1.45	
33-160	Ｆ２－Ⅳ	〃	〃	2.50	1.40	0.30	0.70	
33-161	Ｈ３－Ⅱ	〃	〃	1.70	1.60	0.30	0.70	
33-162	ＢＯ・１－Ⅲ	〃	〃	1.30	1.35	0.30	0.45	

表９　Ｃ地点石器観察表

51-1	ＣＯ－Ｈ	ナイフ形石器	黒色ob	2.10	1.40	0.50	1.38	表土
51-2	ＣＯ－Ⅲ	〃	〃	4.30	2.40	1.10	9.65	
51-3	Ｏ	〃	〃	3.90	1.65	0.70	3.40	表採
51-4	Ｈ	サイドブレイド	〃	2.50	2.45	0.50	2.45	表土
51-5	ＣＯ－Ｈ	石鏃	〃	2.10	1.60	0.60	1.30	表土
51-6	Ｈ	石鏃	〃	4.50	2.20	0.45	0.60	表土
51-7	Ｃ１・２－Ⅰ’	使用痕ある剝片	〃	5.50	3.40	1.25	21.25	
51-8	Ｃ１・２－Ⅰ’	石錐	〃	2.55	1.80	0.50	1.98	台形石器？

Ⅳ　考　　察

今回の田川遺跡の報告は、平成６年度と平成７年度に発掘調査を行ったその調査結果である。

本報告では、遺物の出土量が膨大で、また、時間的制約もあって、十分な整理・資料の検討ができないまま中途半端な報告になってしまった。掲載していない遺物も数多くあり、石器の分類においても再検討をしなければならない点が多々あろうかと思う。ここでは、現段階での成果や問題点等について掲げてまとめとしたい。

田川遺跡から出土した遺物は、Ａ地点3,387点・Ｂ地点21,025点・Ｃ地点390点で総数24,802点であった。時代的には旧石器から中世期にかけての複合遺跡であることが確認でき、特に中世期における当地方の生活のあり方について重要な資料を提供している。この点、一つの集落単位での地域研究の重要性が再認識させられた遺跡であった。

１．旧石器時代における田川遺跡について

Ａ・Ｂ・Ｃ地点のいずれの調査区でも旧石器時代の遺物が出土している。特にナイフ形石器・台形石器があり、Ａ地点のみ船底状の形態を呈する細石核が１点出土している。ナイフ形石器は基部裏面の加工を行っているもの、調整加工によって剥片を切り取り、切出形あるいは三角形の小形に整形し、基部裏面の加工がないもの、剥片の一側縁にブランティング加工を施し、素材の形状をあまり変化させていないものがある。主体をなしているものは基部裏面の加工がない小形のナイフ形石器である。台形石器では、素材剥片を横位に用いて、打面・打瘤の除去後に直線状を呈するように背面から打撃を加えて整形し、一側縁に主要剥離面からノッチ状のブランティング加工を施し、平坦剥離を行うことによって剥片の厚みを減じた原の辻型台形石器と、二側縁が湾曲するように加工され、全体がバチ状を呈し、背面・主要剥離面に二次加工をもつ枝去木型台形石器、真正な台形状を呈し、素材時の二側縁がそのまま残り、二次加工は剥片の二側縁に急角度のブランティング加工が行われている日ノ岳型のものがある。また、これらとは若干異なる二側縁が湾曲し、撥状を呈するが、二次加工は主要剥離面からのみ行われているものがある。この形態の台形石器については、近年出土例が増えだしてきており、まだ位置付けが行われていない。他の出土例を待って検討しなければならない問題でもある。類例の増加に期待したい。

九州において出土する台形石器は、加工の段階でブランティング加工によってその型式編年は、日ノ岳型→原の辻型→枝去木型→百花台型への移行として考えられている。特に原の辻型台形石器は日ノ岳型から面的な加工をもつ枝去木型への移行形態として考えられている。田川遺跡においてもこれらの台形石器が出土していることは、多くの地域で石器の組成に変化が認められる後期旧石器時代後半期に位置付けられるのではなかろうか。

2．縄文時代における田川遺跡について

縄文時代においては、Ｂ地点において検討を行いたいと思う。石器では、黒曜石製剥片は4,780点、破片は11,916点、石核は794点、安山岩製剥片は805点、破片は565点、石核は99点、灰青色黒曜石は全部で83点であった。器種としては石鏃・剥片鏃・つまみ形石器・石鋸・サイドブレイド・彫器など西北九州における縄文後期の石器組成の主なものは具備している。

田川遺跡出土の石器を代表するものとして剥片鏃・つまみ形石器があげられる。特に剥片鏃はＡ・Ｃ地点では出土がなかったがＢ地点のみ186点が出土し、うち162点を図示している。正三角形タイプと二等辺三角形タイプに別れる。Ａ３・４Ⅱ層で10点、Ａ１Ⅲ層・Ｄ２Ⅱ層で８点が出土している。遺跡内における剥片鏃の占める割合が高くなっている。剥片鏃を除いた石鏃の数は215点で剥片鏃を若干うわまわっているが、ほかの長崎県内の縄文後期の遺跡に比べると出土数の多さが目を引くようである。有茎鏃・円基鏃・平基無茎鏃・凹基無茎鏃で凹みが浅いもの・凹基無茎鏃で円形を呈するものに別けた。また、剥片鏃製作に関係するもととなる縦長剥片は高い密度で出土しているのがＡ２～Ｅ２区の41－４号支線道路部分にあたっている。

剥片鏃は、西北九州に分布し50箇所をこえる遺跡から出土している。遠くは朝鮮半島からも出土している。橘昌信氏は、柏田遺跡の分析結果から、剥片鏃の中でも特に縦長剥片の先端部をそのまま利用した剥片鏃については、先端部の薄さから他の石鏃に比べて刺突具としては不安定な要素が高いとして、対象物の差を考えられている。また、その使用する場所においても遺跡の立地条件等で河川や後背湿地が考えられるとして、遺跡周辺の立地条件が重要であることを指摘している。横田義章氏は、剥片鏃が他の打製石鏃と共伴することから機能上の違いを指摘している。橘・横田氏ともに剥片鏃の用途についてはほかの打製石鏃との違いを考えている。山崎純男氏は剥片鏃のうち、一側縁に鋸歯を有するものを石鋸と同じような組合せ銛の一部として考えている。

田川遺跡出土の剥片鏃の中には、先端部や器種の薄さなどから、剥片鏃は打製石鏃に比べて左右が対称的でないものもあり、これらについては刺突具あるいは飛道具の先端部としての機能は考えられずほかの目的をもって製作・使用されたものと考えられる。剥片鏃の両面における使用痕の有無、折損部位の検討、打製石鏃との比較などを検討する必要が有り、今後の検討課題としたい。

つまみ形石器は、抉入加工が浅いもの・抉入部より上方が横長の楕円形のもの・抉入より上方が円形のもの・抉入部より上方が縦長のものに分類している。田川遺跡の遺物では抉入部より上方が横長の楕円形のものが多いようである。

石鋸はＢ地点でのみ１点出土している。サイドブレイドはＢ地点４点・Ｃ地点１点の５点であった。これらは組合せ石器として、農耕具としての用途と漁撈具としての用途が考えられていたが、近年の出土例の増加に伴って大形魚類を捕獲するための漁具として考えられている。その中で当遺跡の石器組成をみた場合、海岸遺跡に集中する石銛・石錘の出土がないという石器組成を持ち、漁撈具に関する石器が出土していない点は他の遺跡と様相を異にしている。しかし、現状では漁撈との関係を無視することはできないものと思われる。今後の課題としたい。

松浦市において、石鋸が出土している遺跡は牟田・姫神社・下田・池田の４箇所で、サイドブレイドは姫神社・寺ノ尾・池田・下田・宮ノ下り遺跡で出土している。いずれも海岸部に近い立地条件である。組合せ銛の先端部に着装する鋸歯状尖頭器は小嶋遺跡から出土している。

次に土器であるが、Ｂ地点は石器の多さに比べて縄文土器の出土は非常に少なく、縄文時代の遺物の２％にも満たない状況で、362点のほとんどが破片で、遺物群の主体をなす状況ではなかった。この土器が少ないということは、土器よりも石器に生活における比重がおかれていたということは田川遺跡の特徴ともいえるのではないだろうか。

田中良之氏は阿高式土器の変化を中期中葉に阿高Ⅰ式から阿高Ⅱ式へと変容し、中期後葉には地域的に独自性を生み西九州地域では坂の下Ⅰ式から坂の下Ⅱ式へと変化を考えている。坂の下Ⅰ式は阿高Ⅱ式の文様をモチーフに直線的で粗雑なものへと変化させたもので、坂の下Ⅱ式は肥厚する口縁部に文様が集約されるなど南福寺式に酷似するが、胎土への滑石の混入が顕著であると位置付けている。田川遺跡の土器群は口縁部に文様が集約され、かつ凹点や沈線によるモチーフをもっていることから坂の下Ⅰ式から坂の下Ⅱ式の中で包括されるものと思われる。一方、外来要素の高い磨消縄文土器の出土がないことまた、出土した石器組成等から田川遺跡は縄文中期終末から後期初頭頃の時期に位置付けされるのではなかろうか。

３．弥生時代における田川遺跡について

弥生時代では、中期中葉頃の甕形土器の出土のみで遺構の検出はできなかった。218点が出土しており、Ａ地点で207点であった。Ｂ地点が11点、Ｃ地点からは出土していない。特にＡ地点に集中している。弥生時代を通しての集落を形成するまでには至っていなかったようである。

４．中世における田川遺跡について

田川遺跡の検討をする前に遺構との関連から「御厨」あるいは「松浦党」についての検討をしなければならない。御厨は古代から中世にかけて存在し、朝廷や伊勢神宮などに魚貝・果物などの贄を貢上する土地・地域についている名称である。当時の御厨の範囲を確定することは非常に難しいが、現在の伊万里湾西側地域から五島列島・平戸島などの島々を含む県北地域の一帯であろうと考えられている。また、この地域は松浦党の各武士団の分布とが重なっている。松浦党は一族の名前に一字名をつけて名乗ることを特徴としている。それらの人物はそれぞれ割拠したその土地の名称をもって姓としていることがあげられている。『青方文書』の永徳４年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には当地方の在地の武士の名が記載されている。それには「ミくりや参川守守」、同年の『山代文書』にも「ミくりや三河守守」、「ミくりやのさかもと源宥」というの人物の名前が見え、当地を本拠とする武士である。さらに嘉慶２年（1388）の『青方文書』の一揆契諾状には「御厨三河守守」、「御厨田代近」

の名前が見える。この「御厨田代近」という人物は、田川遺跡の位置する田代地域を本拠地とする武士であろうと思われ、居城としていたところが城ノ越城ではないかと考えられいる。しかし、この城は1.5km程北へ位置している。一方、今回発掘調査を行った田川遺跡の周辺には現在のところ城跡が確認されていない。一方では安倍宗任が築いたと伝わる大岳古墨があるがこれも文献等の史料を欠いており不明な点が多い。田川遺跡の南方には板橋経塚が位置しており、古代から中世において、当地は海岸部から内陸部に至る街道的な役割を成していたところではなかろうか。周辺の歴史的な環境からも理解できるのではないだろうか。城跡については今後周辺の調査で確認されるであろと考えている。その候補地としてＡ地点に隣接する南側の小高い丘陵が考えられる。将来の調査に期待したい。

『青方文書』の一揆契諾状の「御厨田代近」という人物と、今回の発掘調査で確認できた12世紀から15世紀の遺構・遺物の検討を行うと、当然「御厨田代近」という人物との関係を検討しなければならない。御厨氏は盛んに朝鮮との貿易を行っており、『李朝実録』には「太宗恭定大王実録」戊子太宗８年（1408）６月庚辰条に「日本志佐殿・御厨殿、皆遣使献礼物」とあり、以後の『李朝実録』にもに「下松浦三栗野太守源満」「下松浦三河守融」などの人物の名が書かれている。また、『海東諸国紀』にも「下松浦三栗太守源満」の名が記載されていることからも確認ができている。この点から考えると「御厨田代近」という人物も御厨を名乗っていることから御厨氏となんらかの関係がある人物であろうと思われる。輸入陶磁器の出土はこの点を補強することにはならないだろうか。出土した遺物等から検討すると田川遺跡の集落自体の中心が、Ａ地点からＢ・Ｃ地点の広い面積を必要として集落が移ったと考えられる。Ｂ・Ｃ地点では、掘立柱建物跡の存在を示す多くの柱穴群が検出されている。特にＢ地点では柱穴群の北側と南側に自然石を配石した遺構を検出することができた。前述したように遺構の全体像がわからないため、詳細に検討することは難しい。類例としては本市志佐町の楼楷田遺跡で同じような南北に長い石敷道路状遺構とその東西に柱穴群が検出されている。田川遺跡の場合も同じような用途が考えられる。これらの発掘調査で得えられた成果からすれば、「御厨田代近」に関係のある可能性がでてきた。今後の新たなる文献史料の調査及び研究が必要である。

最後になったが、毎回報告書の作成は時間との戦いで終始する。今回の報告書作成においても多くの方々の協力を得ることとなった。特に、短時間での膨大な資料の整理・図化作業に最大限の努力で従事してくれた整理補助員諸氏に心から深謝してその労に報いこの報告の結びとしたい。

参　考　文　献

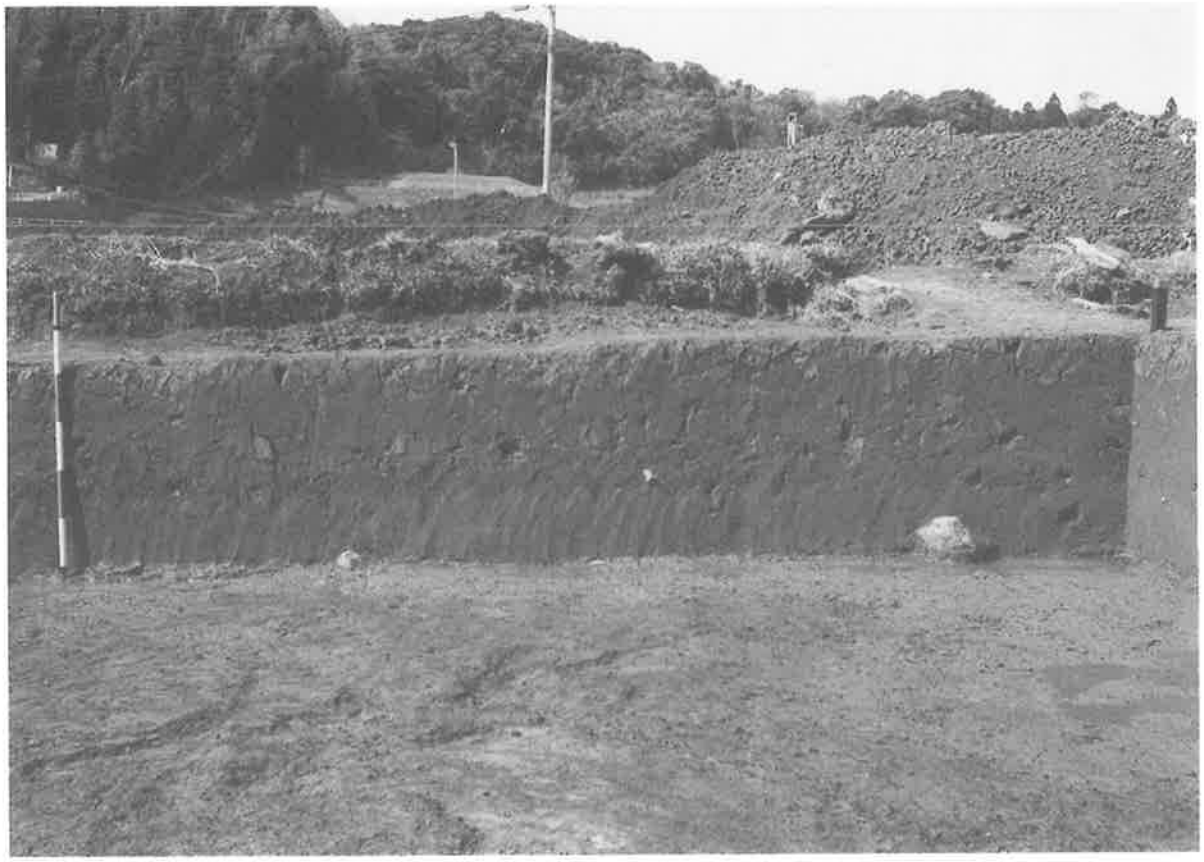
萩原博文　「西南日本における旧石器時代石器群の様相」　『考古学研究109』　1980
萩原博文・下川達彌　「西九州における旧石器時代石器群の編年（上）（下）」『古代文化　35－6、35－9』　1983
松藤和人他　『百花台東遺跡』　同志社大学文学部文化学科　1994
正林　護　『佐賀貝塚』　峰町文化財調査報告書第９集　峰町教育委員会　1989
山崎純男　「西北九州漁撈文化の特性」　季刊考古学第25集　1988
小池史哲　『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』　春日市・柏田遺跡の調査　第４集上巻　1977
横田義章　「《研究ノート》西北九州における縄文時代の一剝片石器群」　『九州歴史資料館研究論集２』　1976
田島龍太　『徳蔵谷遺跡（１）』　唐津市文化財調査報告書第57集　唐津市教育委員会　1994
田島龍太　『徳蔵谷遺跡（２）』　唐津市文化財調査報告書第63集　唐津市教育委員会　1995
田島龍太　『徳蔵谷遺跡（３）』　唐津市文化財調査報告書第68集　唐津市教育委員会　1996
明瀬慎吾　『赤松海岸遺跡』　鎮西町文化財調査報告書第７集　鎮西町教育委員会　1989
田中良之　「中期・阿高式系土器の研究」　『古文化談叢第６集』　1979
萩原博文・久原巻二　「九州西北部の石鋸、サイド・ブレイドについて」　『古代文化　第27巻第４号』　1975
福田一志　『殿崎遺跡』　長崎県文化財調査報告書第83集　長崎県教育委員会　1986
杉原荘介・戸沢充則・横田義章　「九州における特殊な石刃技法」　『考古学雑誌　第51巻第３号』
下川達彌　「剝片鏃考」　『長崎県立美術博物館館報昭和46年度』　1972
横山順・田中良之　「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」　『九州考古学　No.54』　九州考古学会　1979
中田敦之　『田原遺跡』　松浦市文化財調査報告書第10集　松浦市教育委員会　1991
安楽勉・中田敦之他　『楼楷田遺跡』　長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会・松浦市教育委員会　1985
長崎県史編纂委員会　『長崎県史』　古代中世編　1980
外山幹夫　『松浦党のすがた』　松浦市　1990
松浦市史編纂委員会　『松浦市史』　1975

図　　版

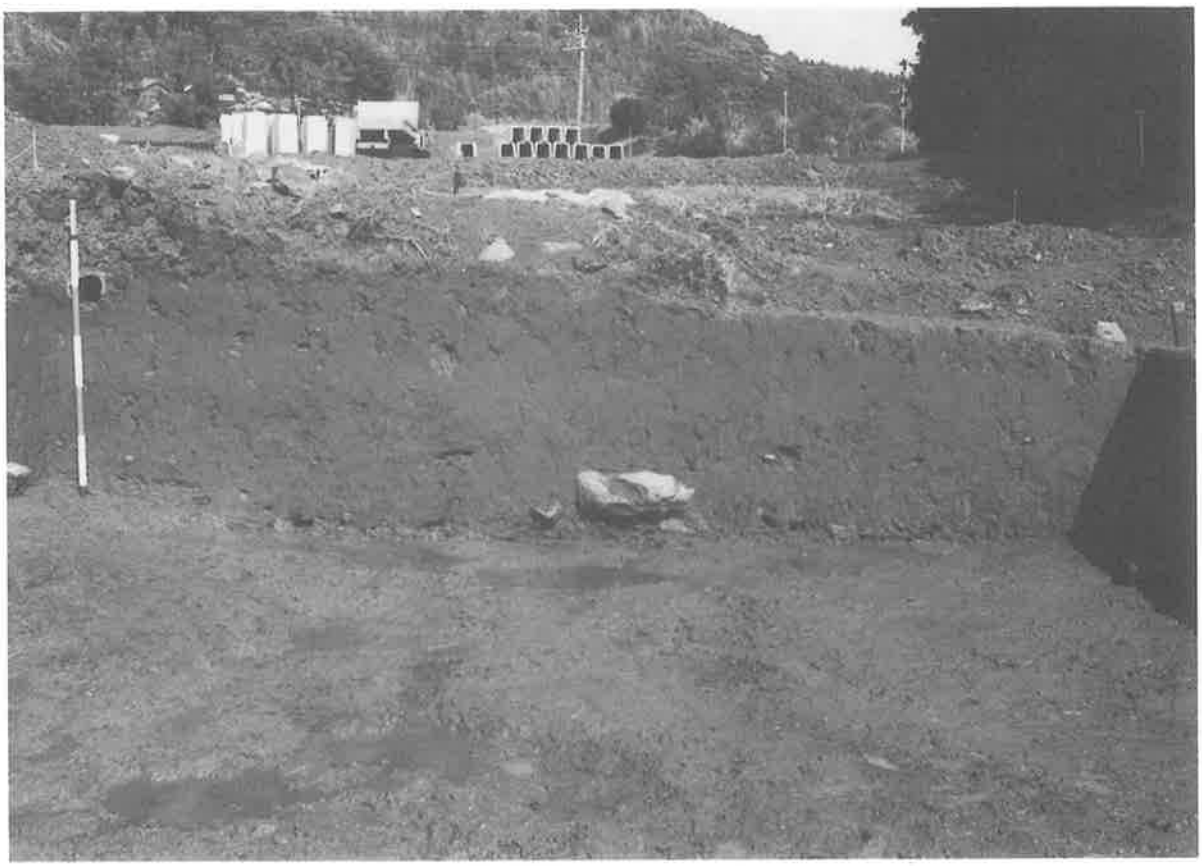
A地点遠景

A地点17号小排水路土層（D－東）

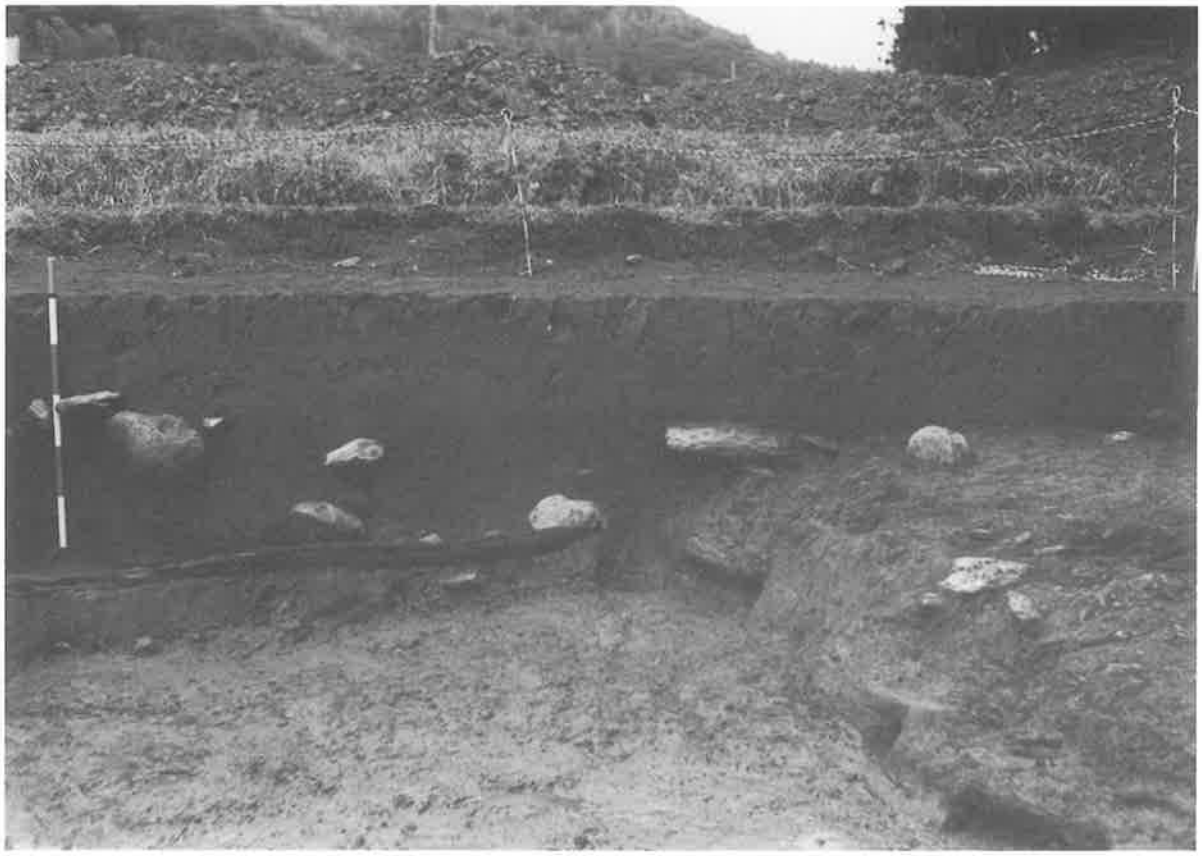
図版２



Ａ地点溜堀土層（Ａ２－北）



Ａ地点溜堀土層（Ａ５－東）



Ａ地点溜堀土層（Ｂ１－東）

Ａ地点溜堀調査風景

図版４

Ｂ地点遠景

Ｂ地点土層（Ａ２－北）

Ｂ地点土層（Ｂ１－東）

Ｂ地点土層（Ｄ１－北）

図版６

Ｂ地点配石遺構南側（西より）

Ｂ地点配石遺構南側（東より）

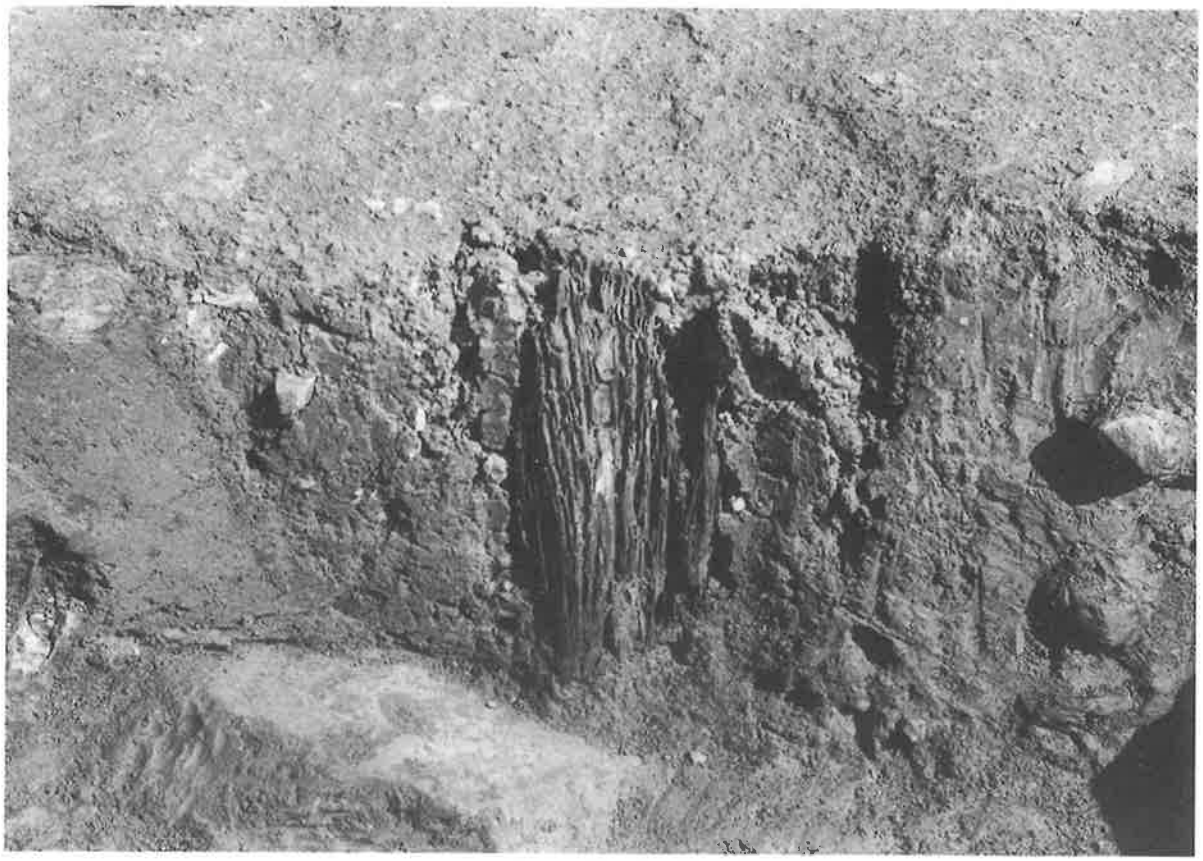
Ｂ地点配石遺構南側（南より）

Ｂ地点配石遺構北側（東より）

図版８

Ｂ地点柱穴群検出状況（東より）

Ｂ地点柱穴群土壙検出状況（東より）

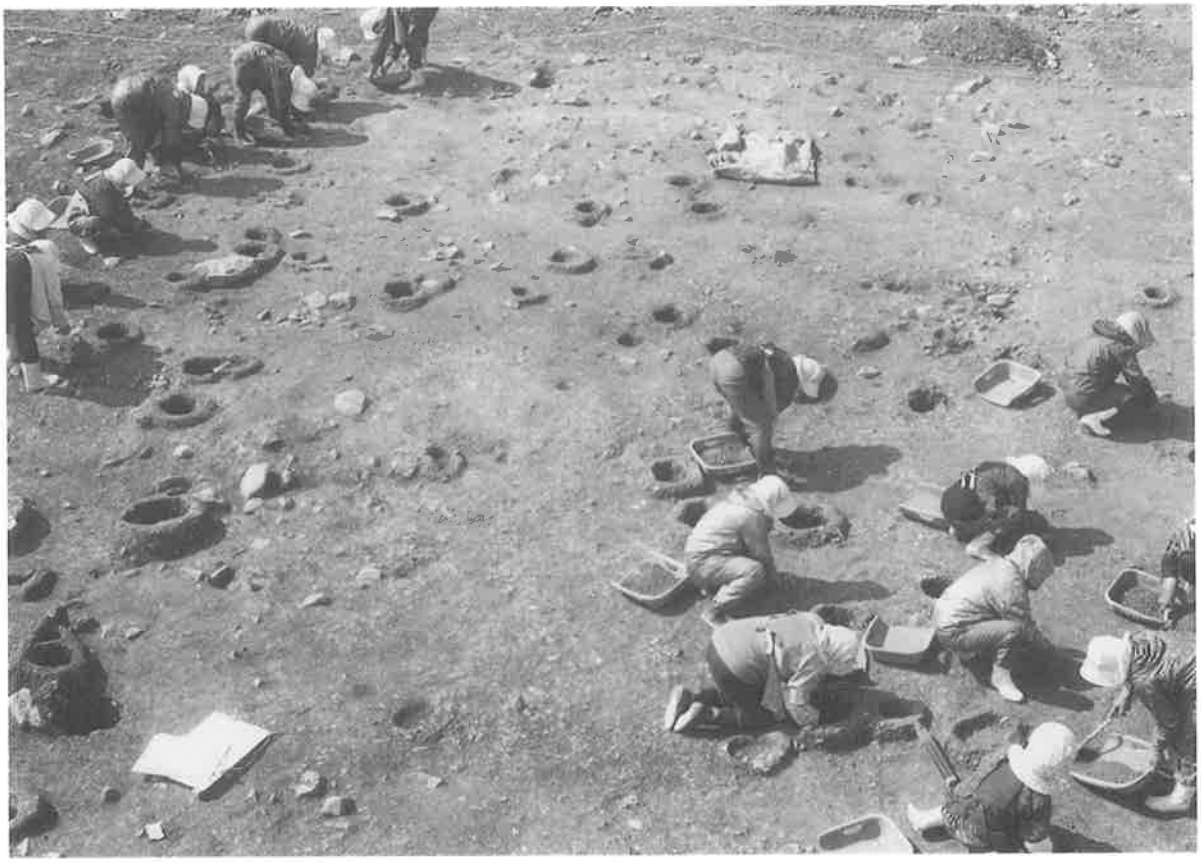


Ｂ地点柱穴半裁状況（南より）

Ｂ地点土壙検出状況（東より）

図版10

B地点遺物出土状況（B１）

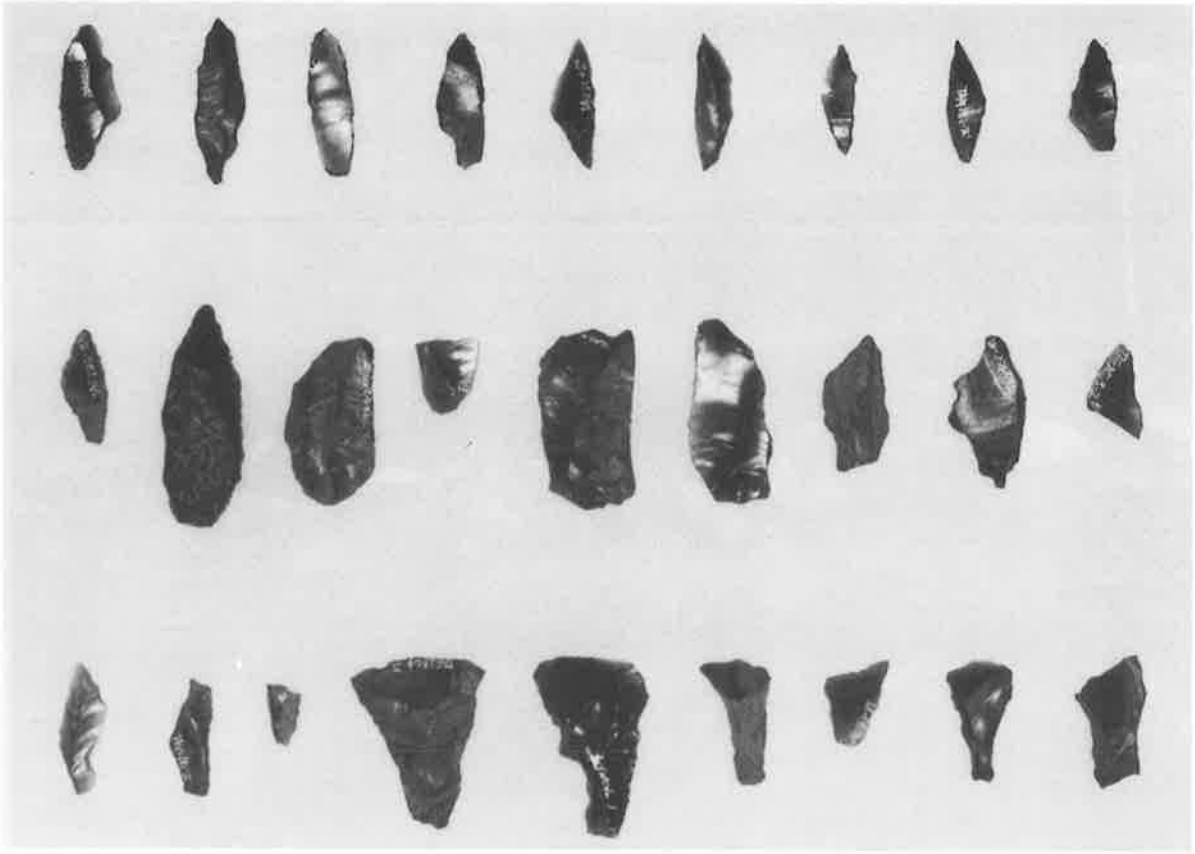


B地点調査風景

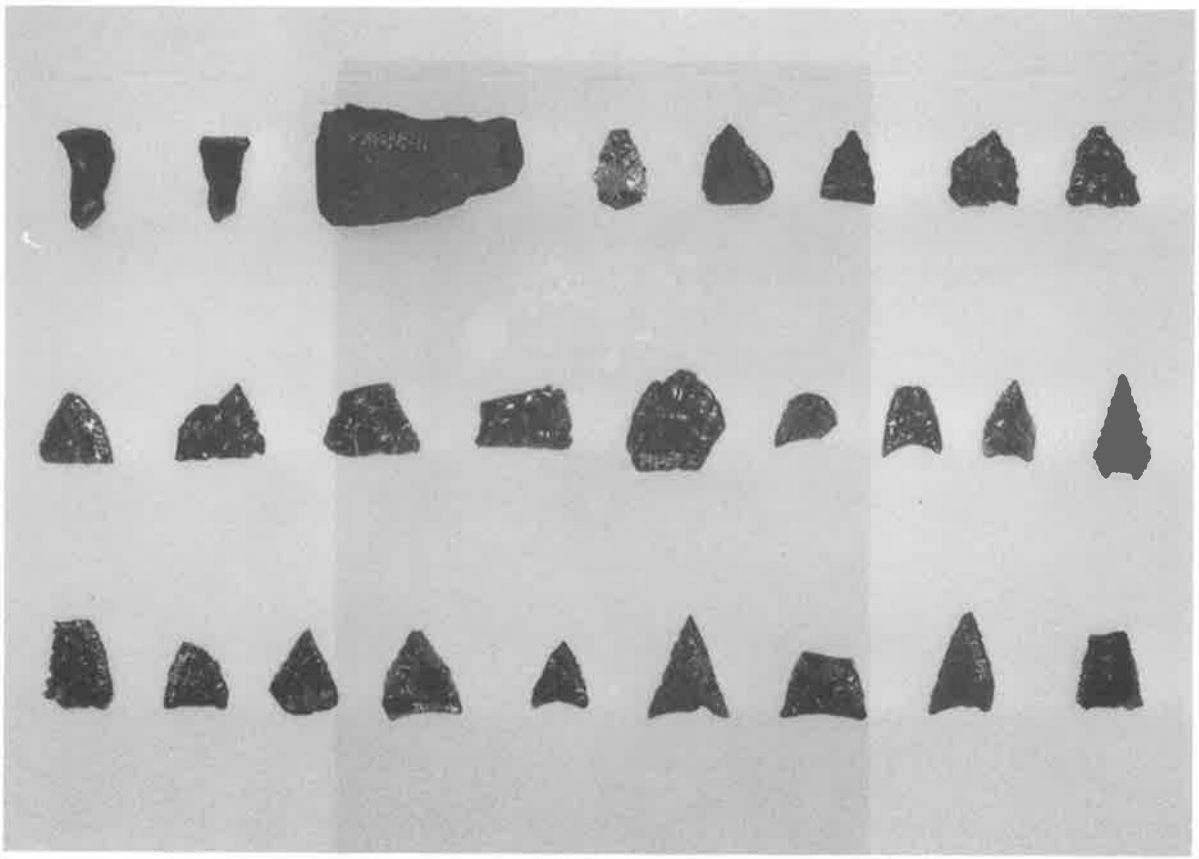
C地点土層（C３－西）

C地点柱穴群検出状況（北より）

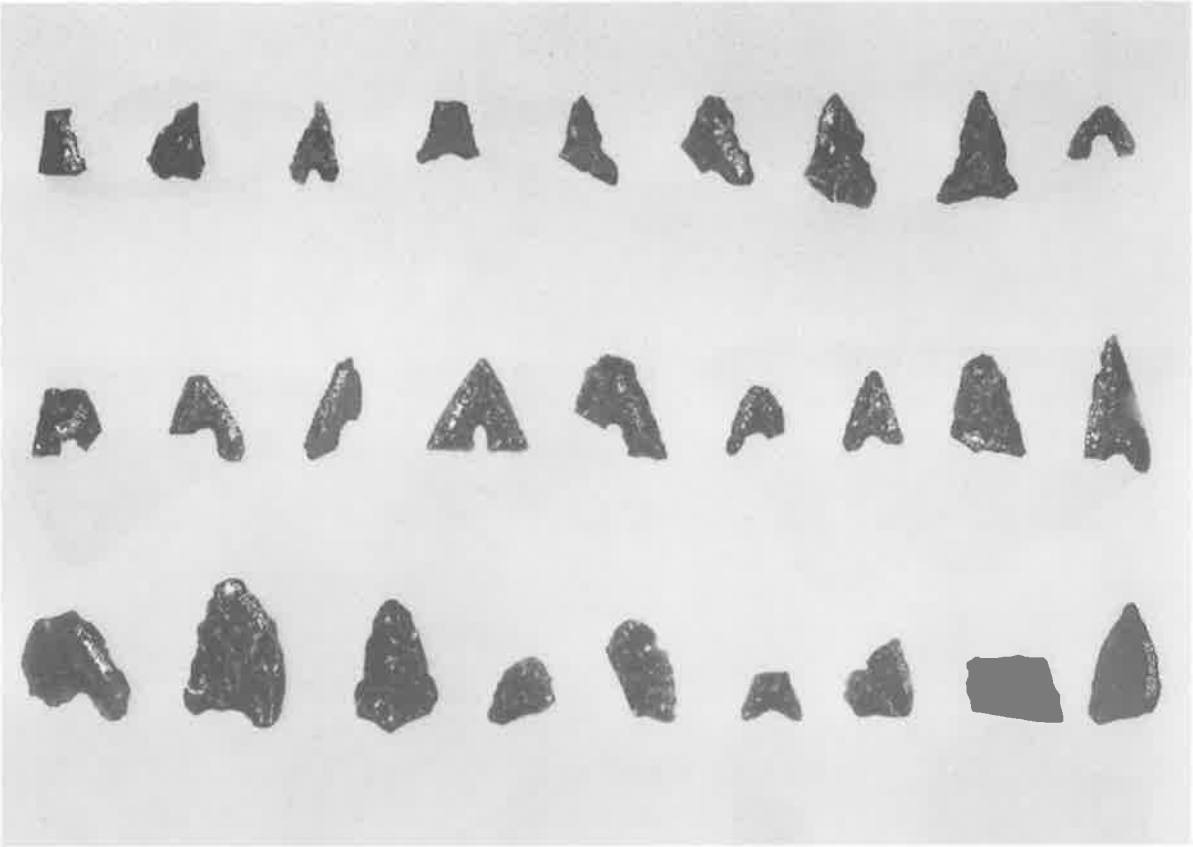
図版12



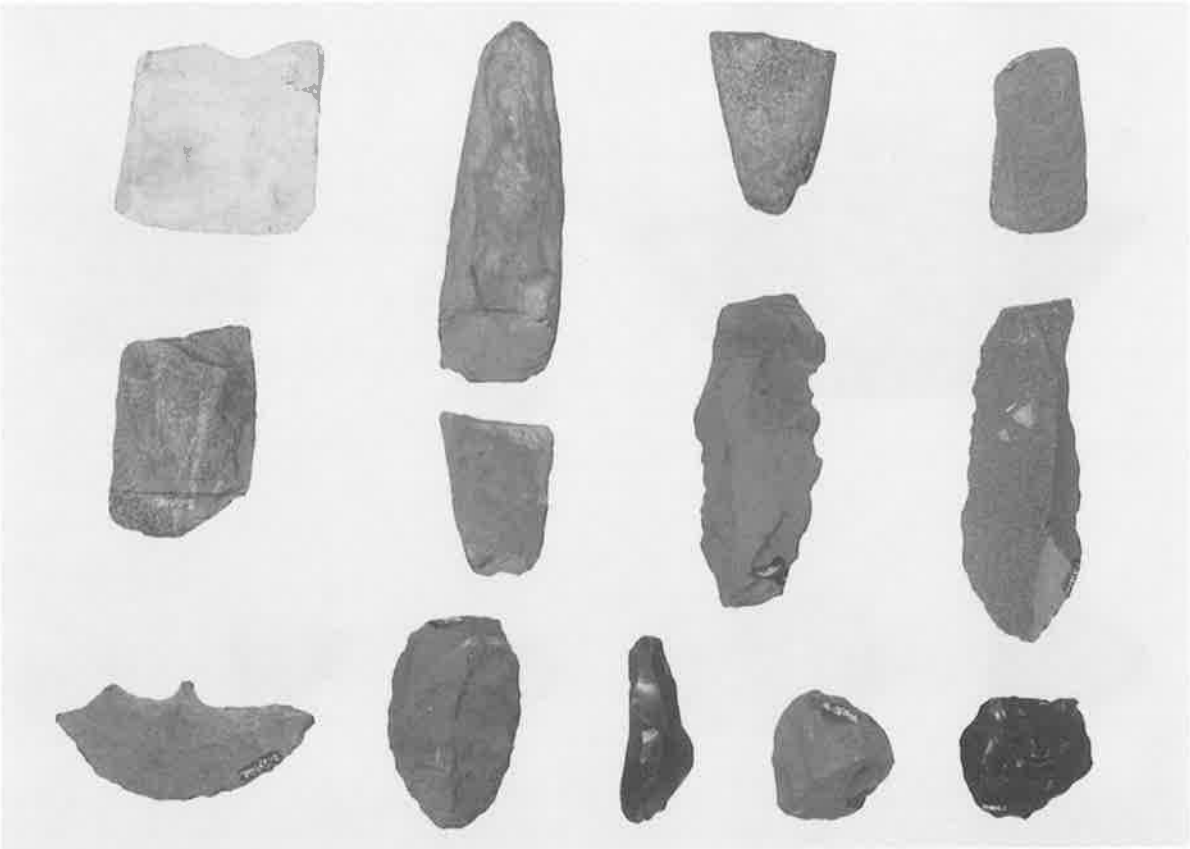
A地点出土遺物1



A地点出土遺物2

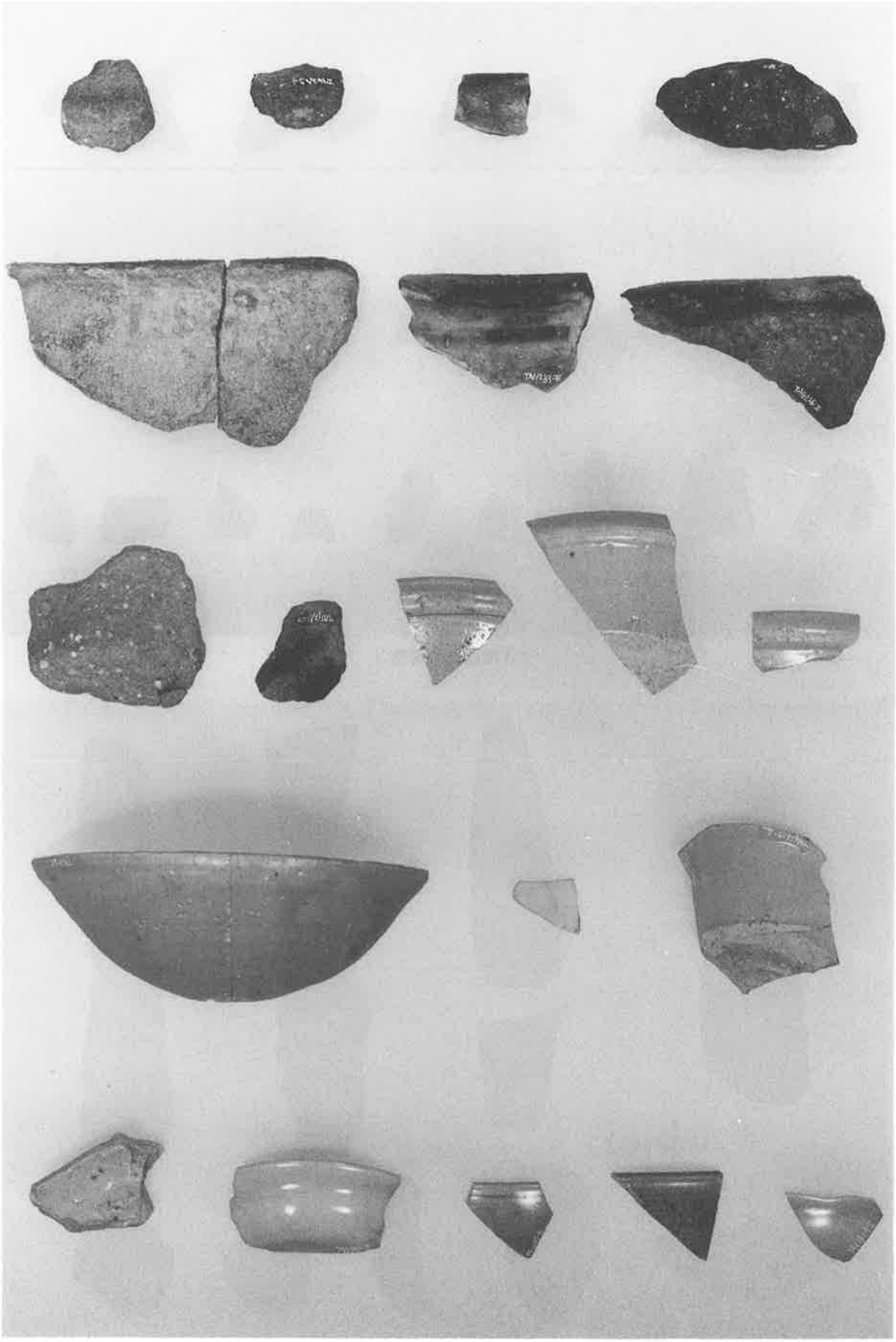


A地点出土遺物3



A地点出土遺物4

図版14

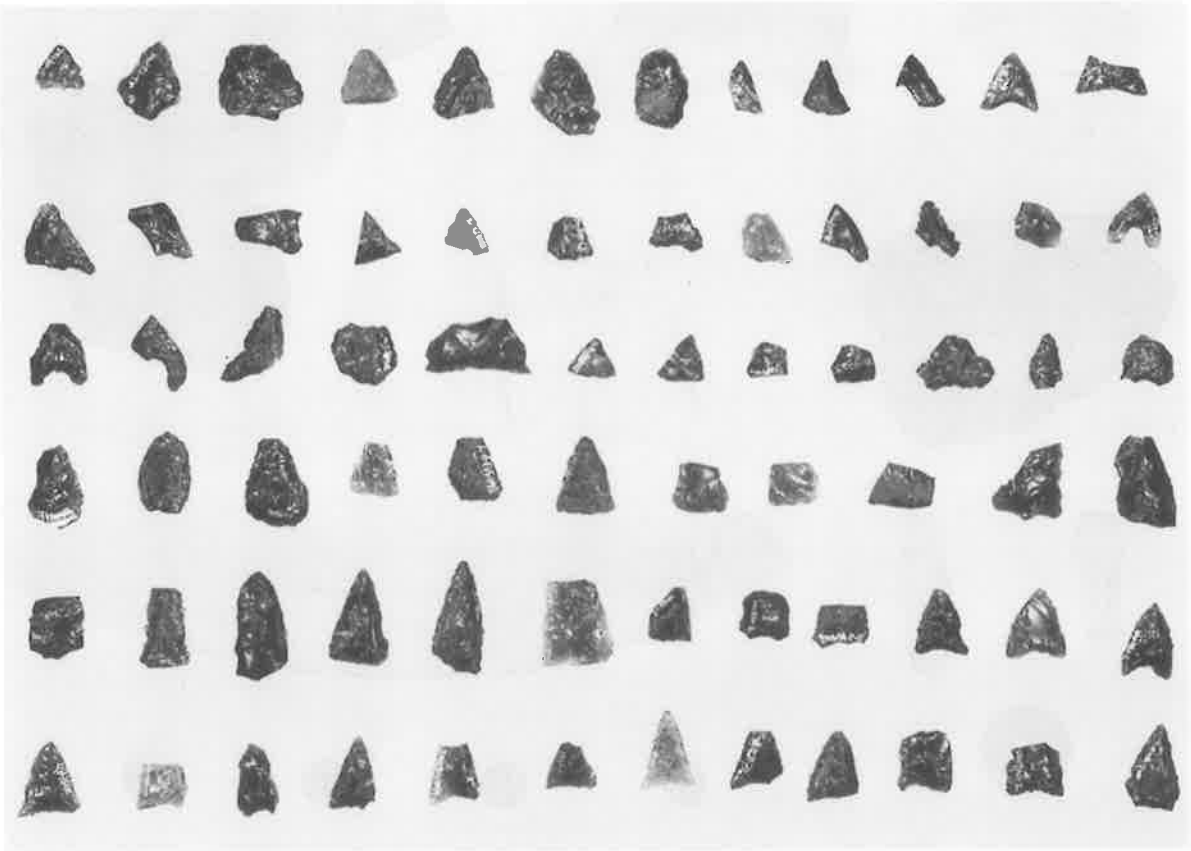


A地点出土遺物5

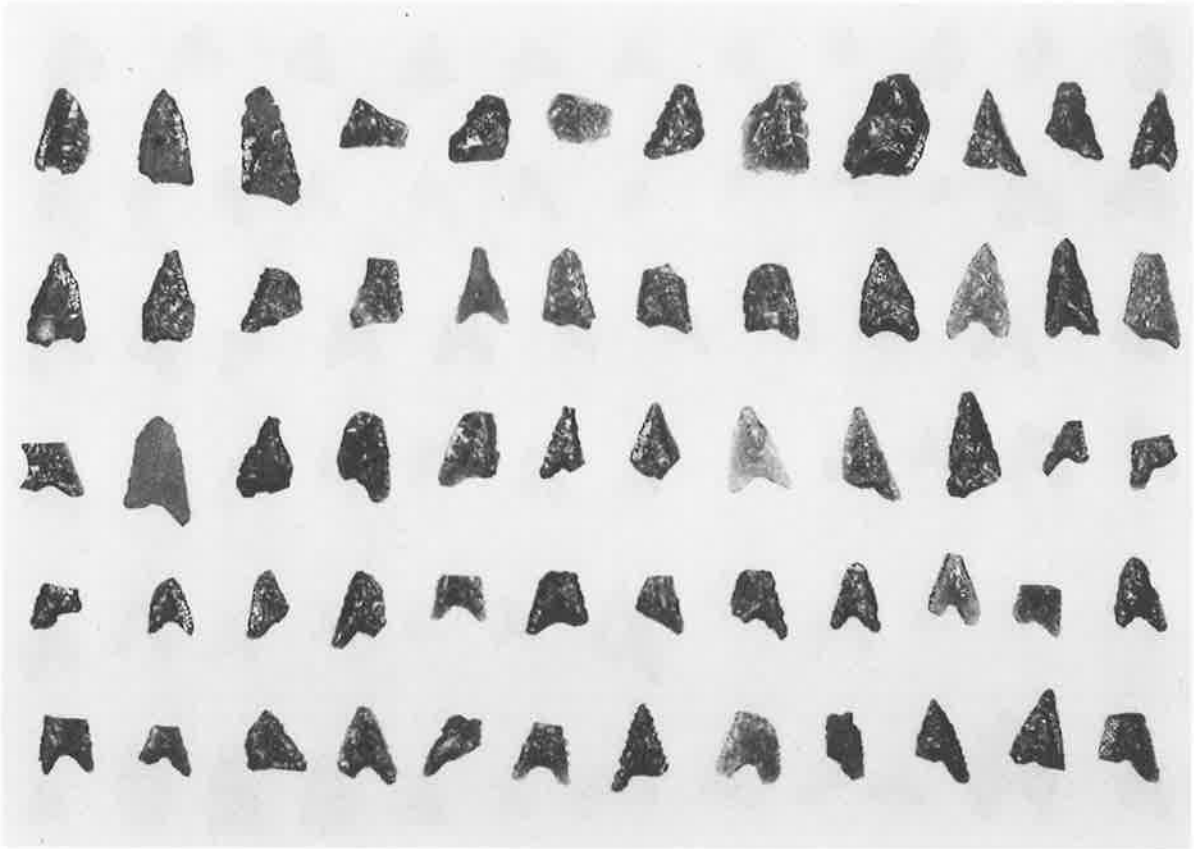
A地点出土遺物6

図版16

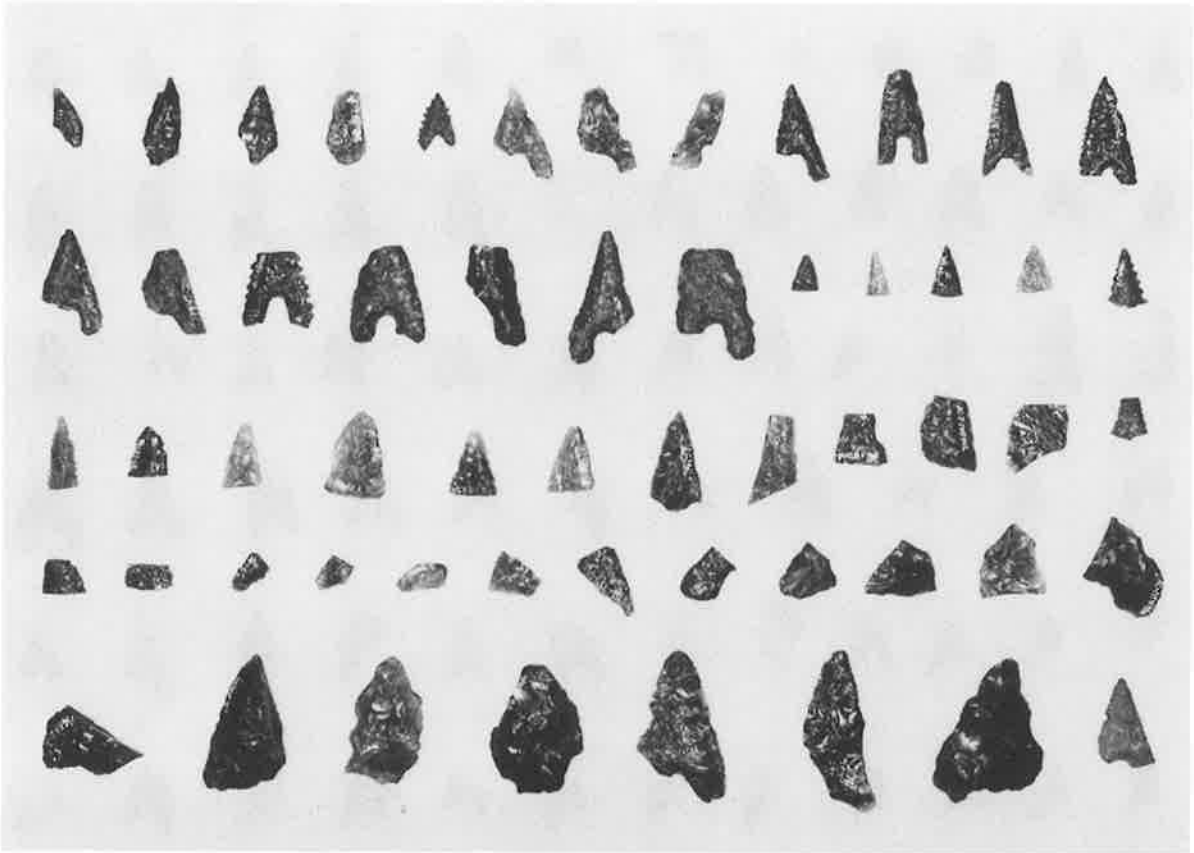
B地点出土遺物1



B地点出土遺物2

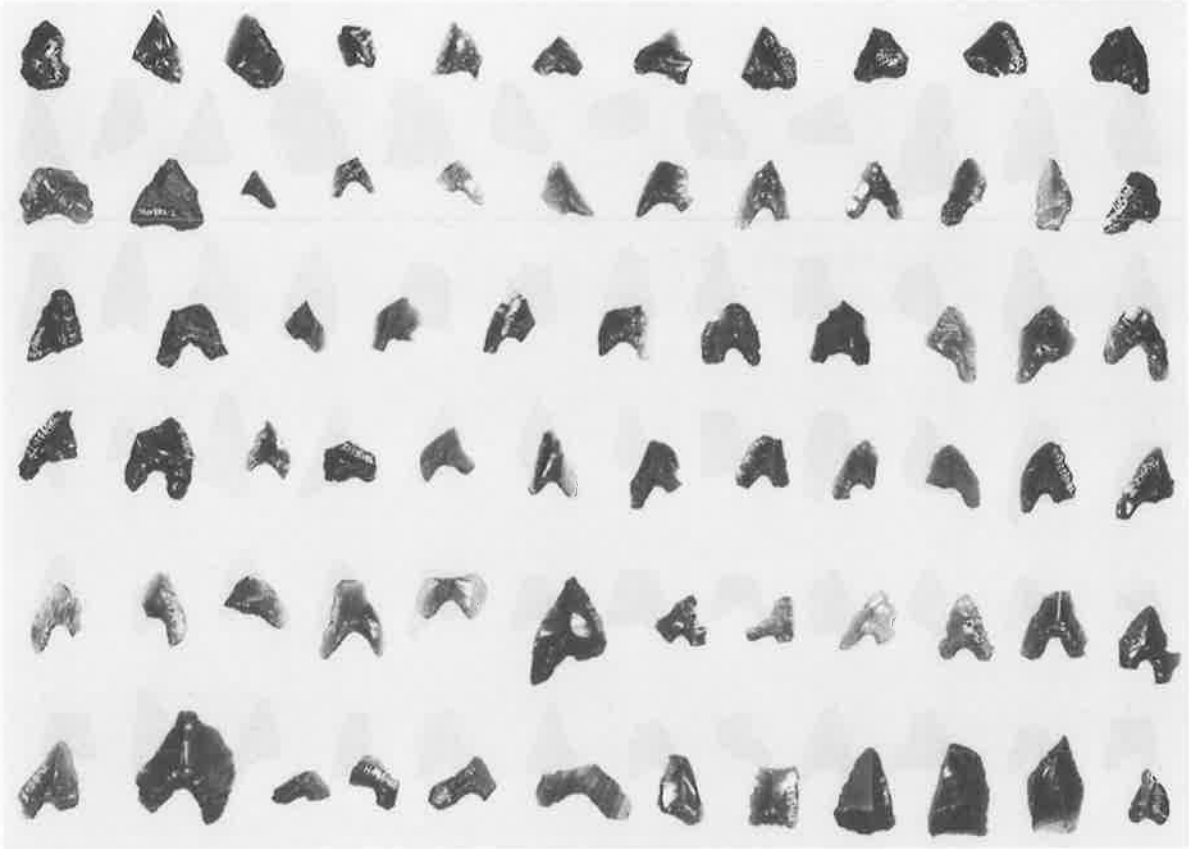


B地点出土遺物３

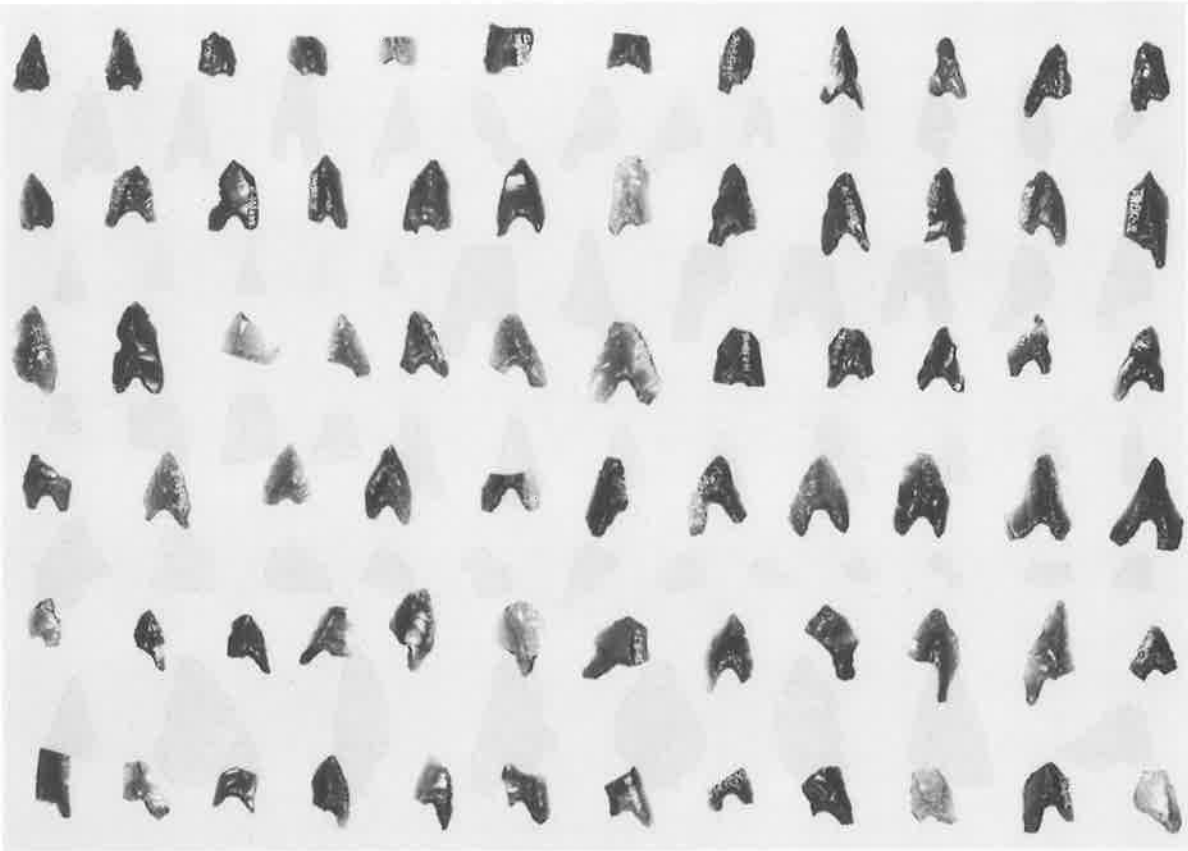


B地点出土遺物４

図版18



B地点出土遺物５



B地点出土遺物６

B地点出土遺物7

B地点出土遺物8

図版20

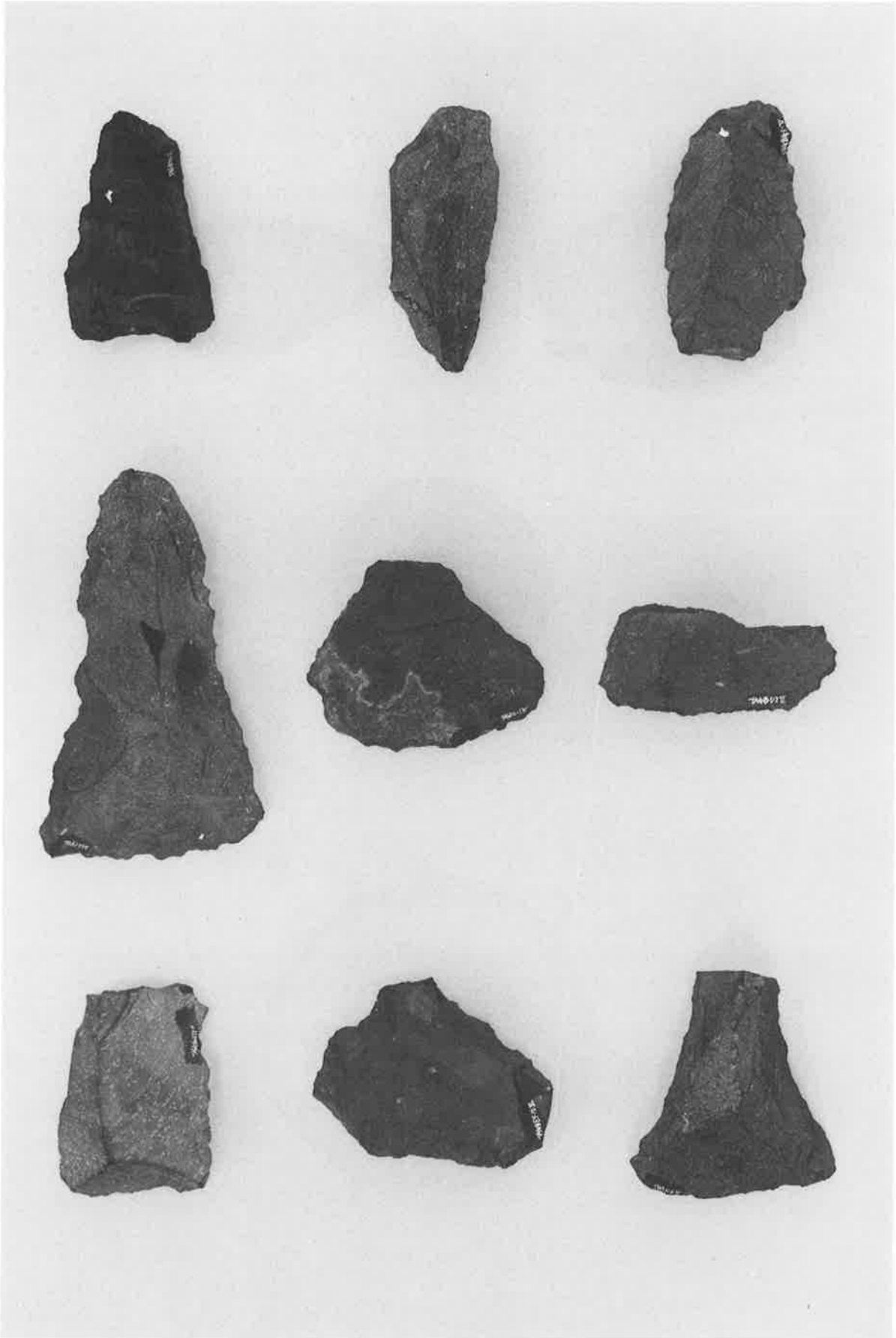
B地点出土遺物９

B地点出土遺物10

B地点出土遺物11

図版22

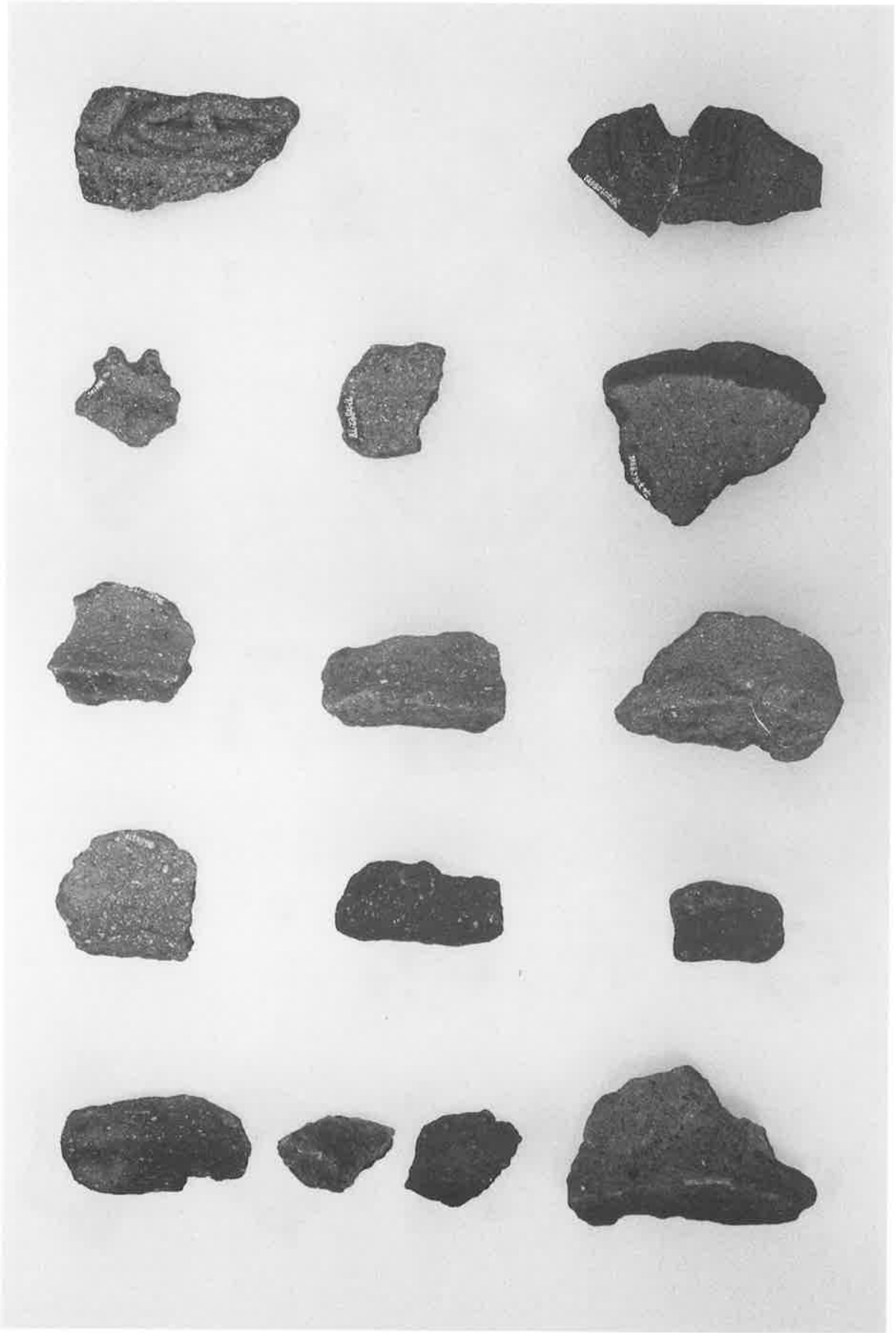
B地点出土遺物12



B地点出土遺物13

図版24

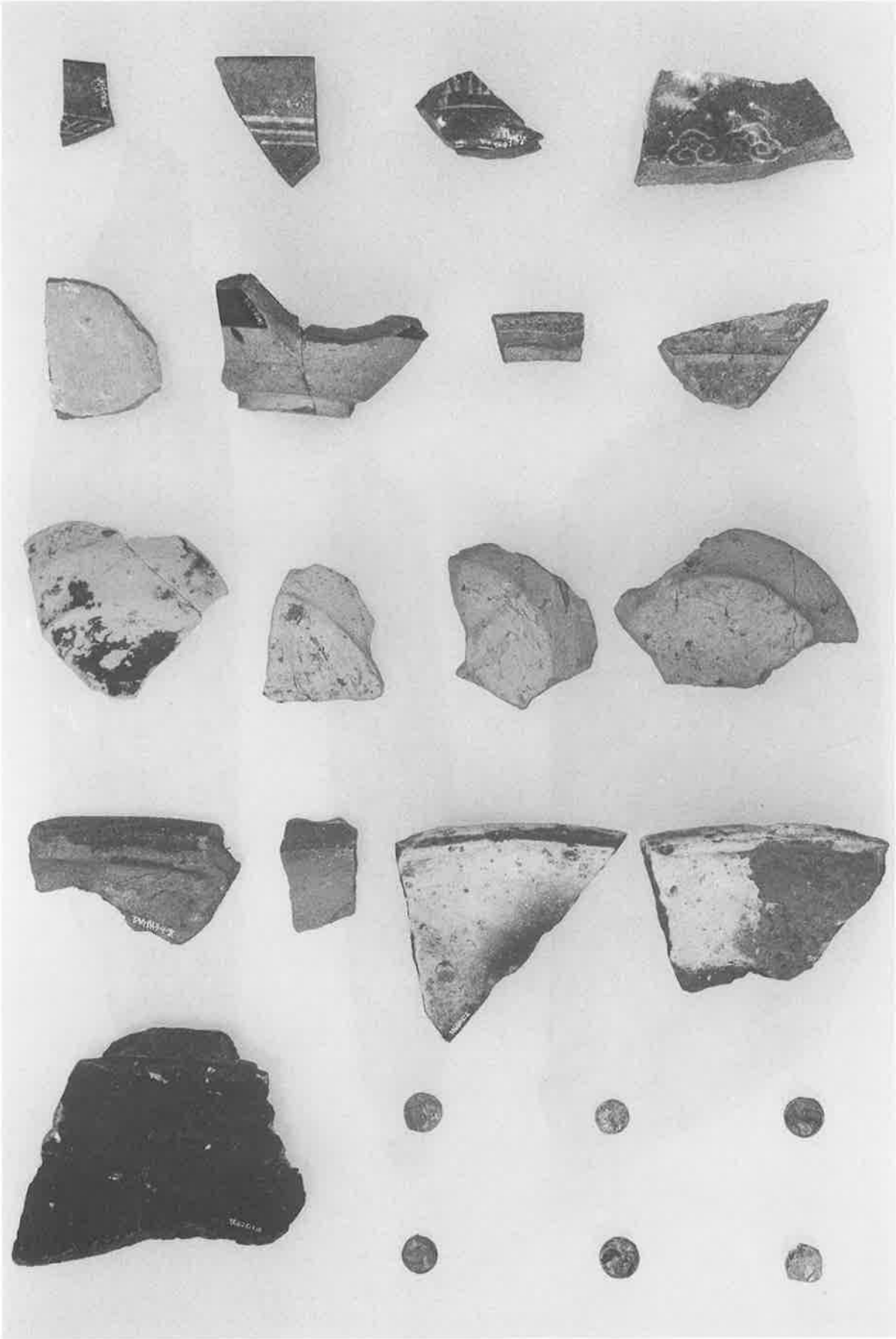
B地点出土遺物14



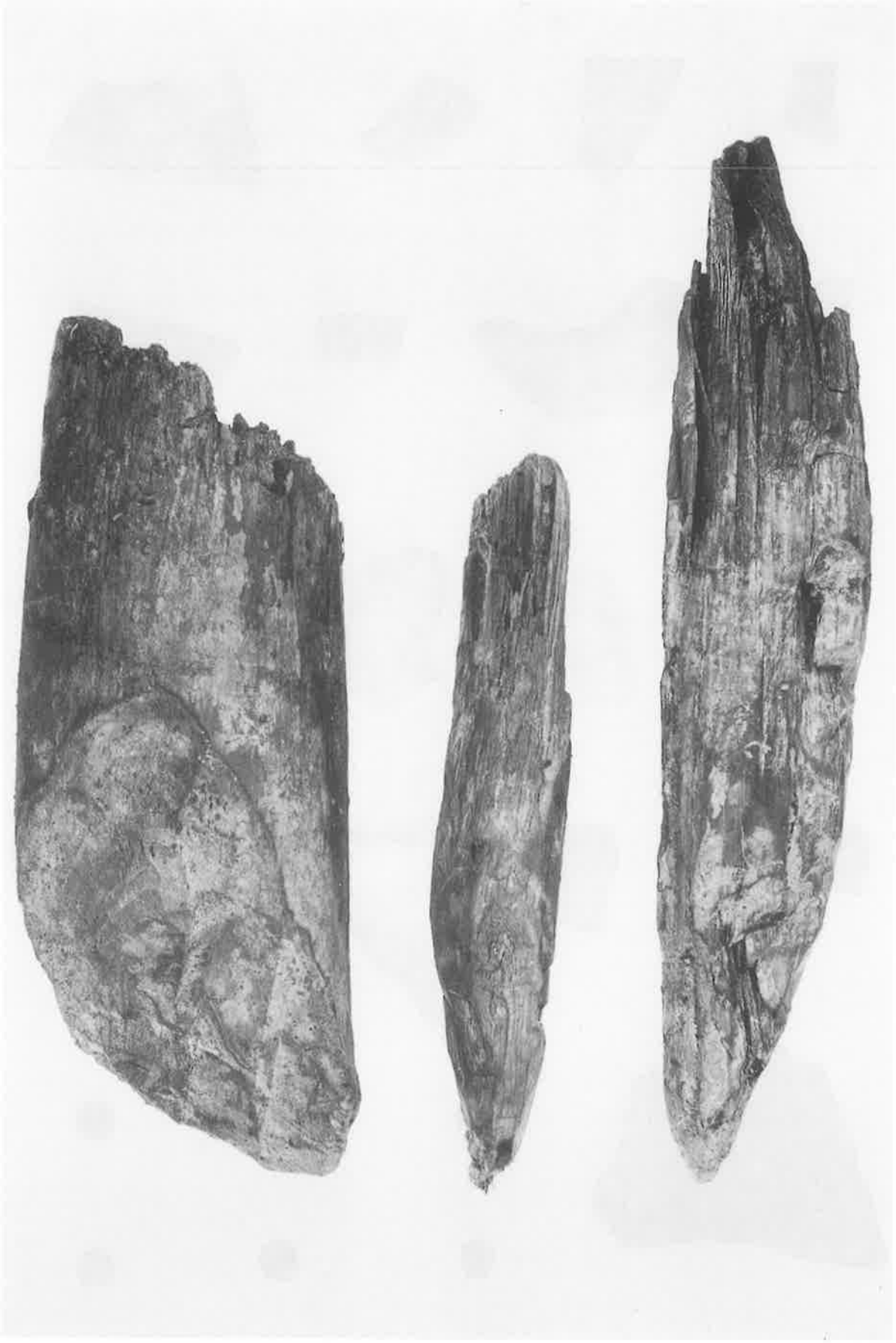
B地点出土遺物15

図版26

B地点出土遺物16



B地点出土遺物17



B地点出土遺物18

C地点出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たがわいせき
書名	田川遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松浦市文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	中田敦之・高原　愛
編集機関	松浦市教育委員会
所在地	〒859-45　長崎県松浦市志佐町里免365番地　TEL0956-72-1111
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たがわいせき 田川遺跡	ながさきけん 長崎県 まつうらし 松浦市 みくりやちょう 御厨町 たしろめん 田代免	42208	61	33°20'～ 33°20'10"	129°39'36" ～ 129°39'45"	19941212 ～ 19950328 19950629 ～ 19960325	674.55m² 1232.05m²	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田川遺跡	遺物包含地	縄文 中世	土壙 掘立柱建物跡	縄文土器 石鏃 剥片鏃 つまみ形石器 垂飾 弥生土器 輸入陶磁器 土師器	

松浦市文化財調査報告書 第12集

田 川 遺 跡

発行　松浦市教育委員会
　　長崎県松浦市志佐町里免365番地
印刷　株式会社 三光
　　佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1